「片似名」モ・モ・モ・モ・モ モ え (モよ 【毋より)。今(茂より)。 人・人(无より)。 そんんモより)。 き(変より)。 サ・ 門・間・開・関・木・目・勿・物・梅・裳・喪・藻・ **咦·謨·蒙·儛·屯·鰈·率·苑·谟·望·忘·文· 李體 | 【燕葉似名】伝・光・浴・茂・森・森・** 列の假名。伊昌波歌にて第四十五の假名。 五十骨爛にて第三十五、卽ち、臨行・於

れば、前は三重になるを、後より前へ取り

を表はせり。今もの表はす費は 爾は訓オモなり。 これらを假りてモの昏 師に異音メ·古書モイか、裳·寝·際は訓モ、 ーン、木・目は異音モク、勿・物は晃音モチ、 年は漢書がり・吳晋ム、英・淡は吳晋マク、 、表替的假名識にては (イ)子音皿と母 表はす骨一母・邦・茂・墓・存・機・災・衆・ ・忘は吳耆マゥ、文・門・問・聞・悶は吳晉 ・无は異音を又はよ、毛は異音をウ、課 こと。親疎によりて日数に長短あり。推 千日の間、憂ひに沈みて内に 飾もり居る し、下ざまの人は高くきすべき也、若し袋 てゆふ 也、表の終より三寸ばかりあるべ の長くば腰にて折るべし」

「紅街のりら数の所ぎね、萌荒の裳の腰 喪 (名) 個人の死後、其の親族が若 のとし 裳壁 袋の紐の扇。魚塔紋

成る骨節を表はす。「もうき」(微氣)・ あるものは、子曹四とオの長音と より り。(ロ)一唇中にてもの下に彡又は1 方言によりてはンに變化したるものあ 於て4音に近かりしものの如し。又、 まの傑一の(イ)にあり。モ昔は中古に 骨ホとより成る音節。子膏皿の穀明は ъ 古紀「喪禮(デン)」 賦役合「遺ェ父母寝こ 回き

ь 糖精。神代起"T神つ茂·*)は造には寄れど にけるかも も、され味もあたはぬかるよ独つ子鳥と なく早こと、わぎもこが 枯ぴし 紐はなれ 袋でなくもあらむを」同時放にても母で がごと。わざはひ。凶事。萬二事もなく

住宅のとおしゃる」 参りまする」 猟師八島『鴉が啼けば、る (刷) もはや。もう。狂言はいる、かう

一、歴史的假名遣にては

(イ)一の(イ)に

b が門のみた山椿まことなれ、唇が手腕れ 語。「見ることも出來ね」「飛ぶ島をも落 きふさはず」 回さへ・すらの意を表はす 同四 冲つ鳥むな見る時、はたたきもこ母 解かずて、おすひを母言いまだ解かれば 特1用小る器。記点太刀がを飛言いまだ ななつちにおちほじかる」 たびはくるしと告げやらまくも」同点音 萬二 吾がいはろに行か吧 ※人もが、草枕 (助) 間向じきまたる物事を並べ言ふ (助館) む≒器をいふ、古へ東層の方言。

る衣の稱。萬雪まつらがは河の瀬光り鮎)(然)(名)・国古皆、腰より下部に消く

製丝配『夜像裙/別/腰』

田古昔、男子の禮

に垢つきにけり

どまたびになりぬ、家の母(*) がきせし衣

(名) いも(妹)の略。萬言族とへ (名) 日古智、腰より下部に辨(

1(妹)「もらろう」『*!(朦朧)「おもふ」書

ーと競音するを常とす。「いもうと」サス 同じ、(ロ)一部中にあるもう・もふはモ

**(思)の如し。

智味を設め、又、精調を整ふるに用ふる路。 か、簡混鳥散)の異名。 も、狐をぬりゃむることはなるまい。 団 む・ひか 「深鳥賊」(名) 助け申さんずる」狂音共三何と問はれて 何かせん」神景阿藤の神殿の何十人もあれ、 語。「一錢も袴たね」「聲くも閒に合ふ」 はす語。「見なる何じこと」題とも・なり 舜はねにけ越えたりけれ」目との窓を表 行桁の上にて、大の後頭をかけらかけず、とナ」葉準平泉川中で産業のあれ程の せばき 意味を慰め、又、語詞を整ふるに用ふる語。 **平泉一気 酌寂へたる母、白髪をつけてら** ともったてもっとて・とても勢の窓を安はす

Sannaga 4)

> pp。本を選しるで、人人、皆りの、本を選しるで、人人、皆りの、主をの、同なな、同なが、という、と、大きの、大きの、大きの、大きの、大きの、大きなが、人人、教育のなど、大きない。 僧侶の腰に著くる衣。下文を見よ。玄帯り、腰はらすものから草を縫ひたり」圏 ぶを織りて、おほ梅のすり目にかたどれ うちいひて、裳はかりひきかけ給ふぞい け、左右に引腰(す)いい をつけて様にか (F)Attu-製装」法體裝束抄「一、鈍色を可」令、著次 **賽式「霧師法服中的第一級EIX」祭器和三家・** と哀れなりける」繁式部日配「袰はかい 止む、之を小腰といふ。 藤房写宮の君など 紐を左右の脇の下より前へ廻はして約び と得する紐を長く 重れて装飾とし、別に (H)atab (4)0000

も - とる (英 Motor) (名) [理] 電流の の船。 えねるぎー・を、機械的えれるぎー・に懸 により、推進器を題はして航行する 小形 い」即攻引も一番とらうといへ」

あーとる-る (英 Motor rale) (名) 機、後者を突流電動機といふ。電影機。 によりて動電子は避轉す。此の週報運動 ずるときは、電流と磁石との相互の作用 り。即ち、楊磁石及び粉電子に電流を透 【珠】磁力級と電流の方向と、之によりて 流によりて避解するものと交流によりて によりて誘機械を運輸せしむるもの。直 にして、其の作用 全くだいなも・と反對な ぜしむる態置。だいなも・と間様の構造 廻得するものとあり。前者を従流電動

生ずる環線の運動

梢の方向なり。左手の規則。 規定せるもの。即 幕根を運動せしめんとする力の方向は母 の方向に、中指を世流の方向に向くれば、 ひに直角を落すやらにし、食指を磁力線 び中指の三指を瓦 の方向との関係を

ある 英臥爾 (名) (衛 Mogol、日度 (名) 洋服の一種。 ふろってとーと・よりの~にんぐ-としる (木 Morning cost) 3600 前稲狭くして、前方の棲先を頸形にした のもりる地方より舶載せしよりいふ〕 洋服の一種。 ふろっしとしとより

の種類あり。 尺許り。此の外小蓮以衛・女で英以閉等 て、厚く大校心あり、一枚の大き通常方三 会様、程に網線を用ひたるを金も1る、銀織物の名。 擬子(タト)に似たる学績。 棘に のかかへ帶」団革の名。藤管河沙の類に 異二 異流色芝居「毛琉ペー)の存に、紫縮箱 爾、天竺附名、所、出之特、但。閃霰;而有。少 和漢三才國合与英队第級、毛字母、按英以一もうに(副)(もうは猛の靴りか) 漆山 は銀絲のみを柳回り合せたるものの類。 縁なるを鍛らしる。といふ。今は余縁又 前係/に

も一るおり 英以網織(名) (自動) もゆ(前)の古語。為け 【酚】あふりい

かいくか |梅花 (名) (もいは梅の唐

際位といふもの*母

行きたくもない」「高いも高い」「何時と

る部分を大腰と ふ服。腰に然た の後方にのみ間 に、腰部より下 角に引き進へて裾に 時は쬾化引きまはし、 上部に紐あり、考する に疊かて縫ひ附く。 杜六朝なるを十二戦 るもの。上は四個下 服の時、寂袴の上に著 動ると、立たせる妹が毛毛の裾ねれぬ」

精ぶ。 目古普 婦人の正裝の時、袴の上

ひ、共れより

(物) (概) まあ。よ。記当られたく母等の す母の も首への

もーたー・はーと (英 Motor bant) (名) も (接頭) 此の上。更に。また。いま。 【理」元斯又は 石油機器を備い、其の動力 をさかしみと、岩かきかねて否が手とら (なる鳥か」同"「はしたてのくらはし山 狂音がぶも一度、御前へ戻らずばなるま

もう一蒙(名) を終れく もう は 末だ なり 文だ を越ゆをよ飛ぶ餐」

りて降りしきる小哥。宋之問題「是日家 雨時、抠景入(岩谷)」 き場合にいふ。 り | 闘米相場 などの高低の、常に預期 に反するにいふ。慰秘じて、選の怒し

目+(茂)に同じ。頼政 死人の首を目に見ねば、心境の躱氣する。 太平記芸術試(賞に とて」庭園往來出「閉房職組、愁歎勞傷」

り來たる光は大気の鳥めに周折せられ、 もうっさら 向と異なり。此の差の稱。周折差。 るとと。 曲線をなして觀測者の眼に逃す。從ひて 釈測者が見たる方向は其の天體の真の方 整などのために如惑を起とすこ 闘忌ひ類ひで夢見

もうちん ゆう・ちゅう 一膝中(名)もちゅう(密 年天子蒙察于外二 られて、 中)に同じ。明 他處に漂泊し給ふこと。 左傳經路 天子の、離を蒙らせ

と立ち窓がる様。田心の晴れざること。 物事に味むきこと。運歩色素「鬱味な」 戦級。錦志四三黄胆在a線線上、倉費a泰 99-844 一点表珠 人智の別けずしてなるをいふ、信意・上野の方言。鱗斑 陽,西拜、概妙如,山、何日披。驟霧,哉一 恐歎、宗、散。蒙繆,候也」 庭期往來 五一良久 駒中の苦悶すること。東鑑三_{韓第}三年迷恋 もえかた

牛の鳴く撃。又、牛 塩のかき 曇りてく

をいふ、幼兒の語。選歩色葉、半卒詩婦場もう-もら(名、園) 牛の鳴く拳。又、牛 もうめい もうもう らきこと。洪震 一酸淡 1

やいを

もう(厠)間もはや。旣に。なほ。狂言もう 一毛(名)まら(毛)に同じ。 ふ、小兒の語。改選狂言は三横座よ。もう 最早飲まぬか、あお、もら驟でごさる」

配この上に。 も。一茶句集「もら一の川 ħ.

譲渡と独かき録 (名) 開源ほと

立ちこむる氣。日心氣の鬱陶すること。

もうを 「燃えが悪い」 もいを。いそめばる。

(の)高くあがる。狂言な地火焰と燃えまめたあがる。然上(自動で)もえて個 がって、身はやけ漆となり」

と。居らせい(武精)に同じ。

年でむ。生ず。萬六岩地のたるみの上の あえ-いづ 明出 (自動ご) 翻弄ぎす。 もの-いづ 明出 (自動ご) 翻弄ぎす。 人ぞなき」 ざす。思ひ生ず。新動振電二春くれば雲 字津保護式 もえいづるこの芽」 目心にき 早蘇の、毛要出(タイタム)春になりにけるかも の下草したにのみ、もえ出づる戀を知る 3 燃ゆる 有りさ

もえがら もえかへる 燃返 (自動) 数えたつ。 たが燃え返り、胸の母がむかむかと」 た。燃方 燃殼 ŝ 燃え惹くしたる

あたま 萌葱 も大-宮 萌木 (名) 若芽の耐え出でた るもえきのかけたし のひもときわたる花の木 ども、わづかな 黄と青との開色。もよ (名) 間(葱の萌え出づ

雪〕 梅花の模様。又、其の模様を繰りた

る利。下単筑「根北詩歌歌」の「松」、東魚「根北詩歌歌」

もつ (名、副) 牛の吼ゆる壁。又、牛をい くらきこと。敷除。「躱

事兄弟、只際職としたる計りに、」他務職をしてぞ立ったりける。 同世代第二執

倒冷地三分朝からもうもらと頭痛で、頭

※当大内の弥跡、大庭の椋の木の本に、騰 激微一回物料の朦朧と したる さま、ほん 又は小雨などにて薄暗きさまにいふ器。

運步色素 微微t。」王昌齡每 玉清啦上相 いりとしたるさまにいふ語。太平記ませ、

「若宮の御方、御もうもうよくめでたきと が砕ける」国語気の物湯殿上日記機等に

はちら かすみて晴きさまにいふ話。選歩色薬 もうりんくわ(名) らの御立頭なり 」 らるる」同時でお客の御かた、御もらも ふ語。 巨球鎖のたしかならざるさまにい 「朦朧好」国物事の不分明なるさまにい て、ないないの別たち仰さかづき寄らせ

【植】なつり(茉莉)の

もえぎいと かたしろ

萌您絲屑白

關寺堂供養配「佐佐木三郎 左衛門 尉高 光 (名) かたしろをどし(肩白縅)を見よ。相 (名) かたしるをどし(肩白椒)を見よ。

錦の直鑑に、蘭葱に澤温縅したる鎧に を越しこむ。甲根 盛変紀念と、 変地の 轍 萌恵觚に、他の色にて揶謁(註)の形

家儀式「多質四郎右衛門尉與此前也」

の貿易を定めずして路份を徘徊し、往来もうろうしゃか 一朦朧車夫 (名) 車 る単土 の者に强ひて乗車を動め、賃金などを食

葱)に同じ。字珠は蜂或もえぎ色のこうち

き一かされ

ける

始の被 一種。萌葱色の絲織。も

2

とし。盛衰記者に報じの一様質に動を終ひ

たる鋭魔垂に、萌慈絲縅の燈をぞ著たり

どの意義の判然せざるもの、又、繪数の輪 廓の不分明なるものの構。

由之 燃 (者) もゆること。もえかだ。 概念に似て、解釈かく、鶴と尾とは赤し。 類の一類。 韓の長さ一尺餘に羞し、形めわらざ」 (統) (名) [数]魚類中、硬蜂 色の句ひ被、林と革との二種あり。平治 もをきる燃切(自動) る剤かな」 は、此の下に紅の單を著く。娘災公 目の名。下を讀き萌惹色にし、次第に上 標底 萌ぎ 匂ひの 轍、鷽の 褐金物打ったる へ薄き色に したる もの。女形の装束に に」■女房の襲取及は懷氣などの襲の色 藁く燃ゆ。 曠野 5 燃えきれて紙垢を投ぐ

燃え遊くす。

のもの。津国女夫龍三火をつけて続立て め紀-Vib 燃種(名)火を燃やすため もたさをとし う中は火よ燃程よと称けばし 陳生有衣の下に萌悲経の腹怨」 とをどし(前郊綵練)に同じ。盛衰記二、 萌葱縅 (名) もえぎ

きくい ゆる具合。骤像太子精傳記「地獄の釜のめえ」とも、燃口(名)燃えはじめ。燃 割木にして、大焦熱の燃口よし」 もえさしのくひ。神代和『火蟻ほ』和乞-Vひ 燃杙 (名)もえ幾りの木。

名式嫌禿火除木也」 (鞣)燃代には火がつきよい たものは、像を断つとも、使あれば再び 舊狀に復し易きに譬ふ。假城佛原「燃 み重なり」 杙には火がつきよいと、又今川に馴染 一度關係し

もえとがる 燃焦 (自動!) 国火に焼 り俗しきは、数きの中のおもひなりけり とがれ」玉葉四三もえ然がれ身をたく計 る。字治拾澄ゴつきせぬ瞋悲の炎にもえ けて悪くなる。 代に火とは、この人の昔にかへる」 田苦しみ間ゆ。 想ひこが

(確)燃え杙に火 前徐の略。一代男三燃

れば めえぎ に おもだか をどす 萌葱緑海 もありぬべし、きれど、もえぎなどの悩け (51)なりともいふ。 枕当今は紅作はきで 共に萌責なるもの。又、数は蘇青、襄は縹 ぎ。湿疹色薬「綿ギ」 国扱の色目。安・裏

句之-15し (名) 燃えきらずして残りた 勝実"「鍛り寒さに、只今燃えさしを一口□素≒「くべたる燃えさしをおっとり」 醒 もえのこり。もえぐひ。後観記

もえあがる。 拾遺※5、鳥邊山谷に畑のもかと・たつ 燃立 (自動等) 嫌んに燃ゆ。 ぶ、越中区の方言・特権 えたたば、はかなく見えし我れと知らな

七をのとり 燃暖(名)燃えされずし 文、遠く燃え速なる。 新六帖「燃紙く香 の烟の時移り、羊の歩み今日も程かし」 といふ、されどもえはつかざりける」 もえ移る。枕は続い近き程に火川できぬを一つく 一燃附 (自動) 火っく。火

申安類の一種。健長一寸。健形、芝塚に 酷似し、甲殻は多少透明にして柔かなり。

あじも等の繁茂 せる 所に 棲息し、體色を

をことうらり: ・院(機ゆ。 野家配替代 『屋形蔵形は 建火 ・ 歴 ことうらり: 燃えひろがりて」 其の色に變ずる特性あり。

哀れとも見れ」字津保備だ もえわたる草 彼る敷きは春のさがなれば、大方にとそ 木もあら(か*)わ芥べには、山造にいそぐ あまねく芽ざす。移腹心門もえ (自動工) もゆ(焼)の口器。 萌没 (自動で) 一面にも

る。絶えず燃ゆ。心の中の苦悶絶えず。 わた-わたる 燃液 (自動) 火燃える id、あはぬ敷きやもえわたるらん」 玉葉市 一下にのみもえわたれども年を継て、わが 後振り当わが無の消ゆる まもなく苦しき しかぞふむらし おもひをば梢つ人もなし」 (名) はすば(選茶) をいふ、伊勢・美

「上長押などに、横に引き廻はす布帛。 案もかう 「帽額」(名) 置御帳の上方又は -下敷爾面轄一條、領子総士建二 江次第二、 一分の枚などを染む。御鳥位の時には獣形 を養きたるものを用ひ、繁団には有製の を細くして、左右の構造・下邊並びに観目 藩に、鍬として著けたる布帛。 同じ 布帛 くし。内蔵寮式「裝』飾舞楽「散』閏中四條、 を用ふ。後世の水引の蒜の類。ひたひか の方言。扇

もかうの す 新頻能 帆額。のつきた 肴館。荫黄の下駿、御家の紋のもからを、 いろいろに織りたりしにや」木瓜。 の上に著く。目(わのもん(集紋)の稱。

る簾。字俳保持占もからのすの中に、

もから 抹額 (名) にしたるもの。梅士又は「 は、ましてこはき物のうちおかるるい としるし」 、紅帛を鉢巻 冠の一。網模(55)

もが3-いばら (名) 【板】さるとりいば 第日、加永末解批甲二 賀茂の競馬などに、騎手 ら(破獒)の異名。 これを著(。衣服食)會

足を動かす。のたらつ。あがく。平家女もがく 「蜿」(自動®) 国際え苦しみて手 工面にならず」 - 氣を揉んでももかいても、身は裸なり、 鎌島≒もがかせて 慰む 気か」 書いらだ つ。いらつ。あせる。じれる。生玉心中 ■悶え苦しみて手

もがさ おおさ 痘瘡(名)はうさら(複数に 所じ、精紀計で展示を一天下忠・殿豆瘡 辞詞 矢死者多」 桑藤市県世の中にもがさとい 大死者を一大下忠・殿豆瘡 辞詞

ゆする事。霊師。長町女験切片然前の権もがり・ごと 一程諸・事(名) ねだり事。

もかざからね (名) 魚を捕る祭なりと 条くの舟。曜年 異竹集「浦こしの明石の松」 もいひ、又、もかさかは群り発生を義にて、

に長づれて"もかさか舟 も出でしとぞ思

す。素は長倒卵形成ひは長樹鵲形、株造 す。我が騰、暖地に自座し、又製質用とし 八樹屋の常務而木。高さ五六十尺に差了がし、贈八樹(名)【植】田窓科、豊 せる白色の花襖を具へ、穂氷花序に排列 に鈍蜉蝣を有し、五生す。 花は小形、無裂 まるとのき。づ

製の一種。 錐板を横に幾段にも重ね、鉄色がみ-がた。 最上形 (名) 錠の頭の . て敷培せらる。 木材に然具を作るに用 ひ、樹皮を染料に供す。

もがみとう 他がみったで もかみとうせる にて綴ぢたるもの。 最上順 最上独 最上胴丸 (名) 录 名 Ê 最上形の 最上形の

波、寛政の頃、出羽閣最上の人、合田自在もがみらら 最上流 (名) 和第の一 的當之方(其衝對古今類氏之所」未,發也、輝,思研,精,創意而與,樂除互用(以得)原合 無餘法,則未,足,以發,天元之妙數,也、乃 寒安明の館めたるもの。 鸚哥先生交参げ、 · 原會田先生中世天元績段之方、唯有·采法: P もかさき。

青菜を捌びき、細かにさき、魚の身を摺り 上流云 崩したる中に入れて薄たれをかけたるも

神代紀。「殯飲料」之處」字傳紀「見王以下、 一般 (名) あらき(残)に関じ。

2. 61 及重:庶民(不,得,替,治,死)」群院 もがり のみや 横笛 もがりする宮 おご 寮内屋領 しんきゆう。飯篷和「歿宮」

総留「金銀手にもたせ置かば、恐ろしき| を弘清(記)ること。ねだること。ゆすり。 餐屋・茂架・茂香籠・裳眼竹筒♥ ■枝のつを被≒取閉ご三重三重橋・模摩を粘ひ廻し」 要害を三所に構へ」信長記念(第)彼の城 奥羽永慶単記+11/4世 | 鹿垣・虎落をかされ、 と見た、もがりと見た」 虎狢どもにかたられ」長町女殿は『人籔 がりの蔭に厭れしを」目もがること。物 の。重井筒当門の戸明くれは徳兵衛でも きたる竹を立て並べ、物を掛けて乾すも か合はせ、継にて集く希ひ固めたる橋。

もがり-だけ 虎落竹 (名) 虎落飛り もがりには (名) 【植】うらじろ(表白)をこ 父とが、年切り増しのもがりごとし もがり竹びせ」 のよき枝あれば折るもうし、花の顔ひの

もかりをいね もかり、おね、薬川船(名)薬を刈る らし、妹が鳥かたみの爺に田鶴かける見 に同じ。新六帖「たづの鳴く夕物さるのかり」をぶね 一菜刈小舟 (名)前條 る、みぎはのたづの際さわぐなり」 ゆ」 拾遺報三藻刈り舟今ぞ汀に來よすな

もがる 脳節 (自動で) 張ひて理覧をつ もがる 張請(自動)前体に同じ。漢 松てよともがるれば」 氏十二段長生島獲「異議に及ばば計って 湊すに、藻刈りを舟も今や人るらん」

もっち 袁著 (名) 古昔、女子成長して 「北の宮のもぎの原風」源花室宮たちのも 以前に行ふ。同時に、重髪を改めて髪を きの日 軽ひ上ぐるより變あげともいふ。 拾弐章 始めて裳を覆る式。十二三四歳頃、精繁 副 (名) 船の祭本水押の名所。

と。なだら、似すること。食公三國名臣はなだらよる私」 他のものにまのると 「換擬」(も(教)はならふず(数) もぎ (名) げたうち(撃壌)に同じ。製造 換擬 (も(数)はならふ、き(数) 和船の名

あるかり、動淡落(名) 序實「廿日,模擬、實在,發性」」

木。枯れて枝なき木。源言によそにては もぎきなりとや定むらん、下に匂へる檫

もぎだら-もの もぎだら者一 劃先 (名)

矢柄の、節を削り落とさぬもの。太平記 もぎつけ 搾附 (名) 雪弓エの語。 と、実施 削りて」■敵の首を兜と共に取りたるこ ぱいとどしく、あたりを拂ふ八重櫻哉」 #141年間 箆の太さは尋常の人の暮日 がら にする程なる三年竹を、もぎつけに押し

もぎとる れで、本食者を養癒するため、貨物の店屋 の近-てん 一模擬店 (名) 同遊舎など もぎーとり (など)に概して変ぬに散けたる飲食店。

もちは(名)おくみ(社)に同じ。 のもぎね一かされ」 もぎ駅もん」同じ用捨なくもぎ取りて」

たれしむ。ひきはなす。用明天皇職人数のもち・はなす 「搾」群 (他動) ねちては 三引いて行く手をもぎはなし」 集 任於 "上樓

もきるり もく 木工 (名) とだくみ(木工)に きる。ねぢとる。 (性動き) 椀でぎ切る。かざり、深切 (性動き) 椀でぎ切る。 ねち

むく 一目 (接尾) 恭盤の目を数ふるに

もざたら 無義道 莫義道 (名)別

じ。瀬々できぬの色いと続くてつるばみ ねぢとる。ねぢて離す。若風俗『是非に感"之る。「搾取 (他動")もぎて取る。

名号。みだし。戀総司の主典(***)。和名" 日 (名) こかど。條項。曰標題。 (木目)の略。枕続終三作り伴のもく」 計法等一等二各省の豫定經費要求律、但し 「佐宮中華曜日、日」屋鎌第の精御上、項の 生隅田川 「木工・修理の廃棟梁」 くべきもの。 動物分類上の名目。絹の下、科の上に置 各項中各目の明細を肥入すべし」四【動】 **船別にして検此池用し得らるるもの。會**

いた語

職人鑑当はてもぎだっな」挑筒録す よな、もぎだっな所、一興一興」用明天皇 こと。雙生隅田川三此の投げ入れも己れ 邪慳なること。非道なること。亂暴なる だらなる人。冥途飛脚『きゃつは木で鼻、 無義道者 (名) もぎ

> 七曜の一。し 木材に割した

■木の業。

もくとゅう 一木張 ぼくきゃら、木張

によって名附けたり」 徒の來たれば、木毬を三つ投げ出 だせし 毬。木毬はは峰の木毬にて手毬なり、登 考期は十二京都五山の僧中戦級の数をよむに

柳ひ去る。散水集五もぎたつる桁を見れめぎたつ (掟立) (他動き) もぎ取る。

搾鳥 (名) 魔の揃りたる

(-2 % (4)

ら√らよ 一木魚 (名) ■寺にて腹種

にて殴く、中空にして横に 默示の認許。默認。 し置くこと。めとぼし。〓駄示の許可。 許し置くこと。答めずして共のままに差く、含よ 一駄許 日知らぬ風にして

互ひに金銭を醸出し、葬儀の費用に供す

妊したる女の稱。

かつもくから・ひしもくから・ほったもく ちにぢおとしもくかう・つるもくから・な の稱。もから。くづしもくからこくも せらる。||数所の名。 くわのもん(窠紋 は厚くして秀質なり。觀賞用として栽培



細長の梯形の匣の上方に、厚薄の度を調めて-15人 →木型 (名) 樂篇の一種。

(名)樂器の一種。

もの。棒にて叩く。音階ありて、高低相 へたる幅鉄き板を順吹にならべ亙したる 佛を唱へて絃雅す。繁華 田輪姦。奈佛路。 なる木魚を首にかけ、これを打ちつつ念 る講。葬儀の時、會員は紐を附けたる大

もソ-ぐう (木偶 (名)

でく(木偶)に

異なる者を發す。

展内、此の木瓜に打ち添へて」

もく-かう 一點考 沈黙して考ふること。「沈思黙考」 すに響っている語。世紀2周三郡之少家 (日本耕物)、一次の (日耕) 薫書するを、田を耕た。 (沈思默考) 日、我常自料耳。自然作日 貧、而好,學申時因窮若,此、何不,耕、王徐答

もくからくち 一木香花 もくから-はら (名)【植】前條に同じ。 新敬科、新敬美の奉登性小木本。 並に細 もくかう-いばら 木香花 (名)【植】 との化石して、自然に山岳の形をなするもく-かさん 一本假山 (名) 木の根な て光潔を具ふ。花は黄色の複鑽花にて芳 る羽狀複葉、小葉は細鋸齒を有し、袴にし 長くして蔓延し易し。葉は五小葉より成 の。五類俎「見」木假山一座「岩淵峰樹、皆 鈴の異名。 香を有す。すだれいばら。もくからくわ。 (名) [抽]前

もぎ(劉)に同じ。 字鏡 もくかう 木香 (名) 南部諸國より もくをふ 一木栗 (名) もくえうび 木曜日 (名) もく-たら 一木曜(名) もV-いん | 木印 (名) 木材に割 もく-から 木瓜 (名) 目(権]虎耳草(●まのあたり。めのまへ。さしあたり。 にして淡紅色を幣びたる花を開き"花瓣 ダ)科゙ばいくわあまちや屬の木本。 白色 ただいま。目今。現今。方今。 秋風、洞胞波兮木栗下」 | も、地黄に大根しらがまで」 液來の藥品。疑摩歇当肩に木香かたげて 田鉞の一種。 日曜日より第五日目の日。 ちえら(七曜)、を見よ。 のは。楚解之野搦婦兮

珊脚三紋で覺えし拠燈の中に果敢な半種 8 6)

もくぐうにん 木偶人 (名) 前体に タン・くわら 一目光 (名) がんくわち (観光)に同じ。「目光炬の如し」 城里見,木偶人與,土偶人,相風

Aしく土に埋もれなどして化石したるもの 人のしく土に埋もれなどして化石(名)木の、 もく-くわん 一木管 (名) 紡績機械の 一。粗粉機・精粉機・燃絲概等にて縁を祭

・ Vaん (木環 (名)・ 適りたる環。 もく・くれん き取る管。 木をくりて

コ人にて木根を二倍 もちあひてなす種 もくかん-たいさら (木 環 機 操 (名) おくけい 一木製、(名) 檜の木にて造 4/-げ (名)【権]む(げ(木槿)の異名。

美震稱「各賽」動符木製「」 儀式 左方を使者に變へ"其の課司に下して記

四 仰 木

工祭、台、作《木梗、核三寸、绘《內記

とするもの。 三代實験サトスティggサトスメff養イ団

の名附けたる、錢三百文の稱。類聚名物

異名 をつけて いへりとぞ # 第三百文。木

T		
שעט בעע	第一回行内配合合作物的でまた医学者未 教一回行内配合合作物的でまた医学者未 教一回行人配送 (1) (2) (2) (2) (3) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4	TABLE PERSON FOR PRESENT
やくさ	# 用 として敬ならるるが、本材に関連へは自生し、文明の	
あくせ	を一旦関連を一旦の対象をからしました。 ※ 大き 国 は (金) まなじょ。 めじ もくし ことととく さく 目標 (金) まなじょ。 めじ もくし ことととく さく 日本 (本) まない この (金) まなじょ。 めじ もくし ことととく さく 日本 (本) まない この (金) まなじょ。 のじ と (本) まない この (金) まない この (金) こととと (本) 日本 (本) (金) (金) (金) (金) (金) (金) (金) (金) (金) (金	
本へ本	いたない。一大屋(名)「天上太陽系元十八十二十三屋人里では、一大屋(名)「天上太陽系元十八八四県に、大海県 中国 大大八の県に、大海県 中国 大大八の県に、大海県 中国 大大の県に、大海県 大田 大大の県に、大海県 大田	_
もくた	安文前本: (金)	
もくの二一四七	サイン(人) (名) [株]にはことを持令木の	

木工算師

沙路

あく-の-さんし もく-の-じょう こだくみのすけ。職員令「木工 木工助 (名) 木工祭代 木工允(名)*工衆 もくかよう

ヶ(木英蓉)に同じ

世王含4木工頭「從五位下 稳積朝臣小東人寮中4助一人」 技紀は経済がず、正五位下久

きて飛び越え又は遊立ちするもの。 る閒」■機械機梁の用具の一。木材にて て、猛色所へくだして木馬に乗せんとす ざむきすかすは其の答照からぬ事なりと 足に石を釣り下ぐるもの。十期二人をあ の如くなるものに罪人を誇がらせて、雨 羅爲。婆駒;」■古昔の拷問の具。 馬の背 屬(人在(其中)行聯遊遇、隨(釐所)遊、其後 「始欲」點、患、零。其事、俞熙觀爲作。本 馬の模形を作りたるもの。縱又は横より あけ寄り、身を躍らせて其の上に手を突 に、栗馬の稽古に用ふるもの。 南史皇 |木馬 (名) 日本造の馬の形。 |木盃 (名) 木製のきかづ もく・ほん | 木本 (名) 【植】植物學上 もV-め 木目 (名) 材木の断面にあら もくよんぢゅう(名)【植】むべ(野木瓜) の異名。

も。唐魯県町駅木杯藤盤敷+物ごり、一本の人。 一木牌(名)木の札。ぼく

特問すること。月堂見開集+「大阪にて水 もくば-どめ 木馬 黄 (名) 木馬*にて もくばらい 一木防已 (名) [雄]あを もくらん 不綿(名)「道」ばんや(木棉)に向じ。 もくめおり 6人的-おり、木目線 (名) 布の表面 「木の葉の跡ある石=最色思うして繰取(4 木理。選步色業「木目45」東海道名所記 はるる、内中、あや。きめ。きき。もく。

E

ぜめ・木馬ぜめ、さまざまのせめにあひ鉄

(共、おち不) 串鉛由」

サる木馬を置く小屋。日前級服雨大神宮 もV以上・木馬屋(名) 利前ド発育 書立上書的宣木屬服一篇 登などを彫刻して、黒物の原版とする。 (名) 木の板に文字・ 木馬屋 (名) 神社に春村 | セドッ・語・運か色茶 駅駅計 | 菱暁える下、中谷田 | |わぐ-わぐ(脳) 歯なき人の物を噛むさ

「吁嗟默默兮、熊知壽之縣貞」

)。木に彫りたる版。

以來、快見に於て家語·三略等を很行せられて製の活字。右文故事高端來『慶長四年本製の活字。右文故事高端來『慶長四年本製の活字(名) もくはんずり、木版刷 れしは木板活字なり Ê 木版に

(仮木屋)に何じ。 木皮 **2**

雅遊遊録に屋官家に用ひ拾ふ木筆と云ふ ものあり、是れじつきなり」目俗筆。 曹銭 建隊子二 目じさし(学指)に同じ。 州事訴訟法職は「默秘す可き義務ある事)に同じ。明月記略は三以本筆書品 ·ひつ 一木筆 (名) 目できらで(魚 一駅心 越して替はざるとと。 【植】きくばてんぢく

もく-かうろ (名)

ち(職風)の異名。

「動」ひつらる

じゆひ(樹皮)に (名) はんぎや

もくよく 一沐浴 難を覆ひ身を洗ふこ 明沐浴中尚光。新惟,總衣二 論語 [4] 沐浴 按紀十二天平九一清 潛 沐浴 」 台配《安阳年 平 と。勝めみすること。身を清むること。 ふ語。むてむく。 ま、壓しつけられて下に動くさま祭にい

もぐら もく-らに 木蘭 (名) 「核】 もく-のふ 一木蠟(名)黄旗(三)の果實 4Vの 殿鼠 (名) [前]もぐらもち(題) 駅)の略。 より探りたる機、緩増・まっち・の祭造、共 草)の異名。本草和名『猿草蝠》」名義わりの異名。本草和名『猿声』かなむでら(茶 「篠草祭別」圏やへむぐら(猪殃殃)の異 (名) [核]もくれん

もくのふけ (名) 【植】ぎんらふばいの具 の他器具の題出しに用ひらる。

もくへん一木片(名) もく-くら 一目標(名)目あて。目じ | 本佛 (名) きぶっ(木佛) |木芙蓉(名) 【植】ふょ 木のきれはし。 もくらん 名。黄・赤・紅の雑色。きつるばみ。 想なるもの。

もV-は 一木母(名)(梅の字の個と 路,來、木公木母如何、壽曰、木公正做、歲、木 朝山豫学致造、楚、召、宋柳宗問曰、柳自和山 旁との略〕 ちめ(據二の異名。俗説辨明 の用語。さくらいあかまつ等の如く、材質 | 榕を木母と いふ説申#幽祗新聞に日、北 もくらん-ぬり 木蘭絵(名)漆器の 「ST」に明礬を交じへて染めたる券衣・直もくらん-15 一木蘭地 (名) 梅谷雄 五彩の輪具を以て鍛る、これを木蘭館と 懸などの地。其の色赤く黄を帶ぶ。保元 條派の命により寶戒寺の法具を彫刻し、

母正含,春、木公松也、木母梅也」

ゆくり・いくり (名) むくりこくりに同 のイリ (本理 (名) よくめ(本目)と 同じ。西陽種類「原野豊道原、工治・本・原 やりがいげん(将代言)の時。 (名) もくめ(木目)に ē

撫木といふ。き。ぼくほん。 本幹を有するものを喬木、鵙鶥(ロ゚)・榛奈 する植物の稱。赤松・郷の如く長大なる

花(元)の如く 短小なる 型を有するものを 多量にして、竪硬なる煎、即ち木質煎を有

たあらずして、養に)にこれと同一の義務 物の下などに入り込む。物の下にひそみゆびり-とむ 潜込 (自動で) 水中又は もぐりたいげん(三百代書)、に同じ。 を終むもの。 かくる。

もぐる 一部 (自動で) 圏水中にくぐり入 許可を得ずして行ふ。 根からもでり入る」回音だりに事を爲す。 入り融る。回物の隙間より投け通る。「垣

もくれらし(名)【植】惟子(北)科、もく の窓を表すること。運歩色素「默視だ」 らくれい 一日禮 目つきにて食様する 中行事上符領、各へ目禮あって被、参」漢

告くれう 木工家 (名) 宮内省 の被 栗繖花序に排列し、小形、緑白色を呈す。 省の内匠祭の主掌せる細工の事をも分掌 部、直丁、脳使丁の競員を置く。 後、中務 を掌る所。頭、助、大・少の允・驕、工部、使 に自生し、又、觀賞用として栽培せらる。 果實は核果、長卵形を呈す。我が例、暖地 或ひは個卵形を晃し、全邊、對生す。花は 費の鍛冶司"天長二三年の頃修理職をも 七、大同元年二月造宮職、同三年正月宮內 れいし腸の常縁液木。葉は草質、精則形 これに併せたり。こだ(みのつかさ。こ

■次條の略。 週越色の名。 經は爪、諱はんの異名。圓八陸]もくれん(木顔)に同じ。 黄なるもの。翹製の色目。表は黄、裏は (木蘭 (名) 間(地)ひなら

葉の出でざる前に開く。觀賞用として庭 聞に栽培せらる。しもくれん。

(膝)木漿子は白くならず 天性の機じ数 子の念味の大なるくりさげたる駅法師」 ならず きをいふ。 民のかまど「木欒子 は白く

もくれん・お 木崩地 (名) もくらん 像に同じ。字治拾遺「もくれんずの念珠 もくれん」ず 一木 欒子 (名) 【植]前 の大きに長きおしもみし

あくろく-がき 目録書 (名) 目録を て贈るもの。 四追物として、包みて贈る 漁沒官京地目六二 回轉じて、賃物の代り くろくそへて泰り給ふ」東鑑六安はHFでは6 書。字準保2周おとど家の券奉りたる、も2世紀 | 田道物など、品目を並べ記せる文| 文士、調《文學、書、目祭、納、倉、其筥代有、錄 就きての名目。かいでん(皆像)を見よ。 金闘。 四師より弟子に、藝術を傳ふるに に、先づ假りに其の品目の名のみを記し し時のもくろくの長級」台記元替はBRI会に

もくろみかがき **・おくろみ、目論(名)もくろむこと。** 校文及び税帳校文の一。大帳及び税帳の中くろく-ちゃう 一目 録帳(名)大帳 は小楠してやる目前見 請のもくろみ」諸襲太平記』 女郎の所へ 事要略至十七、思 目錄機」同時以及 目錄報 目錄を集めて一覧に便にしたるもの。販 目論書 8 もくろ

もくれん木関(名) 呂波字類「木工祭」。」 積紀於禮談里,始從,本工發更無問員三 伊 【植】もくれんげ

もくれ 一百種より成り、我が翻に自生或ひは栽 ひは乾果。種子は胚乳を有す。凡そ九屆一 ひは多数の心皮より成る。果實は肉果或しいであ 薬は數多、數列に排列す。 雌蟲は小殷或 六筒或ひはそれ以上の花獅より成る。雌 より成り、多くは花経駅を吊す。花冠は 萼は通常三箇、稀に二 筒乃 歪六筋 の夢片 ざることとあり。 花は通常常性、大形。 單葉を互生し、托葉は存することと存せ 花盛物、蛭子装頭の一科。木本。 革質の Vれん・くわ 木蘭科 (名) 「科」世 培せらるるもの六脳二十一種あり。木材 (4) (的) (的) (1)

| もく-れん-じ (栗樹)の異名。字治拾造「木練 (名) 【植】6

る物品。

らせ漆を塗りたるもの。盛期往來+月(鉄の花。多 ランろむ 目論 (独動者) (日識の字の 其の術なり難し」

州茶碗并木椀」北皮經二木碗壁上之、片聞 にある原宅。 西巴 目

もけい 機形(名)かたどりたる形。

「鮫翎密の鞘詰まり、栗形もげて頼ともに あり」吉野都女楠『酒くまさ、鼻がもげ ていにまする」 もさう

ま、ばんやりしたるさまにいふ語。太平中とり 一模糊 模糊 分明ならざるさ |中の| (名)古語。もとこの略にて、もと (作)に同じ。前げ一説、もころの略にて、如(作)に同じ。前げ一説、もころの略にて、如 白槃天詩「平明山雪白楼樹」 をとりに早けむ人し吾が毛古式)にとむし 記十五兵将大部門芥原掠、天、汗血地を模糊す」

附したる条掛(th)。扶桑粉記芸/nu/ 実塔 中こし 喪興(名)棺材を約るる小屋。 (沙といふは則ち棺を云ふ繋、棺をばひつ平他字頭頂骨(鹿の)」 藤添道菱抄井吹車「鹿 二扶、各三重、有《袋曆二 る與なれば開云ふ戦し ぎとよむ、症をはるこしとよむ中央疾に乗

めとよる(自動で)最らねりつつ行く。 もころ如若(接尾)ととく。 (壁りの子におくれ奉りてもこよふとと ひつついけば」源門かかる齢の末に、若 勿遠蛇(55)」名義抄「蜿蜒35」■ 見たたず と、恥ぢ泣き給ふ」 眩〕 「佩れ足は動かれず中のにげて倒れもとよ して腹ばひゆく。 遺ひゆく。 字津保藤上 紀『夜者者(stha 濃火」、薫町伸にするを晩 のたくる。 神代紀。「化成八季大熊師」 領 の母己呂(ダワ)、やさか鳥いきづく妹をおき

己名(1) は、いは人の吾れを見送ると立たりし母 てきぬかも」同三松のけのなみたる見れ

もたき女ども五六十人ばかりに、袋どろ女の駅に絡ぶ服。 榮整練写者 うきたなげり 一心ろり 一数衣 (名) 田植ゑなどする もといふ物、いと白うきせて」

を布談せんとするときは其目論見書に左 みの次節唇。設計整。 水流條例第三水道

男。同等の男。萬子如己男(2)に負けて 切ころを如己男(名)己れの如き

芋(23のこととしいははいやかたました 同吐かなし妹をゆづかなべまき、母許呂 はあらじと、かきはきのを太刀とりはき

猛者(名)まらざ(猛者)に同じ。

なる商人の非だでをもくろむといく共ご 計盤す。新永代蔵「元手なければ、如何 の事項を禁靶し」 心に企て引る。企つ。たくむ。

(名) 馬の跳(い)の上 |わ-さ (名) (普時、闘楽人の語尾に、もさ ゆき

もう 木瓜 (名) [位](付(木瓜)の異 中心の 一茂才 (名) もちさいます ·しが望みと、誠しく海男がになり 「田舎者ゆゑ、珍しいはやり歌、新しき嘲 なる補二つつけて打ち乗り」伽羅女な子 とりもさといへる者、彼せたる馬に大い 語。韓じて田舎者の卑邪。可笑記fffこえ といひしよりいふ〕 脳東人を嘲りいふ

- 茂才 (名) しらさい(秀才

* もざいっく (英 Mosnic) (名) 若色した もさい 硬き物質の小片を寄せ集めて園案を表し る代理石、又は色彩を有する硝子の如き こと。又、其のもの。 たるもの。 《募債 ぼさい(真似)に同じ。 他の形に似せて造る

|もざう・ひん 一機造品 (名) 標造した 類似して光澤ある淡黄色の洋布。木の機 緯をもて製し、印刷川とす。主として墺 土精調より産し、近年投が附にても軽ん に製造せらる。

あこと。できぐり。降唐佳話「暗中模案」 えば、あが手と附ける此れのはる母妻ご 又見てもやも」同旦草枕旅の丸寝の紐絶 にとり母之(四)て見るのする、家なる妹を をいふ、古へ東國の方首。萬二白玉を手)し、持 (他動) もつ(特)の活用でもち

(ほん)」萬三水傳ふ職の浦まの岩つつじ、 格。或は。萬一。もしか。もしや。もし 木丘(5)咲く道を又見なむかも.

にか音れかづらかむ」 知記上 群集日本化 (6度・軽使配) 対記上 群集日本 にか否れかづらかむ」蜘蛛は「難ち」(ないできる。飲明紀「任那者(突波、汝則無、致」 薫がも。 飲明紀「任那者(突波、汝則無、致」 萬かも。 飲明紀「任那者(突波、汝則無、致」 萬か

もし(感) 国人を呼びかくる時にいふ語 もしの事の 鉄はん時には、二つなき命を 事。もしもの事。 球原平家三末僧祭司「も ふ語の遊舊觀帖門姿まさん愛だるもし 国人と對話する時、阿の終りにつけてい 君に辿らせ

b 宇津保帽門同じもじを、標様にかへて製 文字 (名) 間じ(字)に同じ。 称りの文字を承け、次の句の 首に同文字

文字鎖

(名) 国上句の

もしほ の とろも 雅昭衣 譲渡を扱む

磨の前人」目[植]あまる(大葉藻)の異名。 の月かげおのづから、よそにあかさぬ復

は、もずのはやにへといふ事をして、生

なし(物機無)に同じ。 物體無 あたいなさ

飛

きさま。

もじの つくり 文字券 つくり(旁)に り一もじはよみける」翻文章又は學問。 も定まらず、素達嗚尊よりぞ、みそもじ餘 て参りにき」置字の数。古今旦歌のもじ るるじには、命もさながら捨ててなんと んにてだにゅゆし、ましていみじくとあ はあぢきなき文字なり」枕上よろしから ふとは忘れじとの給へば、たちはき、ふと づさに、かきも遊くさぬここちこそすれ けり」有房塾「戀は 唯ふた 文字なれど玉 見ろ」団かた(形)でいふ、後内の方首の時間 桴世床≒ ちっとは 文字の 方へも 趙入って Bことば。ことのは。文言。落窪ごよに りのいかなれば、下の心の苦しかるら **機門泵集康慰といふ文字のつく**

も竊みけるを中が揃へければ。 川水をし なよな質をつけおけるを、あたりの者ど といふ魚を捕る物を川に伏せて置き、よ のぎもじすり取る故に、見られそ めにし (名) 魚を捕ふる具。南瓜咄「もじ

枝をくるりと指立つる、玉垣の内の見え 布一巾にて蘇を張る也、玉垣の外へ榊の も一尺七八寸にても見計らひ、玉垣に白 尺計り久二尺七八寸にても、横二尺、是れ 程明け、態木の見ゆる様にする也、高さ三 方格子打つ也、前の方、満中三つ割り一分 意、俗にもじと云ふ、尤屋根付き也、四 様に榊をさす (名) 下文を見よ。早懸略記 玉垣

も-じ 文字 (接尾) 物の名の頭字に添 **育八里間王への仰文中時間もじ参る」** ていふ語。「變きもじ」「鮨さもじ」狂

文字扱 (名) 文字の

哉。歌がるたの如く、備と冠とは中に重めじ-あはせ、文字合(名) 一種の遊 「あとさきへ入らぬ文字あつかひや」 曹葉のあつかひざま。厭態笑

白拍子の上手にてありければ、香頭・文字 **うつり、心も質薬も及ばれず」** りの類なるべし。 して、多く取りたるを勝ちとするもの。 み、又、歩といふ字を持とよみて取る如く 傷出づれば魚傷の文字を思ひ思ひに取り ね筐き、旁で)は悉く並べ置き、初めに魚 (くし、才出でたらば合の字を拾ふどよ 文字移(名)もじぐさ 我經記五分子野山別して もしい もじし

もじらら 関を書かせて吉凶を判ずること。 (朝) もし(若)に同じ。 3 一の字叉は

一般。地上に傍を割し、銭を打ちて陳負すもじが入し、文字返 (名) 小兒の遊 200 上に然を割し、錢を打ちて賺負す すると 事によると。ひよっと

おはばといふ歌を唱ふる類の情報 らば、その終りのな文字をらけて、名にし 例へば、めづらしきかなといふ歌の奏な ものをよみ、衣錦にい ひつらぬるごと。 の字を承けて、其の字の古歌の音にある かけて 玉章の、女字ぐさ りして酵る 雁が よませられける」夫木二つらなれる翅を きりを歌の句の上にすゑて、折句の歌に

もざる。文字の使用。狭衣与今やうの手もじ-づかひ 文字造 (名) 文字の書 事物を設き起こし、又は直ちに發端に用めし-それ 一若夫(接) 燗を改めて他の 「若《於行心御陵內爾犯」穢世等事事也在止」 若 (接) 或ひは。さらなけ もしは。それとも。續後紀

じづかひ替やうにて待る」 打ちよろばひて待りつる、これは騒きも は、草がちに濃く薄く虚つき紛らはして、

(名) 【動】むじな(狢)の異

き習ふこと。文字の練習。 数均集東忘れ 文字習 (名) 文字を書 じと契りし文のもじならひ、かねて見え もしもし (版) 今日書きそ むる甘の薬に、あやしやいか にしかかるべしとは」出類集星観ひつつ

らけ、枕には「おはしまさざりけりとも、 「つれづれなる夕暮れ、もしはもの哀れな」 玉灰黒黒り鎌めてきてはおかれぬ心な 玉灰黒黒り銀めてきてはおかれぬ心な にもじむひする」 若(接)或ひは。又は。もし

|もじ-ひらなか (名) 一文学録。きなか。|もじや (名)【植】くろもじ(約様)の異名。 たか遠へたことのおらばこそ」 無松崎心中 る明け彼の」 から 見雨なひ物も、もじひら もしゃら 喪章

8

句: 女字札 (名) 新貝に数す ありたる後:それに押しるだ。女字札 (名) 新貝に数す ありたる後:それに押しるだ。女字札 (名) 新貝に数す の方法にて取りて遊ぶらの。 き、簡手の誰み上ぐるに從ひ、歌貝と同一 る札。之を今の歌がるたの如く散らしお もしゃーおり 唱ふること。(範唱の對) 交叉相機の関係より、経緯と緯線とた各した-おり 模彩機 (名) 統緯線の ありたる後、それに換して生徒が歌曲を

特み、沙水を注ぎかけて鹽分を多く合ま ・ 東磯 (名) 国海藻を養の上に を釜にて煮つめて毀したる鍵。萬二夕な めに汲む沙水。新古今は当もしほ汲む納 ぎに薬器ラマェク焼きつつ」 囲楽顔を 収るた せ、之を 舞きて 水に 溶かし、其の上澄(ホパ) もじや-くじや (名、朝) 悶著すること。 も如何と、お暇を乞ひましたれば」 機に類似する練物。れーす機。 離合粗密の部分を生じて、外觀恰も様子

一臭様お呼びなさるる時のもじやくじゃ ごたごた。もじやもじや。 旋鯉出世織師 (名) [行

めしや-しゅざ 一摸寫主義 もしゃ・せつ 一撲寫説(M Abbildtheo る、即ち、認識の非觀性の根據を主張より 在を正しく羨寫するか否かに依據すとす rie) (名) 【哲]政る觀念の異否は、實

に、花からじしらまゆみといへる文字で むるに用ふる薪。千載呉五月爾は費のもるよりいふ。著聞『弘徹殿女御歌合せ』むしき☆ 漢醴木 (名) 漢題を指っ を置きて連ねるもの。金銭の加く聯腰す しほ木朽ちにけり、前べに烟たえて程へ ね」新古今第二須磨の浦に養のとりつむ ふきほさで、風の見せたる浦の月影」

もりほうぐさ 薬雑草 (名) 間頭を探 薬鹽木の、辛くも下に燃えわたるかな」 きりさら(蓍草)の異名。 【植】あまも(大紫藻)の呉名。 ■[植]のと き集めつつうらみ聞こえ給ふさま」 観井の畑とをなれ」 狭衣! もしほぐさか きつめて見るかひもなしもしほ草、同じ 歌に多く書き集むをかけていふ。源むか

もしも、若(副)もしまた。もし。萬 の藻頭火たきまさるらん 今韓川神つ風夜寒になれ中田子の館の、費 なば、畳の藻磯火たく かとや 見ん」 薪古 「沖ゆくやあから小舟につとやらば、老(ス 松陰に出でてぞ見つる若経)君かと」問だ 一にも。萬二馬の昔のとどともすれば、 後拾遺の選一族の空よはの烟とのぼり

もしも の とと 岩事 不識の出來解。 *)人見て挟き見むかも」 ちらからなさるるかし の事があらば、取りあげ機の差徴にそ 萬一の事。もしのこと。 機図ぶもしも

大にして先端的

工模均こ かくる時の語。 もしの 重首。人を呼び 側線に遊駅の飲 駅に尖り 其の

れば、若やと人を恨みてだ見る」 く、爪また鋭し。 種類あり。保護 ず赤もず等の とり食ふ。大も 蛙・昆蟲などを 割あり。 尾長

明歌の教授に、範唱 喪中なるをあら 鳥の一。仁徳紀 もず の くさぐき 鵙草茎 鵙の草を潜 百舌鳥尽」萬一秋の野のをばながられ 早餐)に同じ。雌『萬古春されば伯勞鳥(タ)ること。帰中一説、もずのはやにえ(贈 らむ対があたりは」千歳の三たのめと 之草具吉(ない)見えねども、我れは見や

もずの はやにへ 別早公 貼の、蟲な **もず の にへ 鵙雲 灰條を見よ。夫木 呉秋の野にもずのにへさしいかなら** ださざりける時に、子規の來たる程に 郭公の沓手をとりてありけるが、天出 びかねつつ一無名抄でもずといふるは やにへたててけり、しでの田をさに忍 おくもの。散木集玉垣根にはもずのは どを捕へ餌にせんとて、木の枝に貫き ん、露ふき結ぶ夕暮れの風」 し野邊の道芝夏深し、いづくなるらん

もじゃもじゃ(名、酬) た。何やかや。丹波與作『もじやもじや 首へは気がもどる」 して飢棄なるさまにいふ語。目どたど 方に質在の、他方に 精神の 存在を獨斷的 獨立して存在する實在に置く認識說。一

政)に同じ。廉富配eggiet 総命上、文字版 もじよみ、文字譲(名) 目そどく(素 もしゆ 喫主 (名) 非式をする営主。 被、遊、之」 国漢字の熟語を直譯的に讀訓 搜祭私說有終「立。喪主」及稱水章/以赤(歸位)」 すること。念珠をおもひのたま、難林を

もじる 文字輪 (名) 武者などの形 きそへたるもの。類点 を文字にてかき、頭と手足をは絵にてか とりのはやしと誰む類。 もすりん・の略。

もす 後類の一種。形、鴨(パ)より小さし。初毛もず 百舌 鵙 (名)【動】爲類中、燕 茶褐色にして、頭部割合に大きく、嘴また 蹇 (他動き) 共の形を以す。

酒。和名学院が野など酒海也」名義抄「際でもそろ 職(き)『リー もそろもそろ (目) そろそろ。しづし

との山吹を見せつつもとな」喋然をなりとも知らずしあらば母太(*)もあらむ、 相見そめけむ遂げざらなくに」同ば失け づ。出雲風土記「河船之毛省呂毛育呂(522)」もたせらいり もだ あり 口をつぐみてあり。物質は 萬二中中に 駅(き)もあらましを、何すとか ざること。いをつぐむこと。だまること。 悦不,能自默然的一 萬二歌然不,有沉 ずに居る。だまる。 默す。 雄踏紀 胅 ごとことのなぐさにいふことを聞き知 (名) もだすこと。ものいは

なきやう。もたいなささう。 (物雑無)の語幹、枕三あなもたいなの事 さぬ旅枕、貸すもよしなし、もたいなと」 どもや」源氏十二段長生鳥炎『妹背ゆる れらくは少なかりけり」 もたいなき既合。 物體紙(名) もたいな

第1年などの寄生 て時島の気にとて罹るるを、もずの草

きたる蟲者しは蛙などをとりて、さし

もだえしに問

悶死 2

もだゆること。煩悶。 (名) もだえつつ死

駒を晒(す)として鳥を捕ること。下文を 見よ。日次紀事八八山林開園過經、目居、於 架頭、傍殿、衛竿」而執、蜗島、是調、落駒」 ぐきといふとぞいひける」

やだ-Vだ (側) 粉亂また温馨するきま

て」枕心小法師はちのもたぐべくもあら

土佐日配「舟底より頭もたげ (他動き) 持ちあぐ。もてあ

わ肝風などの高き」 あくを整

るやら、もだくだと居委崩れて輝もなし

もたぐ(接)の日

草の一種。いんでん革に似て、しばある は多く命を出ださずに、他人にのみ門だめずかんぢゃら 鵙勘定 (名) 自分 もの。色種種あり。袋物などに作る。舞 さしむるやりにすること。 西原関英斯智慧の恋にて、耐人の舶載せ

(他勧ぎ) 燃やす。たく。「火 もすそ 裳裾 古今耳いかばかりたどのもずそもそぼつ うる田を、君が千蔵のみま草にせん」新 神宗五月雨に裳裾裾らして植居 (名) 裳の裾云。又、衣

もを苦はず。だまる。味す。神代紀代不らもだす。 駅 駅上 (自動) 聞言ふべ

「けに飲止しがたき事なり」 空しくす。あたにす。 海童平家一本以中の を飲いってとともなく、物いはぬさきに否 直鉄陽(注答な)」萬年取らをしぬび取ち

れはよりなむ」屈其のままに拾ておく。

(atto)

保たす。目れてかく。寄せかく。特(他動き)〔令」持の義〕目支 接 (他)())

もっとっと」(則)今すと、。もすとし。狂 もずりんいうぜん(名)(一大韓)も 綴りしより、めりんす・ともいふ。もす。 (西班牙 Merino) といふ 一種の羊毛より 緑にて平機にしたる織物。もと亞細亞土 らん、銀閉も見えね五月雨の頃」 すりん・に染めたる左輝。めりんす次瞬。 より産出せしより此の名あり。又めりの 耳古めそぼたみあ・の首府もする (Mosul) 北「もそっと語らう」同様であるっと語 (英 Muslin) (名) 上等の棟毛

おく。寄せかく。たてかく。狂音胸を竹 の先に杉葉つけ、腰掛にもたせかけおく まげに同じ。終顧回一極一部の一種。木な 戸時代、大阪の女の髪の一種。 くるもの。「筆もたせ」「顎もたせ」目江 せ」回らたせかくること。又、もたせか 「あん 太郎が持 たせの竹筒を 胰めさしま どにもたせかけたるやうに住ずるよりい り物。持ち來たれる物。手土産。 持(名)目もたせたる物、順 形いてふ 在言此

もたせかける 特掛 もったいぶり。大麦をまりた。 いて唇たりしを、虎扨は持たせぶりと、ち (他助で) 前年の

むた-せる 特 (他動作) もたす(枠)の口語。 と僧くや思ひけん」

もたひ (名) 持ち様ふること。舞りてもた たいようとはるかって見る一関・創学員 「題語が選」榮鑵著でもたひのほとりの付 のたひ (名) 酒を入るる器。和名社 葉も、末のよけるかに見え」題・樹気

類の一種。橙は淡灰色にして、丈餘に塗め-だま、脆魚 (名) [動]魚類中、板螺めどふ。間 (自動ご) もだゆ(間)を見よ。

もだしもだ (副) もだえなやむさま、する もちたまふ。腹中和「太子所変の、命」 亭子院歌台 左のそうは、櫻の枝につけて 関、東北又は西南の海に多く産す。 するものあり。口吻長く、賤白し。 中粉のみこもたまへり

もちとたへ

もちこたふる力。もち。騰勵太平

持堪(名)もちこたふる

ゆだの。間(自動ご)べもだゆ・もだふと だもして、足も立たずして」 趣しき有様」若媒俗の上級して中間もだも るせなくさいなまれて、もだらだとして

保「驚きもだえ粉ひて、おもほすこと限り ひ苦しむ。思ひ煩ふ。もがき悩む。字津 由とあるより、もだゆの假学を収る〕 慣 雨飲あれど、字鏡に、悶困の調に己己呂太 一般 (他動8) 持ち來た

保留 とこに物し給ふ人人の中に、こともたのふ 特 (何重、・・・ 保ちてあり。萬門わが以在(ペ)三つあひむたり、持有(他動學)持ちてあり。 もなき娘誰れもたらひたらん」 持ちて行く、

が形見、特持元が時にあなずあらめや」 くやしき」同二氏十歳見ませ否が背子否 によれる縁もちて、つけて まじもの今ぞ る。低尹子首単岸なだれ岩にもたるる (自動ご) 「持たる義」 国寄りか

かかる。もたる。際氏十二段長生鳥巻「もたれ-かかる」「崇掛」(自動") 国寄り もたれ掛かるを突倒し」目依頼す。四 れとみ。流込(名) せずして他に依る。 源氏十二段長生島巻 相撲の手。

もたれる(自動) もたるの口語。 存世 もたれ(掛飾)に同じ。 「常住網ばかり食って、もたれるとか云

知」最異記"「種(元*)」和名は複米酸此方」 又は乾し置き焼きて食ふ。東鑑計三、種次日 となし得る米・栗・黍等の幕。字鏡「秣河後 「江開殿合」歌」併給、此併三色也」ある問 蒸して、之を搗きつぶしたるもの。 煮 (名) 〔もちひの略〕 粘氣多くして、拭きて餅 | 精米

もちっく 揚餅 目もちつきをなす。 (動物) 目指立ての併の如く、柔くふくらか 国政數多群れで上下し合ふ。轉衣養器

(注)餅は餅屋 併屋に餅屋に同じ。もち もちに つく 「箱に著くと餅に換くと 8「藪紋も軒に餅捌く比」-* 様子はづかしい時には袖を餅につき」 をいひかけたるもの〕搾扱にくし。柳

時。□もちの木の皮を削りて水に潰し、 煮て製したる粘り強きもの。鳥などを粘 や(欝屋)の鍬を見よ。和歌民の鼈(餅は ■(植)もちのき(糖木)の

2017 | 停光局もはや持ちあつかひて」 (2017)ひて三浦へ返したれば」太平記録(2017) なりけり」 盛衰記 製品男品関馬中華関略持和

もち 「かぞふればもちに二日は足らねども、先 竹取「は月のもちばかりの月」珍忠百首。和名「梨月路9」田陰野にて月の十五日。 かけ」和名写稿号が所以称。鳥也 りは空に満てる月かな」 (名) 〓もちづき(翠月)の略。

もちのひ 衆日 もち(室)に同じ。

もち けにたり、されど歌はもちどもにぞしけ **養任。負擔。國際負なきこと。持つる亭** 商ひ中的持ちの御方が値上げしたい新り 目木など買い持ちて相場の上るのを待つ 二つをくちにて出でがたれば、右一つ負 子院歌合「右は勝ちたりともか ちの御歌 とと。女穀油地獄º「錢・小別・依物の相場 **構へ交ふること。維持。「もちがよい」** ること。日水く其のさまを綴くること。特 (名) 目もつこと。執り支ェ かに、君をいなせで何をかもはむ」 萬寸十五日(注)に出でにし月のたかだ (名) こもつこと。執り支ふ

・香を外に漏らさじとし て高く上で、もたで、種様が家に供え場で、 (中間) に、対中にて軍範囲扇に対して、常の扇のた高く上で、もたで、種様が家に供え場で、 (中間) に、対中にて軍範囲扇に対して、常の扇の特別扇、特 佛『氣に染まね心の内の親子の蚊帳で色たる布。楊紫節川「戻せる」 五十年忌歌念 をもちあげて繋すきに見れば、前後の栗 だてあぐ。むやみにほめたつ。 形かけて精ながら説けたり」目ほめてお

もちあげる は あちあそび、玩弄 あち-あぐむ (自動") もちあつかひかね。 てこずる 持上 (他動ご) もちあぐ 3 もてあそび。も もちあそ

もちあそびもの ちあそびもの。 玩物 (名) 前路以同

もちもつかひ 持扱(名)もちもつか もちあそぶ一元 あつかふ。とりはからふ。国取扱ひに苦 字鏡集「象」。 一気 手・ くるみのとにかくに、もちあつかずは心 しむ。もて除す。新六帖三山がらの題す

助に所持す。其の時恰も持ちてあり。 狂の時から持合 (他動き) 丁度共の もちーあは 等の品種あり。何れも然とするに過す。 科、稷屬の一年生草本。栗の一品種。特Pち-あは、稲、粘穀(名)【植】宋本 に粘質なるものの得。 古利・鳥原・鳥腔れ

を脳外いて此所へ落ちたによって、何も特 の男名、もち・あはせ 特合 (名) もちもはする 間に を持合せました、針を致しませう」 とうけって、 (4) 同野当家の痛みに破しもちいび、餠飯(名)もち(件)に同じの数をおいてまねる。同野当家の痛みに破しもちいび、餠飯(名)もち(件)に同じる

場が上放れる下放れるせざること。「一

元記覧は経「御太刀は」 - 切所の語。上数れも下放れもせぎる相挙。る1886もだち(持太刀)"に同じ。 蛭川刺 | もちあひ-さらば - 持合 相場 (名) 収 高一低、窓に持合ひの範圍を脱せず」

つ。〓直段又は相場が持合ひの釈意にあ

打ったを目近といふ」 任首相巡それは常の持局、此の要を目近う す、骨籔十二、おもてを米にて赤くする也!

天井などにつるしお(綱。目餅を載せ、 または餅あぶり網など」 火にかざして焼く金類。もちあぶりあ

もちあみ 終網 (名) 細小なる魚又 物かる糊。四隅に竹を張り、枝にかけ、手物ち、あみ、持網(名)手に持ちて魚を は鰕などを捕獲するに用ひ、又は奥網の に支へて水中の魚を捕ふる様にしたるも いろくづを、のがらかさてもしたむ特綱」 の。 山家第里 見るもうきは鵜繩ににぐる

もちあみ-ぶね 持網船 らざるやらに組み機りにし、其の目の方 縁を片撚として背頭の機物の如くに機る 形をなすもの。 **と共に、この片縁を燃り合はせてかたよ** 一局部に使用する一種の精地。麻又は墓 8 条 河湖に 開湖に

合せがない」

わちあぶりあみ 併永網 (名) 永保 2

もちい 同じ

最後は私にあり。小なるを小孩行とい 100

もらかた 持方 (名) ■支へ持つ方 林にて紗機とせる微物。夏の凯者とし、もぢ-おり 緑 機 (名) 船掛絲又は麻 **麻繰なる**は法衣に用ふ。伊勢の津及び近 江等の産。

あち-がたな 持刀 (名) 自己の係く料 保存の方法。

もち-がみ 持髪 (名) 一度報ひたる髪 もちかへる 持替(他前) もちかぶ 特株 (名) 所有せる株。 もちっかぶ 特替 (他動き) もちなほす もち-かづら (名) 【植】まつぶさの異名。 刀、膝に引きよせ」 もちかふ

五日に関って食する小豆塊。後は鮮弱の 20-1 李龍(名)もっときの原語・3号がめ 翌期 併樹(名) 正日十 5點 得恵の驚。 (名)もっとの人の彼じ得談思田妻子(日愛と神愛とや中心は続回 ものよりい 持鸛(名)もの人の彼じ得 もちがれひ (名)【動】めいたがれひ(目 義に取りて鮮を入れたる粥。枕『十五日 を結ひなほさざること。(日愛〔れこ]の對) はもちがゆのせくまゐる」侍中群要炊食 「列見定考後朝、自『官廚家』献。併選|人計畫| では、餅菓子被、造可、然冒涎ひければ」

場の一年生草本。種子の含有物に粘力費 (名) [植] 禾本科、稷 もちっきぬ 級衣(名)もち続の衣。目 たるもの。前より鑑賞してあるもの。又、 うまれつき。生來のもの。 寓なるもの。事に餠として食す。 養草」しゃぎぬ・もちぎぬみにまとひ」

東持衛東有持済兼要利益は『造化理』、環八尺まはる(部) に同じ。親詞式状以『唐玉作等をしている。 特治 (自動*) きょ 瓊斯御吹传乃五百郡御統乃玉」 終始そのもの又

もち きり

もちいね (名) 【植」不本科、いれ屬の一 餅の原料となる。 似するも、種子は一層精力に含むもの。 年生草本。稻の一糎柳。形襞總て稻に贈

(名) 【梳】あんずらめ(杏子梅) 持家 **3**

もち-くづす 持崩 (他動き) 身持を懸 に身を持崩し、人にも人と云はれぬ」 鐵砲の藥を渡さんとて流溶る

もちぐわし 餅菓子 (名) 餅を主要 は四統新門の番をとどめ、中任切の門ととの併称。文昭院殿御賞紀二漢於、馬持組 (名) 特月組と特領組 (名) 特月組と特領組 あちくひ-がさ 併食笠 (名) あみだ り無ねべし」 **集票 餅食笠」** 明君遺事「御囃子物見に 仲間の者共龍出 たる材料としたる菓子。鰲菓子。生菓子。

す。持ちて次へ送る。萬二いづみの川にわちとす 持越 (徳動*) 国持ちて移 もちこし 持越 (名) 目もちこする もち-と 持籠 (名) ちっと(会)の原語。 もの。目ふつかゑひ(二日酢)に同じ。浮 かして」 世風呂雪やれ宿酔(は)だの、頭痛だのとぬ 化しきれずして後に残ること。又、その 解《漢語抄云、寒、母知許之』 (名) とし(奥)「に同じ。令集

持期他(なん)まきのつまでを」 目残して大 中に添る **まにて時日を經過す。■消化せずして青** へ送る。其のままにて次へ致す。其のま

ふみこたふ。維持す。持續す。 1代女=わち-こたふ 特堪 (他動き) 支へもつ。 ちこたへず」 「火第に寂しく"勸め飲けければ、親方持

おういつく 持済(自動き)いっく(長) はませませた。 把事を丁字形に附げ、把事を丁字形に開け、把事を丁字形に開け、把事を丁字形に開け、把事を丁字形に開け、把事を丁字形に開け、把事を下す。

もちゃ(持屋)に · お八年三月太教官第二十九號行政警察規 ・ お一と 持一區 (名) 受待ちの唯城。明 則第三章「持浜内の居民」 問編が持 返 内の の。南嶽鉾。もぢ。もぢり。 の雨端に手を掛けて晒しつつ孔を穿つる

もちとたへる 持郷

(他動言) もちょ

れんこと必定なり」

がうちの柱にせば、もちこたへなく家倒 記『蟲の蝕らた朽木の松を 根引して、汝

あち-ぐさ 餅草(名)艾の嫩素の精。 わち-Vがれ 持窓 (名) 所有するのみ する能はざるとと。「賽の持腐れ」

8

持

負擔の場處。展耳藝聽記「方方の持口へもち-くち 持口(名)受持ちの方面。 もちくだち 望降(名)(第代即ち十五 ぎるこに見せむと思ひし宿の横」 95-20つ 持小筒 (名) 江戸時代、小筒2機滑する西洋式の歩兵。懐中便要 一点を横滑する西洋式の歩兵。懐中便要 小筒 三百伎馬とす。彼中便要嬌製「三百伎の差別役(名)特小筒組を差別する役。 もちこづつ・ぐみ 持小筒組 小筒を以て輻剔したる瞬

住むもよしなし」生玉心中ぺ心もみだら かかる。一代女「思い鑑身を特別して、 高、都持小情組帝國役」

に属し、薬の間南敷岳の外に何候す。 慶 頭 (名) 持小筒組の長。若年寄の支配 わちこづつぐみ・の-かしめ 持小筒組 七月九日新規、御持小筒組之頭」 元治二り。 懐中便要意思之二 干 石高、文久三支り。懐中便要意思之二 干 石高、文久三支塵二年九月二十日撒兵頭と改称せられた 之閒兩敷居之外」

495-195 持駒 (名) 粉棋にて、手中 ゆちとはた 持小旗(名)手に持つ あちとみ 持込 (名) 特小旗ばかりにて」 年武鑑「御持小 筒租 之頭、若年舎 支配、菊 持ちとむこと。

あちこみれら 特込料 (名) 前係に あちまみちの 持込賃 (名) 持ち込みたる賃金。 あち-とむ、持込 (他動で) 目持ちて入 らして傳ふ。交渉をしかく。 育型*「つうと内へ持ちこめ」 国事件を齎 Š

もちごもる もち-ごもり 持籠 (名) もちごもるこ じこと り、産子精共死したるは、もちどもりも同に殺した」天神記。「女の身の矢先にかか 倭玉篇 精於 假娘酒吞童子与我が子

もちこらぶ を持ちごもって死ぬるを見拾て」 ・懐妊す。假 (自動!) もちこた 胎児を腹

あかと― あかり	************************************
ゆちづ	又自田水に福港の野田 (名) (を) (表) (表) (表) (表) (表) (表) (表) (表) (表) (表
からに	神商師の組織。 神商師の組織。 神商師の組織。 中語の相談。 中語の相談。 中語の相談。 中語の相談。 中語の相談。 中語の相談。 中語の相談。 中語の相談。 中語のは、
もちば	大学、
ゆびふ	取りて使物とするもの。又、近月の様を あられるのは別かっても用かってが かりない。時間(4分) 時を取けても時 ものなどの。時間(4分) 時を取けても時 ものなどの。時間(4分) 時を取けても時 ものなどの。 (種) に同じ、年代は実生のなりまったが、 を取りる。 を取りる。 を対している。 ものなどので、 を対している。 ものなどの。 を対している。 ものなどの。 を対している。 ものなどの。 を対している。 ものなどの。 を対している。 ものなどの。 をがは、 ものなどの。 をがは、 ものなどの。 をがは、 ものなどの。 をがした。 ものなどの。 をがは、 ものなどの。 をがした。 ものなどの。 をがした。 ものなが、 ものなが、 ものなが、 をがした。 ものなが、 をがした。 ものなが、 ものなが、 をがした。 ものなが、 をがした。 ものなが、 をがした。 ものなが、 をがした。 ものなが、 をがした。 をがした。 ものなが、 をがした。 をがした。 ものなが、 をがした。 ものなが、 をがした。 をがした。 ものなが、 をがした。 をがした。 をがした。 をがした。 ものなが、 をがした。 をがした。 ものなが、 をがした。 ものなが、 をがした。 をがした。 をがした。 をがした。 ものなが、 をがした。 をがした
あちゃ二一三二	新代和、王政時間北超 (表)

幕府の小吏。吏役別鉄『御持鐘之者十八時ちやり・の・もの 持僚者(名) 江戸 竹。甲陽軍艦「遠くは長刀、それより遠めち」やり 持鎖 (名) 己れが特料の びもの(玩物)の肌り。 きはもち柏」 もてあそ

やりぶぎゃら(柏糸行)に同じ。 大子集「併写に歯がたをつける木履かな」(名) 併に似たる等。 |心方「斷、殺者可」位將は、、樂耳」機等節用 用 (他動き) もちふ(用)を見よ。 (他動ご) もちふ(捫)に同じ。 3 喪に 駆する期

る(者)に同じ。駅詞式輔門持由麻波利(すち)ゆまはる特階(他動き)ゆまは (元)仕奉贈が幣用チ」 源氏倫泉節『棒柏・特号』

幕府の職名。持弓組を統率し、陣中にてもちゆみがしら、持弓頭(名)江戸 は將軍の左右にあり て旗本を発着し、平 時は江戸城本丸の中門・西丸の中仕切門・ の丸の銅門等に勤沓し、又、元禄以前は

もちゆみ・ぐみ 持弓組(名) 江戸時 の銀門等を警衞したるもの。脊中側日記 月城本丸の中門・西丸の中仕切門・二の丸 年號艦「御持弓頭+時水見 州防守」 構揮の下に黔軍の旗下を囚め、平時は江 を置き、肺中にては弓を持ちて特弓頭の とれを滾して千五百石高と定む。 寶永三 の支配に属し、初めは役料を給せしが、後 火附続競政にも出役したるもの。若年寄 Minder 安藤傳十郎、御持号粗五十五人 - 五人までを限度とし、各組に組頭一人 組に額制し、各紙概ね長カ十時间心五 特弓頭の下に屬する與力・同心を以て

和の観 持弓紅頭 8

(名) もちづつゆみのかしら(持筒弓頭)にもちゆみつつ・の-かしら 持弓筒頭 同じ。有司勒仕錄「御持ち6之頭」 職学像 御持弓筒頭、西丸二員多

もちよね 糯米 は、ことでは、 は、ことでは、 は、ないでは、 は、 は、ないでは、 は、 は、ないでは、 は、 っ人夫。持統紀「路司荷丁(ホキャ)」 頭二人、布衣」 ŝ (名) 【杭】もちいねの 【植】ははこぐさ(鼠動

もちよりき 租十人、犯米八十石高、侵抱人十人扶持、に勝する與力。更微三雄持與力五十人、一年勝する與力。 東微三雄持與力五十人、一多方・私りない 持風(記) 役上下、仰抱楊、元和九年癸亥六月明日始

たるもの。目もちぎり(痰錐)。和名吐痰、 け。我女三養難記一切生地口と似て異なる 鑽也紙」回そでがらみ(油摺)。回先の題 などなり」回こひぐち(観り)「に同じ。 皮、あぶり餅こがしやかとなる際耶夫人、 けなり、御猟師さまありがたかりし瓜の 中の詞を上するへもたせ聞かするいひか は語路ともぢりなり申申もぢりといふは、 をあられに切るなどとなす類。段段附 ば、次は兇もありを題として、ほそ長い耳 ふ翅にて、臼あり 枠あり 発もあり とあれ なす類。本もじりは例へば、年の市とい として、娘の子かみすいてゐる三谷町と を持つ土民とあれば、次は其の土民を題 は、丸かぶりといふ題にて、すきかまくは り・本もじりの二あり。字もじりは例へ をまた次の題として附くること。字もじ を出だして一句を附け、其の句の終り

もだり-は、「提別(名)別のもちれたる (千段藤)の異名。 (名) せんだんどう

すぢる。よぢる。ねづ。宇白をまった。 もぢる 振 (他動*) 目ねぢりもとらす。 りて馬の三つじの上より兵と射る」目他 神神経済天の一あるをつかんで、おしもぢ りもちり、えいなを出だして」なる平家本 叶はねば の語の口調に似せていふ。 らんとすれども、もぢり羽になって飛行も

おちった 一勿欲 (副) 官ふに及ばず。 おかまでもなく。論なく。ろなら。縄虫 であた。自然を「山門の御脈訟、理運之係、 の論に候」達歩色薬「勿論は」 の。携帯用のもの。所有の用品。鉄道 **首旦特料の鑑を比べさせられる」**

【法】法令の解釋方法の一、情味の軽徴なもちろん-かいしゃく一勿論解釋(名) 用ありと解釋するもの。 る禁止法の規定は、其の情狀の重大なる るもの父は分量の狭少なるもの等に對す もの又は分量の廣大なるものには當然適

よ。欽明紀「見」食物は母服御いただの際心」 野心方「春利之楽皆須にご」字は保護点つ (名) もちみること。 もちふ(用)を見

あちまる 特酔 (自動) もち扱ひに 前・康・費・須が ・康・費・須が ・のである可らず」 配すべな物に目に 餘りたる 不用人なりけ

もつ 持(他動『) 日手に執る。執る。 その狀態を繼續す。支ふ。堪ふ。 れば 受く。受け持つ。擔當す。 は、みこと母知のたち別れなば」 国引き る。維持す。萬気すめろぎのをす固なれ 概後紀「浙直心¥毛知段」」 国保つ。守 使ふ。艶!こぐは母知(き)うちしおほね」 記で一本すげは、と母多(は)ず立ちか荒れな たり」目役が物にす。所有す。所持す。 に英摘ます子」 瀬×五 弓やもちたる人ふ れ否がせこただに逢ふまでに」目用ふ。 か! 萬點自妙のあがした心失はず、毛弓(型) 萬「かたまもよ、みかたま母乳だ」、この間 持(自動。)久しきに堪ふ。 上下いかがせんと特際ひたり

3

(膝)持ちも提げもならぬ 虚理すべき方 (鎌)持ちつ特をれつ 互ひに相倚り相扶 (鎌)持たぬ子には苦野はせぬ。 子なけれ ば子の苦夢なし。

(휆)持ったが痢 金などを持ちて却りて (蹠)持つべきものは子 (統)持った病は癒らぬ 性郷は容易に改 法なし。如何ともなすべき忿なし。 めがたし。生れつきはかへ難し。 っても、特ったが織」 煩ひとなる。日本報袖始三人が憎み謗 是非無ければな

もっから-むすび 帽額名。 (精質)この俗稱。解説 のは子にて供し 山路を凌ぎ艦遊來鏡べき、持つべきも らぬものは子なり。 隣塁三何者か此の (名) もかう

やつく もっち 物品 (名) ものいみ(物息)に 多数の技を出だして精滑なり。静穏なる。 理順の褐色藻類。 健は縁状にして細く、海茲(名) 【植】そとみ科/海 運步追案「海雲?」 海雲。 酢として貧玩せらる。和名は水震雪」 卿江等に自生す。 食用に供し、殊に三杯 (名) かみやが もっこうふんどし 春犢鼻褌 こう頭巾にて百會を隠したる少年」 もっとふんどし(脊髄鼻標)に同じ。

わづくじる 海 総計 (名) もづくじる み(紙は紙)」の異名。語が には、こぶを煎出して、あまかりに入るべ

あって守領となりたる地。東盤井 巻の 向じ。戸倉家人奴、群·主及主五等以上 あっくわん 一沒官 ばっくわん(没官)に ゆくまんでん 「平家沒官地、未、被、補。地頭し 並沒官 親「所」生男女各沒」官」 賊姦様「野財田宅、 ~沒官田

むっくおん-りゃう 1月1、忠度於1一谷|被|誅戮|之後、爲|致官 牧せられて官領となりたる地。東鑑覧等 りつくわん-りゃう 一没(官領)(名) 没 くわんでん(没官田)に同じ。 飢、武能令,拜領,給」

もって とい 棒楽 丁度適然なり。 もっけ 一物怪 勿怪 思ひ殴けざる せっけ ちょうほう 一勿怪重強 もっけ 鐵气堅固なる橋。如此なるは物怪なり」 失りて、ほてさてもっけな群した」甲陽派 奥ある山の花を見ましや」 費。散り浮きし花の流れに辿らずば、 幸。過ちの高名。 諺百首和歌「もっけ重

もっけつおとす(旬)非常に怒る。婚婦 那でもっけの味ひ」

むっけがほ 物怪顔(名)不思議に思 は、廚海物怪額」 子狩邸記ぶちと容徴や称ねなされといへ

もっこにのる 乘畚 「江戸時代、死刑 を愛に捨て給ふ、これ三上山なり」 築き給へり、夜郎にあけければ箕雪)片方 記「富士山を造り給ひしに、一夜のらちに 選ぶ具。選步色聚「養子12」東海道名所 蓆の四隅に繩をつけ、土芥を盛りて 擔ひ に魔せらるる者、もっこに乗りて刑場に

もっとうつきん 春頭巾(名)もっと もつ-1) 一般後(名) 死役の後。死後。 形の、且は老父が心をも慰めん」 づきん(畚頭巾)に同じ。 よだれかけ「もっ 赴くよりいふ〕 死刑に處せらる。

一種。短き布片の前後を紐にて綴ぢ、足めっこっふんどし、春犢鳥種(名)権の 如き頭巾ならんと。雑紀後子集「もっと頭もつと」でなん、谷頭巾(名)形、畚の けて首へかけ、もっこふんどしと申して用 洪絶||下僧の結びめと前の方とに精を附 を蹈み通して紐の一端を結ぶもの。明良 巾かぶるあたまやになひ辻」

もっとはう りつうう 一物相 盛相 (名) 飯を盛 ひ鉄 具。多門院日記路上次は三番を行ふに、 行将飯をもっさらに感りて、散百人の蟾鉢 (天秤棒)をいふ、肥後側の方首。解明 春棒(名) てんびんぼう し(物団無)の精幹。略写真あら勿様なの

徴に

もったい-なし 物體無(形) 国正数な もったいなき 物體無(名)もったい

「餘りの勿體なさに」

ざいはひ。僥倖。舜世風呂气ふとした ざるさいはひ。窓外なる幸福。とぼれ

めっ-こ 徐 (名)〔持ち難の昔便〕 聚 領主

もっしょくし-さん 一没食子酸(名) の敷造等に用ひらる。 色の沈豫を成生するにより、無染いんき 可修性の壁。たんにん酸を稀硫酸と共に 球形の癥狀物。之より投食子酸を製す。 る穿孔によりて刺飲せらるる時に生ずる 熱して得らる。鹽化第二鐵と逢ひて青黑 【化】C。HメOH)。COOH 網絲狀の光澤ある

しゅしょくしては、後食子蜂の異名。

ゆっ・す 2文 (自動な) だっす(没)enに同じ。 虚敬記が次の者に親者を念ぜ は波浪に 成功されたのからん」 . \$3 もったい 物體 勿體 (名) 物物し もったい つける 附物数 物盤らしく見 軍廿郷と名に負ふ其の物體」 運歩色葉「勿體ステ」 閼姓爺」「さすが五常 沒 (他類等) ほっす(没)指に同

Ź

もったいし、林大ら もったいかは、物體がリたる態度。博多小女 郎波枕当路色らけとんで、奈配らしげた 勿體がほし もつけ、むつかしく見せてい せかく。弊體ぶる。一代女「少し勿體 ・サ大らし。 物健臭 形. もった

物附(名)もっつけ(物附)に 形なるあたま。李常磐一もっきらあたま 選歩色葉「機相・機相談を置」

有りて入牢する時は二別字へ入れ、矢服に盛りたる飯。 卑獄秘録於補後入「乞食科のっちら」めし 物相飯 (名) もっさら の奴が摩

もつけの さいはひ 勿怪幸 思ひ散け もっしら 一夜收 もっしゅ(後收)に問 じ。運歩色薬・没教の り一消り之科人間様に、もっさら飯被」下 もっさうめん を くふ 食物相似 繋がる。臭い飯を食

もっしゅりゃう (没收額 没取領 地。東經時間後至年間,美震図中没教地のプレラーち 一没收地 (名) 没教せる じ。虚衰記世紀者南都の信網解合して、ラーレゆ 一役收 ばっしら(没收)に同

もったいらし 物體 (形) おもおも もったいよる物體振(自動。

微ぶる。

も勿體らしき男、少少小錢も遭ひかね とどとしくあり。御前義經記「其の中に がること。もたせぶり。

もったい 容易

るるものぢや」四惜しむべし。情し。 東等/勿鑑ない、歌い御出家を、何と後にさ 様の恐ろしき 胅などを、わどりよ排逃し

き分にて釣り括る事、勿體ない事」駄録回 多し。辱けなし。かしこし。狂賞な「蟖 種と申す事、一向熊の⑫・儀なり」 国長れ 事、勿體なし」甲陽軍艦二今川衆、家康表

校業等が、吾倍子蠅と稱する小蟲の生ず りっしょくし 一没食子 (名) 棚の若き | 立つ。三河物語『飯犀を上げ、もったて、| もったてる 持立 (他助ご) 持ち上ぐ。 あったう 一没倒 冒級氏し倒すこと。 大平配け、此、九院を沒倒し、目没收して 大平配け、此、九院を沒倒し、目没收して 大平配け、此、九院を沒倒し、目次收して

門・勢派の庄領を没倒して」

2 ちげて左のもっつけに付くべし、様じて物に同じ。小笠原大饗祇「首を揃りては、かちっつけ、物付 (名) とっつけ(取附) 付と云ふ也」 りゅゅうつぶしにゅ 所にをもったててほる」 かい立て」昨日は今日の物語「山芋を掘

もってのほか あって以(籍) 外なること。窓外。案外。想像外。保元 放以下」四天の上に、かつ。「意気でもっために。其れにて、東魏に帰城時仍所知 て人柄もよいし 以外(名圖)思50 屋共れによりて。其の

もっとしい (名) もとゆひ(元結)の跳りのか もっと。し、もそっと。 然然以ての外の独籍」

もっとも 向尤なり」躊躇しやがて思ひ立たうずる 道理系経なること。保元書書の今夜の登りとり、七(名)道理にかなふこと。 もっとも かし 尤もなり。遺理なり。 にて餤。尤にて餤」 れはそれは日本・唐・天竺七萬寶にもか 武五人男『尤かし、殿御のいとしさ、そ

٢

尤至松

次條に同じ。

もっと

もったいなっけ

もったいなささう。物體無氣(剛)

御事や」同正式あら勿體なや」

Post-	関連を示して、
かいか	きもていかたみのの水なかりせば何はのの。ますなど、によりて、によりて、によりで、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は
もてな	ゆで、かしい。 (機動) かしづく。大切 体化・マッセ・マッチ しゅうとうとを用かる事体ともでは、一般動) まてっくの大いでは、一般動) まてった しゅうともを はないまた はっぱん いっぱん いっぱん いっぱん いっぱん いっぱん いっぱん いっぱん い
	く、他は、マトウン・ (株別で) 中部
\$25	東・給へとと 末の かった、 したを、

難すべきさまなり。字津保保原乳より始めどかし (形) 聞もどくべくあり。批

め、まじらひたるさまなどの、もどかしき

申とかうむ 本難(名)

酒母の製造に

いふはひが形なり

りとうた

本歌

(名) ほんか(本談)に

「元印銀」

の一匁は磯凡を六七十文に浦川せり。實年より正徳年間まで發行したる印象。其年より正徳年間まで發行したる印象。其 の色。 質之集「性の中に久しきものは雪むと」いう 本色」(名) 本來の色。 関有

暦十一年通用を廢せらる。貨幣駆錄時間

の中に、もと色かへぬ松にぞありけるい

におこし」

入れにして、二十一更の、三才開給を和板

| わと-え 一元之 (名) [字の形によりて

を假名に選ふ時は此のえに悲くなり。と

れをはもとえといふなり」正誤假名遺 といふは、やまけふこにのになり、これ

「えのかなは衣の字なり、さるをもとえと

おと-かた 本方 元方 (名) 関神策の一本方 元方 (名) 関神策の一本方 元方 (名) 関神策の一本方 元方 (名) 関神策

しはにおはすれど」 とどの御方は中のこのかみにて、もとが 國祭(して本なるもの。 弥衣与おほきお

(名) 金来行の一。金銭の取締を掌るももとかたかねがぎゃら 元方金奉行

葉の資本を出だす人。資本家。

り由時御勘定奉行支配にて、元方得金添行

定の御納戸御役所前へ帳入有」之」 の。明夏梅級「御金松行品時元方・排方とあ

党とかた-どうしん 元方同心。然数類異

しは、もとの心を 忘られ なくに」 江次館 どかしさう。 桑羅 set これをももどかし (副) もどかしきやう。 もかしきゅうた (別はぬ人は何か怒しき)

どらずして心いらいらし。 ちれったし。 思ふやらにならずして心いらだつ。はか

はがゆし。 拾造型与われながらさももど くわろくて、物見る人 いともどかし」 圏 所なく」枕当わびしげなる 車に、さらぞ

おとかしき度合。枕「さうちうが家の人のもどかしきさま。も

もどかしさも忘れぬべし」 げに思ひてし

もとかた-なんどがしら 元方納戶頭 『『第一章』 『元方何心八人』 元年武鑑「元方御納戶頭、布衣、七百石高」 (名) なんどがしら(納戸頭)を見よ。明和

もとかた-なんどしゅう 元方納戸衆 | 組頭 (名) 元方納月頭の下役 たる納めとかた。なんどくみがしら 元方 納月東 歳記聞。「納月頭統が八布衣」 **戸租頭。明和元年武鑑「元方御納戸租頭、** 組 頭 (名) 元力都戸頭の下得たる紀

92-35 本木 (名) 日木の本の部分。 もとかはし(形)もどかしに同じ。逐 **元年武鑑「元方御納戸衆、二百佞高」** (名) 元方納戸頭に屬する納戸衆。 明和 か色葉「突敷・突敷***

もと

な」国以前に関係ありたるもの。以前に は散りはてて、八重医 きかはるつぎ 懐か (うら木の對) 夫木『見ればいつ本木の花

明交ありたる相手の男女。

特る人。侍者。おもと人。重仁紀「左右

膝)本木にまさる末木(写)なし「禿指取り のに優りたるは無し。多くの配引者を 代へて見ても、最初に関係ありたるも

ち、後突鈍・後装砲の冪。(先込の對)

元込銃

2 前條

今新想を甘んじて舊地を去らば後悔あ し。八大傳与幹木にまさる梢木なし、 持ちかへて見ても、最初のに優る者な

。批評。字律保証系あなさがな、世にも多り、抵牾(名) 自もどくこと。非 っ旦吹入せる漢(の制臭しをなすこと。) しどしらんちん 臭選貸 (名) [商] もとごめしゅう **わわら**りを選する装置にしたるもの。即

に同じ。

特例本地『富婁那もどきの上唇』観光離離走"志賀の坊花に歸れと雁もどき』 地 元祿九年矢根鍛冶「さて 今日 はいかい郷 ること。まがひ。「鰥もどき」「松もどき」 ■其の物に擽してするとと。 共れに似た き人盗み出でたりと、もどき負ひなん」 どきあらん事はきこえじ」 瀬米里 をさな もどしかはせ 展爲替(英 Bedraft

依頼を受けてれを引き取りたる後、臨時すをいひ、臨時戻しとは巨額の運送品のといふ如く豫め約定せる率によりて制戻

約定限しと臨時戻しとあり。約定限とは

一箇年の終りに、運貨の總額に應じ、何割

四部の制かき館。 様。非難したるらしき態度。夫木は、抵牾額(名) もどくら

やましくもおばしぬべき事なれど」 もどきがほなる庭の菊かな

鍵貨借の場合に於て賃借の金額の稱。

の上をもどき」源数当いたくまめだちす 悪しく批評す。もとり背く。枕二人 抵牾(他動")さからひて素軽

一旦内園税を賦課せられたる貨物が輸出

せらるる場合。又は原料として輸入せら **監訓往來六月一弓者本重籐·漆籍·絲製等也** 大中黒の矢に、本故藤の弓の眞中撮りて」 きて、握りより上をば鏑簾と矢摺との外、

れたる貨物が加工品として輸出せらるる

といふ事致さねども」

利息 · (利率×期間)=元金

に同じ。領域置容素子"「此方商質の作法 - 元金を求むる嫁法。 灰の如し。

すべて照く強り込めたるもの。対策 太平

記六篇東六三十六差したる白磨の怨答の を他けるもの。解析一説、弓に離を紫く他

鳥図の歌。

元利合計+(1+利率×期間)=成高

・(名)【商」さいてがた(再手形)に同じ。

獨 Rückwechsel) (名) 【商] 天條の略。 に其の運賃を割り戻すをいふ。

程に二回へどをつく。極吐す。

又重ねて往來の者を迷惑さするであらら

もとなん元金(名)目前報を始むる もどはこころ、抵牾心(名)非難す 爲めに投ずる資本。正金は勿籲、地所・家 「風にあつずしをるる野邊の草の葉を、

> わどしさん 良金 (名) わかじる 本敷 (名) ほんじき(本敷)

【筋】もどしう

弓の振りより下を 重籐に、撮りよ

との報

局•有價證券等を翻することあり。 ■金 もときん の けいさん 元金計算【数】 もとしけどう 本重接(名)重藤の

に篠

で、元銀に十倍皆しでも、取り戻すの代り

姓翁後日合戦三天蛇中町太刀振り上げて、 ・大路に殺ふ。古今min 能の葉に降り積む 雪のられ重み、もとくだちゆくわが盛り はも ぐして、常にもどき給ふがねたきを」

あみし、 一句とし、 一元子(名)元金と利子と。元 官衆へもととども進上申し候」 算用 あり、信州・甲州ともに、其の筋骸代 兄首ふっつと切路し」 源氏哈泉節--元首 に拥付けて引摺り寄せよ」

もどしてがた

納すへし

の21-10名 基肥 (名) 作物を栽培する (mg*):] 東側配っては、「大島愛之、引い配方右」(mg*):] 東側配っては、「大島愛之、引い配方右「(mg*):] 東側に はら。左右。垂仁紀「天皇愛之、引。置左右 いほけん(再保険)に同じ。 もとしの **竹峰 各さむみ末の枯葉も落ちはてて、も** としのばかりたてる蹴かな」 後の如くになりて立ちたること。 頻河百

(B)

焼りをすること。又、其の役目。又は共 もと「じめ」元緒(名) 日おほるとの以 どが其の親分を呼ぶる。 東の本稿して、秋田・坂田・蝦夷・八丈まで 賣っつ買うつの人所ひ」■韓じて、博徒な る役目。又"其の人。雙生隅田川"「奥・坂 の人。金錢の勘定などの締めくくりをす

しはやめ鉄ひつる後は「押しもどすはゆめ、返す。福祉平家鉄路館が贈り、船車は押めへ返す。福祉のでは、他動き」 国政は、返す。始めどす もと-じろ 本白(名)失羽の名。羽の 娘)に同じ。本城(名) ほんじゃら(本 じろ・薄の羽わりあはせてはいだる矢」髪本の白きもの。平家計二百萬に動のもと に戻したけれども、是れを戻いたならばゆしき大事にて笑へば」大衆狂言に仏汝等 **飘往來水門都本白」**

の居る本陣。外衛(27/2の身) 初が日記版 もとする 本末 (名) 目もととする の句と下の句と。枕ば歌のもとすゑ問ひ るとすゑをとりていひかはし」屋歌の上 され想の心は」源立思はかなき事をも、 弓ひげばもとすゑ我が方に、よるこそま たるに」 国神祭の拍子にて、本方と末方 と。根本と校集と。ほんまつ。古今#三梓

見市三十枚を、本を揃へて一把とし、三類もとぞろひとうなぶ 本揃見布 (名) 所を附昆市にて結びたるもの。北海道波 会覧宗長公の事本情の宗徒の人人」 もとできん て事業を登むこと。吉野都女楠『巾巻

もと-だか 元高 (名)【数】歩合第に於 て、歩合変を得る低めに歩合を乗ずる数 あどったい 元手代 (名) もととほり とこっちの物、数本いらずの商賣」 切の大將中華人の懐、腰の廻り、手が觸る 元手金 (名)

りなること。 元手代 (名) 郡代·代官

もとだかの けいさん 元高計算【数】 **光高を求むる算法。之を公式にて数は** もととり ぶさ。たきぶさ。和名『世話』字治拾遺 頂に集めて束ねたる戯。髪の根もと。た

もどし-に 戻荷 (名) 到著先よりもど 治二十一年七月勅令第五十四號輸出酒類を排ひ戻さるること。又、その税金。 明場合に、前に納め たる 内関税义 は輸入税 どしかはせてがた(良賞替手形)に同じ。 脳の検査を受け防腸の際に反稅は之を退 類を我が國に輸入したるときは輸入懲稅 **反税規則購三造石税の下戻を受けたる酒 戻手形 (名) [商]**も ね。たれ。原料。 とだちも涼しうしなし」

もとちゅう-ざんだか 元帳殘高(名 もとちゃうざんだか-ちゃう 元帳残高 に供するため調義する概念。 【簿記】總勘定元帳に於ける各勘定科目の 差引残額。

もとどり はなつ 放影

斑を被らずし

南條に同じ。 南條に同じ。 元歩合高(名)[数]

元高と歩台高との和の稱。

催されければ」

けり」同型清暑堂の御神樂に、本拍子に 中事本拍子徳大寺左府納言にてとり給ひ (末拍子の母) 雰囲謡御神祭行はれけるだ

に布帛に書きたり 旨と稱す、使者の髷中に敲して造る故 花路家に蔵す、阿蘇家にては磐(20)の綸 関の兵を募る、其の審今に阿蘇・島津・立 る時、布を截りて伯耆の勅旨を傳へ諸 ^{運動1}足利尊氏、丹波集村に義兵を郷ぐ、かしめたる 綸旨。 史徴聶寶考證UVは 翻書し、使者の髻の中に隠じて持ち行 の耳目に觸れんことを恐れ、小紙片に

もとどりはなちたる」著聞対鳥帽子も て、鬱をあらはに出だす。枕然然「禽の

本篠(名)産の末の枯れ、

もと-つと 元子 (名) もとね。 好世 本調会だ。郷質の機體和「造雕・桑棒(など)」 教】 花として起こる。始まる。花内す。 に」本籍製刊 風呂」「薯蕷に斗(V)なっちやあ、元っこにな 萬二すむやけく舞し給はね本樹(たち)べ

もと-つじ 先と-づめ 本語 (名) 繊維など、製造 となみ。和名『前妻記』 られえ

めとして 元手 (名) 国商工業を貸む鈴 曹伽塔もとではなし、商ひもならず」 国 金。義經記三萬四三前ひを仕り飲ふとも、 もとて いら ず 資本不入 野本なくし きが元手なるべし」天神記当流人養ふ飯 俗当色道の太鼓持、心永ら物ごと堪忍録 よきもとでを儲けたり、不足あらじ! 狂 米を、淳奕の元手に入れたがよい 」 事を爲す根源の利益を生ずるもと。若風 はず、童すがりに打ちかけよ」選歩色栗のおった。秦袞和太宗「月のもとなり」はず「本答」(名) 弓の筈の名。射

「本情等及日」

もとで(元 略。甲陽軍緩結るとひをはらふべきと (名) 元方納戸頭と帰方納戸頭との稱。 代表の (名) 元方金奉行と排方金奉行との稱。 (名) 元方金奉行と排方金奉行との稱。 【前一荷物の發送地にて登送人の支持小選 もとばらひ-うんちん 一元拂運賃 (名) **柳脊嵯峨^典眼安配「元排御納戸頭、四人」** の後勘定頭の隷下たる.

影 (名) [本取の義] 髪を もとりら 元引 (名) 元金を売し引き 引きすること。特貌天泉歌軍法ゴモナル たること。資本を経験したること。差し と、揺紙を致して」 んぢゃうもとちゃら(穂勘定元根)の略。 もとたち 本立 (名) 章木の根本の生 ひ立ち。草木の根ぎは。源=生前栽のも 步合属+步合=元高 合計高+(1+步合)=元萬 疫苗+(1-步合)=元高 Ê もとにするた

> もとどり の りんし 唇綸旨 「鬱をとりて引きふせて」

戦時、敵

もしひばこ 元結箱

3

もとゆひ

ばと(元結箱)に同じ 及んで、元引きしたる此の命」

もとしひゃうし 本拍子 (名) 神衆に

の元の方に貫言の結ぶとと。又、其の箕。 もとしなり 一元生 (名) 植物の蔓叉は幹 もとな (副) 古語。故よしもなく。わけ (うらなりの對) にや毛登奈(た)あが懸ひゆかむ」 きる 萬里あひ見ずば懸ひざらましを、妹を 同性世の中は常かくのみと別れぬる、君 見て本名(た)かくのみ無ひばいかにせむ」 もなく。 臂一跳、むざむざといぶに同じ。 せで、もとどりはなちながら」

大船。ほんせん。(えだぶねの針) 俳諧新 もとぶっさたか 元歩差高 もとぶっさがく 元歩差額

3 3

數 2

| 第二十まいのとりてにはまる大ごしょもと| の前の名、射海な流気をのふしの事 佐地一切の(名)和撲の手の名。 作者物| の下のくすくせいに、 本別節(名) 矢押りょう の下のくきを巻きたる所(うらはぎの対) ためる茶。(うらば・すゑばの對) 萬二き後 **もと−ね** 元 直(名)商品を仕入れたる もみが飲らまく情しも もとねが きれる 仕入れの原質より低 ふけて時雨な降りそ、秋萩の本葉(**)の くて、損失となる。 もとく きょへ 東貫せる商品を解信とり本船に被み込むがねっわたし本船渡(名)【商】 思ひで」 萬当みもろは人の守る山"本邊 (**)はあしび花吹き」 一度行ひたる動作より、其の以前の狀態 取消す爲めに、直ちに下す號令。韓じて、 「母登祭(%)は君を思ひで、末へはいもを みたるによりて其の受渡しを終了するこ る大船。(うはにぶねの對) 選馬 本船の陰に小舟の涼みけり」■沖な 神液し。

本方 (名) もとのかた。

元 (名) 一度下したる號令を

もとほし、同一廻(名)目もとほす。 にかへること。顕消し。 置もとほり(国)"に同じ。新六帖三個特場 **黎邊。字館「於己以毛乃久止」 同「練屋景と」者**

矢はもとはぎのふし」

もとほす。配当かむほどほぎくるほし、と もとほしのはう 総歌 ほっえき(経 るしわざなりけり」節用「旋子炸」 の主白の際のもとほしは、うき世にめぐ 革穂の側」 験)に同じ。粉鏡三もとほしのはうに 列 (他動き) めぐらす。

めどり。まはり。へり。もとほし。推古 もと-ほとときす 本時鳥 覇みそれ」字鏡「椽綵社」 目嘴の脚に附く 勝」 萬吋大阪の此の 母等保里(約)の 撃な船 | 焼付(窓位) 中野頂援地加,養,両者,後替! ぞ」同ずのとのしば斑やふしまり、しま よほぎほぎ母祭本斯はじまつりこしみき あらなくに」 **たなれる子規。萬竺青丹よし奈良の都は** 日母登本斯(於)」 ふりぬれど、毛等保登等数須(*****)なかず ふるくよりなじみ ŝ

ふる

二番

能りなりて候し

ፇ

開る紙の金具。

もとほし。 和名井平町 旋子

もとぼろふ 同 廻(自動)前條に同 じ。記『おひしに、遺ひ母登第呂布(を咒) 問べの遺ゆ」絡・聯絡の■自由になる。類別係に 萬二萬山をいゆき廻流(ほど)何そひの ちてしゃ まむ」維絡紀[相[美奈宗]子藪 ほろふしただみの、いはひ母登高昭禄05 |もとゆひ-ぐさ 元結草 (名) ちまき もとゆひしばと 元結筥 (名)、元結を (夢後)の異名。篠目抄(年毎に思ぶの池に **柚ひぢて、もとゆひ草の草をこそ刈れ」** 物なり、きしもとひの入るなり」 ゆひばこ、是れも手箱の如く細くしたる もとひばこ。緑人記してもと

が名 機(単で

しただみのし 「舌もとほらの」

本宮(名)ほんしゃ(本社)

(他動で) 目さがす。称ねっ

り。 蘇くより。 元來。 もとから。 神代紀よりと」とり 固素 (名、副) 量初めよ へりみち。歸路。諸懿太平記「片岡が芝 ・ 日とじるとと。田か もとよりの憎さもたち出でて」元·本紀上「素語」知《其神泰思」 源南島つちそへて、 居見て、戻りに天 王寺へ」 曠野の新 数見 由前に 宿里 リハムまでもなく。勿論。 るに用ふるもの。「釣針のもどり」 四収 逆に出でたる尖り。物を刺して引き掛く 畑れ戻りに折らん柳の花」■薊の媼に、 の油の高さでは儲ける程皆戻る」

4 もどりあし 外)に同じ。著聞当山をりもこと「翻筋斗 (名) もんどり(顔筋) **うに娘びかへられたりける」** り脚」国取引所の語。下落したる相場の、 きげたり」蕪村句集、石高な都よ花の戻 伊駒姫が 馬手の引先 ばらり ずんと切り 足。鋳路の足。井筒紫平河内通三庚リ足、シリーあし、一戻足 (名) 闘隊る時の

めとめ うしない 永失 捜し得ず。見 **豊馬牛を求めてござるが」** 跳ふ。狂言**\\$\\$いで求めてまねれ」詞 もに行かましものを」目自ら招く。路砂 萬寸称見のだめこそ乳母は水はごとへ、乳 ずけむ」勢器「住む所もとむとて」 捜い

ひて、あらたに袈裟にまつはりてもり

失ふ。 續古今間5「念珠をもとめうしな

で、御信達は求め給へる命かな」四貫か。 も老いにけるから、我がせこが次達(なわ 飲めや君がおも求(ポ)らむ」同即悔しく 日欲しと精ふ。望む。要求す。請求す。 き山田のをちが其の日に雅等米(パ)あば 探る。萬年をつがへりしひにてあれかも、

かく 恐ろしき 鞍生石とも知 ろし召され

引所の語。下路したる相場の回復すると

もとり うま 戻馬(名)荷物を運び又 再び騰貴すべき狀況あること。

地方常袖集殿音楽四年村といふは柱古よ

本村(名)古世よりの村。

りの村也

相揚の戻りを覘ひて實ること。「戻り賣もどり」うり、民賣(名)取引所の語。 の人類 れて 遺名所配「もどり馬には、馬方ども乗りつ は客を乗せて送りたる戻り道の馬。東海

もとめる。水(他動で)もとむ(水)の口語。

(名) もっとも(元)に同じ。

知らざりけり

より。原來。

求めに應ず」需。自勝ふこと。

自ら遊んで。すき

請ふこと。あつらへ。註文。要求。「人のとめ、求 (名) 目もとむること。日

あとしもと 元元 (名、間) 自損も得じ 竹取「をかしき事にもあるかな、もともえとし、 尤 (職) 第一にすぐれて。 もどりがけ 長掛(名)戻りかかりた がけん、京極の蝦燭屋に立ちよって」 戻らんとすること。又、その時。

紙捻(引)にて製す。水引を製する如く棚 なきこと。原價に相償すること。回もと 古くは組絲又は麻絲を用い、後世に りたる戻りの人力率。 もとり・ぐさ (名) [権]をひじはの異名。 で送りたる、戻りがけの智能。 答を乗せむとり-かご 一戻駕籠 (名) 客を乗せ より大津への展駕籠に乗ったりや勘六」 てゆきたる跡途の駕籠。一代男『白川橋 (名) 客を乗せ送

もとゆひ きる 切元結 美を切りて付 そ、わが樊精はじのひぢて満れけれ」和名 月一なげきつつますらをの態ひ 能れこ を用ひて固く捻る。もとひ。もっとひ。 となる。胳膊馬元輪切り、かやらの姿と 見りがけ。一代男「亭主に一包はずむ、 もとりしぶね 字兵衞が戻り樣に、金の出し樣が早いと 叱れば、 戾舟 3 荷物を運び込

「警的成以、租火、安也」

むしる。銀金紀「傲恨を引き不用」治費この もどりみち かつりかち。民道(名)思りのみち。 付けより けるが、下りける戻舟に乗せて、億に関に の舟。盛衰記計ので舟に乗って上りたり 客を乗せて魅りたるもどり道の舟。

とへかへる。然忠集「ねしらなき夏野の 神童平家 ガガン 原の放れ駒、心のままにかけつもどりつ」 との有様にかへる。 俳諧古選書 又水に もどろ」国家へかへる。国藩に復す。も来るがStateのである。国藩に復す。も要単平家はStateのである。 る。長町女腹切点夜なべさしよにも、此 もどるも早し初氷」四得たる利益無くな (自動で) 最もとへ返る。あ

もどろ (名、副) もどろきたるさまにい る 衣手に、亂れもどろにしめる我が戀」用 椰の 垫の 懸し さと、しどろもどろのまだ 明天泉職人鑑当心にく さとゆかしさと、 **ふ語。夫木!!! み狩りするかきのねすりの** 斑なるさま、離れ粉るるさまにい

もどろは(名)もどろくこと。顧輔集「異 口(腹)音数(臓 艮(施)な)」名義抄「模な"」」つる」(型)みだす。 紛らす。 重異記"(仮)己 原こぐれして、しづくに袖をもどろかし かしたる袴」夫木当霧をいたみま野の萩 かりこさまほに定めし」 をいたみたまつむ 舟のも どろきは、君は

ひて強み行かず。顧頼集「もろとしの玉粉る。分亂す。字鏡集「模罪」目舟ためらり入へ(自動") 冒坂になる。 国風れ 低えずり つむ舟のもどろけば、思ひ定めん方もお (他動き) 日珠(な)にす。身にほ

80 20 BO

者其者 取り立てて言

にあらざれば、晋にはよも開き給はじ、 ふ身分のもの。感衰記が高い。 者その者

一渡)に同じ。五人女馬元渡りの唐機山をなったり、一元渡 (名) こわたり(古 もどろく とて、もどろかしむるにあらずや」 外だす。字準保護点表れをはからしめん 納文(け)身」名義抄「文計ない」目的はす。 都の枝の元段り し、伽羅、掛木の如し」李常努三直垂中『異 りものをなす。もどろかす。景行紀「推

| か「基門。」 ■特事の根本。特事の根據。 | もと] - ね | ■土蚕。 落礎。 名義 治承二年廿二番歌合「日数かる妹がいも ひは秋の夜の、長き恨みの慈なりけり」 さかり。最中。拾遺が水の面に照る月な みを数ふれば、今宵ぞ秋のもなかなりけ

蘇り 最中の月に似たるより名づく】

もなく 蛇(自動) 抜群なり、 ■他にすぐれ出づ。ぬきんず。

ものけたる皮。ぬけがら。和名は鮑総際のものけ、蛇(名)もなくること。又、 けをつつみて

警へていふ語。目魂の説け去りたる でたる跡の曖昧・住家などを、蛻なしに 皮。ぬけがら。もぬけ。 一人の脱け出

から。ぬけがら。目残の配け去りたるもぬけがら、 蛻殻(名) 目もぬけたる もぬけかは 蛇皮 (名) もぬけたるか は。ぬけがら。字鏡「気電数分」

\$1 \$2 **健。死骸。平家女護島『ふしぶしるめて** でひてぞよき 」 から竹割り中原散る魂のもぬけ殻」 かの小坂を片泣 きに、逝行く 茂龍(ごもた 者(名)ひと。仁徳紀「朝妻のひ (英 Money) (名) かね。金鏡。

★保護点京に住むにも、物くはせきね著で 於て物とは有體物を謂ふ」国飲食物の特 母龍(ク)を人に示すな」目特に、人類以外 鏡かけてしぬべとまつりたす、かた みの 在を思惟し得べき無形の總稱。神代紀』 解。おもの。 機體紀「共」器同」食(だ)だ)」字 を有する態體。有體物。民法等八十本法に の自然界の一都に て、場所的に 其の存在 「微具、此云』波羅別都母能(セ)」」 萬町 まそ し得べき有形、又、感知し得ずとも其の存 て一人當千の兵なり」 頭域寺には隱れなし、筒井浮妙明春と 物(名)国吾人の感官にて惑知

にて今ぞ悔しき」 拾遺の名 吾妻にて養は 果ぐましも」機體紀「博物(534)之臣」 国 も使はるる人なし」②事(!!)。配言山坡の れたる人の子は、舌だみてこそ物はいひ の立ちのいそぎに、父母に毛能①はずけ 言語。言葉。ものいひ。話し。萬千水鳥 つつきの宮に母能乃申す、あがせの君は

もなかの つき 最中月 陰暦、十五夜 **尤赛、暑寒年玉又時候、茶屋攜行得遊家」** 最中月店城中色白最中一片月、卷乘煎餅品 K 国を詰めたるもの。江戸名物時3T 竹村 「殿は源氏の最中に御座 します」 国〔形、 一種。焼きたる薄き餅を二片合せて、中

も-に-ひく-つむじ (名) 絹の名所。たひ(詞)を見よ。 之解」皮也」源度でもぬけたる蟲のからし 長の時期に外皮をぬぐ。和名は蝦煙的蛇 ■蛇・蝉など、成

昭介」 派之集「からのらすやらに、婦のもぬ ひいり。

もぬけ の から 総数 目もなけたる

もの に あたる 貨物 あわて恋ひたる もの に おそはる 繁物 夢の中に怖ろ たるばかり騒ぐるいと物ぐるほしく」 さまにいふ。とまどひす。枕当物にあ に思はる。不足に思はる。 ぞあたりまどふ」 源があさましければ殷の内の人ものに

るにやあらんし

参具物の音を開きて、天人の降り給へ

に、香樂のね。音楽。なりもの。字津保

もの に 左す 総物 一かとのものにす うたて 外なる人の心ども、物におそはるるや しき物事に使さる。うなさる。竹取「内

もの に に ず 不似物 常の物に似ず。 もの 化 なる 鉱物 然るべき物事とな 其の後まんまと物になしける」 仕とじ。成就す。一代女「のぼされ、 一角のものとなる。

ě

もののあなた物波方の物の彼方。 もの にも あら ず それと認むべき程 鬱の向側。■果然。後の世。源第章「物 源明真氏の君さへかくおはしそひぬれ はかなさを のあなた思ひ給へやらざりけるが、物 あらずおされ給へり」 ば中的右のおとどの御勢ひは、ものたも の物にもあらず。懸念するに及ばず。 し。宇津保幔葺めでたきこと、ものにに 普通ならず。他に比較すべきものな ものを みせる 見物 目にものみす。

もの の かず 物数 共れと認めて数へ もの の りしろ 物後 人の見ざること え給へど、物のうしろの心地してかひ人の見ざる處。 源度 眼りある御位を 立つも程のもの。敵に介すべき程のも ふ」史記等当物盛期聚、時極而轉」 氏直導介脈留「物いはずの早棚工」 たかず、實行の早き譬へにいふ。 北條 じ父はながらの模杖. 菓子の

げなり」別以る所、又、ものごと。出向き 見る」土佐日記「今は和泉鰯に來ぬれば、 事。是れぞと言ふ程のもの。物の敷。字けれ」器特に取り立てていふべ き 程の て行くべき或る場所。 古今共二物へまか りたるけしきも、いと心ぐるしくらうた ■ 思愛・邪鬼。もののけ。字津保時三でふ 海波ものならず」四わけ。ゆゑ。難係。 なき寮なれば、あだし草木をもの とやは ものとも覺えず」賞之集「櫻より勝る色 りけるに」枕当寺へまうで、ものへ行く るものなる」枕当ものつくとておきあが のつきねる時なん、ものの果りなどはあ 理。「人情はさういふものぢゃない」

ものの さとし 物絵

神佛の告げ。

もの の きとえ 物間 ものごとのきと

「覺えぬ世の騒ぎありし頃、物のきこえ じとて、吹田の輪物をとどめてけり」

ものあふ 物合物事能へ整小。瀬磨 づみ家の妹に、電乃伊波(元)子きにて思 く。いふ。萬戦ありぎぬのさゑさゑし み給ふ、ものあひたる心ちし給ふらん」 「明け暮れおぼ すさま にかしづきつつ 物言 言語を發す。口をさ

もの ひ な 特名 目物事の唱へ。

物名

ものののつみ物徴症(な)の病なるべ

一説、悪神の谷め。場「落窪「胸の

くのどかならでし て、おほやけざまにものの さと ししげ 又、物のけ。漢言単の中さわがしく に憚りて常陸に下りしを え。世別の職。とりさた。評判。類問 の。著聞写有季が小思、物のかずなら

もの たら 故 物不足 何となく不十分 ひ苦しも」首語製 もの のね 物音物のおと。とゑ。特

かり(雁)」

物の物の名。う(稿)つる(稿)らん(質)と まの消ゆと見ゆらん」佛路白娘夜話 の吉野の流に浮かび出づる、泡をかた もの。古今#当をがたまの木。み古野 の名を他の語にいひなしてよみ入るる 稱。物名。■和歌及び俳諧の一體。 ほしのもののつみかとよ」 缩く 侍れば と息の下にいふ、あないと

き(物)ひは(難)おし(駕紮)でひしぎ(奶

もの のみひと 物見事 みごと(見事) もののはじめ、物始の物事の始め。 欲にはせまい、物の見事に遣うて、世界 に同じ。一代男写何程持たせたりとも の揚屋に目を覚まさして もののはじめに、此の御ことよい

もの も おぼえ ず 物不覺 前後の辨 た、物もおぼえず」荣華四年すべて物も ねばえ給はず. 吹き、海の面のただ荒れに感しらなる へなし。無我無中なり。枕弍風いたら

もの をいふ 食物 言語を發す。 證明 す。役にたつ。「蹬文が物を首ふ」

1路)物いはずの早細工 手腕家は口をた 膝)物いはじ、父はながらの機栓 雉も鳴 條を見よ。北條氏直時分離留「物いは かずばうたれまいに同じ。 きじ(雉)の からき目にあはす。

(膝)物盤へは唇寒し秋の風 口は隣の門 (値)物がなければあささず 陳)物盛りなる時は衰み、月崩つれば鉄 草「月崩ちては鋏け、物盛んにして衰 くに何じ。つき(月)の條を見よ。 生えぬに同じ。まく(弱)の像を見ょ。 に同じ。くち(口)の係を見ょ。 蒔かぬ種は

なかりけり

(跳)物はいりて見づく (鑑)物には料館品もある 物事には種種 くぢやが、妾を親にさっしゃらぬか」 鑫山権現督助劒「何 と物はいらで見づ 思案の仕方あり。戀八卦柱路『物には 物は談合に同じ。

(味)物はいひなし、事は言ひなしに同じ。

こと(事)の係を見よ。懈立「分限などい

いひなし事は聞きなし」 へば人の物にてまはすといへり、物は

の如く、物事を合はせて優劣を競ぶ遊戲。

ぢきなの物あつかひや」

「はるけき野邊を分け入り給ふより、いと

物あはれなり」

あはれなること。あはれなるとと。質のの一あはれ、物哀(名、刷)何となく

る、いかでかられしからざらん」 枕竹物あはせ何くれと挑む事に膝ちた

職)物は時節の事は時節に何じ。こと(事) ならばやめられよ、物は時節と待つに の條を見よ。正章千旬「少少の御訴訟

師)物は使ひやう 物事の楽し惡しは、其 篩/物は鮫合 世別の物事は、他人と談合 **御房は賃舎 世間の物事は、他人と競合 ひだ。物のあはひ。 800点 ひのあなりで 100点の 100** 中萬年草*「物は談合、お梅様の御訳言 の上ならでは成否を知るべからず。心 あるまい。物はためしと百姓共、若草 否知らる。傾城反魂香・「腹鎌には足跡 未だ盃なされぬ先"被方を覺換なされ '久米様へ遊ぜられまいか. 物事は試みて始めて良

(膝)物は八分目 〔游つれば鉄け品きより 「膝)物ははずみ、物事の起こりは、一寸し の用ひ方の如何による。 いふ〕 物帯は 極度 に纏 せざるうちを たる概勢による。 ものあい

(味)物まづ腐りて最之に生ず 根本に壊 見つくろはせ給ひて可ぬり 安閑寺と爾所に陣を召して、物合を贈く

膝)物も云ひやうで角が立つ 左程にな きことも、骷しのしやうにて理窟めく。 、之、人必先疑也、而後讒入、之」 ふ。 蘇軾文禮『物必先腐也、而後 蟲生 れを生ずれば、弊害百出する響へにい 物(明)およそ。ほぼ。ほとん 中の-あひ 物達 (名)射響の語。射響の語。射手 ひ(物事)に同じ。源者三御ものあらがひめ等(名)ものあらそ

もの物(脈)およる、ドド・レー ばれて、物三年は夜豊なし」 斃むと知りせば、たつご もも 持ちてこま (助) ものをの略。記ぶたぢひねに 版足類の一種。椎質大にして、数は形短め-の-あらがひ(名)【動】状體動物中、 「口険し。我が國に三種を産し、執れも淡水 た棲む。ぢすとま・の中閒而主として知ら く、激暗色にして、質極めて薄く 跳く、数 こそ、中中心おかれ侍りぬべけれ」

呂がもの、金をとせへべい云って、山事は や鳥にもがもや、都まで送り申して飛び し母能(2)疾むと知りせば」萬二あき飛ぶ (應) 呼びかくる鮮。もし。浮世県 ものあんじ 4 3 2 6 そ、ものあらがひはつくといふなれ」 る。後撰母三蓮菜の上はつれなきららにと

物帯をあら

ものこと。ものに倦むこと。浮世風呂におき 見のとじを」源事当何方につけても、も **す語。萬『「物代がなしらに思へりし、吾が** どに添へて、露骨ならず蜿曲に其窓を表の 物 (養頭) 形容詞・名詞・動詞な 夕霧阿波鳴波当二年越しに計づれなく、 それは幾淑の物案じ」 思案すること。心配すること。 物案 (名)物事をあんず

のしがやうな物あきをする者は、萬一に 飽きっぱくて、何を一つ送げた事がねえ」 ふる者。なめし革にて作めのいよう 物射沓(名) ■・流鏑馬等に関れたる馬。 ものい-うは 物射馬 (名) り、爪先にひ だを十二とる を普通とす。又、文曜(だ)を

のあざやかなるに」

すとも云ふ。 **築草にて作りたるを本式と** 物不言花 勝射に 犬通物·您 **2** 置かれて、神事に預かる意男・少女。

商ふ人。商人。常流小栗剣官職議論員最龍

あかふこと。とりあつかひ。 栗笠(あなあ ものあたらし、物新(形)あられた もの・あげ・は、物揚場(名) 船荷を陸 しつらひ取持たせ、物商人に出立ちて」 ものいはひ 物祝 (名) 物事のいは なく侍り」 砂石集略世別の人の物説、返す返す道理 ちくれば、物いはぬ花も人招きけり」 の花の稱。 重之集「鶯の壁に呼ばれてら 美人を物言花(元さ)といふに對して、草木

ゆのかしとき関ゼ、紅の色にな出てそ思いめの-いひ 物言 (名) 目ものを言ふと の上手なること。又、その人。ロ巧者、ひ。いひあひ。口論。圓ものをいふとと 舞舌家。 飯=木(くをなきものいひも定め の物いひさがにくき世に」国言葉あらそ 激量でとこにしも何句ふらん女郎花、人 精貫は」 回らはさ。とりさた。人言。 死ねとも」狭衣埋ものいひ感しかりし大

と文ゆるもかせとなり」目位れと此れと ひのさま。くちつき。相川波政が物のひより桿棒が大と帯木上 ものいひです 物言様 ものいひとき ひて。言葉がたき。博多小女郎彼衴与此 をいひ立つること。 かねて」四相撲にて、勝負の決定に異議 物貫伽 3 ŝ 話しあ

にそれぞと見しよりも"物あひ近くなり

の隔たり。あはひの距離。 狂音な三五ひ と交ゆるもかせとなり」目彼れと此れと ものあひの、そよともするを心にかけて」

の六人を請け出して、是れに居らるる人 物いひ

丁度よき場合。明徳記[法花堂と) 物合 (名)物帯の整ひたる

花山に入り、赤の夜のならべれ」のゆな(解語花)に同じ。 若風俗ふ物いふめの-いふ-はな 物言花 (名) かいご ものいひぶり 物言振 (名) 人の物質伽」

もの−いみ 物品 (名) 冒着干日の閉、 を思みて、他の時にいひかへなどするともの・いない 物品(名)あしき詞など と。御幣かつぎ

家に纏もり居ること。源だ其一今日は六日 曹、天一神(だり、太白神(たりの寒がりを犯 夢見•物忌みなど、像りにおめたり」目古させ給はず」保元師終三式券の身もして しら思ひきこえさせ給ひて、物最もえせ 加茂•平野・松尾・春日・平岡などの大社に 維新以前、伊勢大神宮を始 め 臨局・香取・ ものいみなど書かせてつけたり」国明治 PAT 母尾のすだれは皆おろしわたして、 の方にはさはらずと見えんとてにや」源 つけたるは、今日さるべき日なれど、功億 どにかけたるもの。枕三鳥帽子に物いみ 札又は忍草などに物忌と鬱きて、短・簾な どは」国古者、物品の時の標に、柳の木の 物忌 などにて、つれ づれに 覺さるる日な の御物忌明く目にて」榮華男子さべら御 すを尽みて、其の日の過ぐるまで悩みて して物事をいむこと。 榮華な毛 添う美く 紀「躬自衛政(行)「祭。諸師二 日不吉なりと 夢め、觸礙などを忌むこと。 齊戒。 神武

ものいみ の ちち 物忌父 伊勢神宮に

ものいみの 品だ 物忌札 ものいみ人を成人を放文 李 程任 計 三人憲道二人大き人の人の長さ三人の 由 集 宮 侯 式 軽乗等が合 式 拾 笠 人を成人三人、 は 集 で 大きな の人のが て其の事に從事するもの。儀式頓「職 來仕する物忌の子良の父。子良を佐け

もの-いり 物入(名)費用のかかるこ まりなばやとの 語幹。宇津保研等のな物ラヤ、ここにと の-9 物憂(名)ものうし(物愛)の って二百所 **淀鯉出世識徳寺今夜の物入り、ざっと積も** (教を)"に同じ、 給ふにし

| ものうますう。杜当いとものうげにかみ | ねのおさごや 物質小屋 | ものうぎ 物質薬 (間) ものうさう。 に向じ。 歌事要略於武器護術が国機部司物受強もの-らけ、物受(名)機部司の職員。

ものうさ 保護やものうかるらん春の野に、花の笠ものぐさし。たいぎなり。字祖保輔導佐90-9し 物憂 (形) ゆすすまず。 かしとおぼゆ」(第4類5g ものうきこと。ものうき食合。 密度当版 おのわれるし、覆ぐ木人気とはき心地してものの子び 物芸 (名) ものうきさま。 おのおれるし、物心(形")何となくくえる。 くるをし ぬふ枝のなければ」枕三うちなげくけし 久しらなりにけるを」 ものおさな 物置場(名)籍物を入

のおそろし」

らたがふとと。うたがひ鉄頭すること。 像)に同じ。瀬平宮(夏と思ひし人のものうもの)らじ 物像 (名) ものらんじ(物 じして、はかなき山里に酸れ居にけるを」 はば、かくわりなき物うたがひにせよ」 いみじら思はれたる女」源等本限りと思 れないと、わりなく物らたがひする男に、

官にては神官の女の未だ線せざるもの、 忌・地祭物忌を加へて三色の物忌といひ、 又稀には證男を用ひ、大宮の坦内に館を 其の他、酒作(キオ)・清酒作・御獭煥(テャ)・土師 御饌に仕へ奉るを大物忌、これ に 宮守物 の掌る所によりて名を異にし、朝夕の大 造り"常に 大神に 近侍して 仕へ驱る。 共

(アサデ)・高宮(エザ)・瀧祭(アタト)物忌等あり。鹿器作ススギン・御炊(スサ)・菅叔(スサン・根倉・荒祭 の上首たり。太神宮式「大神宮三座、物忌 あらざる少女を動トを以て定め、神官等 鳥脚宮にては殿内の事を挙り、米だ緑水 九人以另一人、父九人」内藏祭式改及下社上

ものいみのたち物感館かむだち(神上・松尾北洋機能である)人」同様など、店の前の大きな財子の観音をご

社業幣便参向記水正十六年,錦紋或神宮田寒館)に関じ。 僕式帳「癩宜齊館一院」一 納、子及乃好館單刊置

ものよう 物道 (名) 薪炭・韓具など ものうらんじ 物像 (名) 物事にらむこ 「此の事を、物うりあやしう思へども」と、其の人。あきんど。商人。字治拾遺」もの一うり 物質 (名) 物をうること。 『事のかかりし長持一つ、物優にも駿に も是れを飲みにして」 かなき物うんじをして」 しなべてのき はには 思は ざりし人の、は 物うららかにて」 (名) 前原

つるとと。筋病。源ヶ里物おちをなん、わめの・おど 物怖 (名) 物事におそれお あのおそろしっさ 物恐 (名) ものおそ おそろしきう。ものおそろしきゃう。字ものおそろしょけ 物恐氣 (覇) もの りなくせさせ給小御本性にて 治給遺害関わどろねどろしく降りて、物 おそろしげなるにし

もの一おどろさ 物館 (名) ものごとにもの一おどろくこと。作性が選ぶ「女婿達の物館 と。おと。伴酷新選挙物費つせぬ船も行もの-おり、物音 (名) 物のたっるお く月見かな」

物を打ち切る時 その物に觸るる所、即ちのつうち 物打 (名) 太刀などにて、 より段段に折れし 耆ニニー「太刀の鰡本・物打・切先に 名残りが 初むるあたりの所。切先三寸の所。大量狂 切先より鯉本へ向かひて、刀心の籔がり 惜しいか」持統天皇歌第法『太万^{中時}物打

ちれはし、ものなげがし。うれはし。深めの-おもはし 物思 (形) ものどと おばゆること。配能すること。改な狂言があの-おぼ之 物覺 (名) 物ごとを心に

棒類 物おもはしくはしたなき心地して」 間召合いと物おもはしく、よろづ心細けれ

高 私はつっと特優えの思しい者で」 おぼゆること。配催すること。吹嘘狂言が

ものうらのみ 物根 (名) 物事をうらむ と、いとよく数へ聞こえ給ふ」 らみし」 原式のあいなき物恨 みし給ふな

もの-うらめし 怨めしの称のけしきやし 看駅合『露る雁鏤のうちに摩はして、物 みなども物うらめしき心心にて」千五百 うらめし。 うらみ思ふ。瀬暦原御うしろ 物怨 (形) 何となく

のおもひもなし」

は老いぬしかはあれど、花をし見ればも

「院比布(領担(キャ)」」古今で「年ふれば船かったもと。 変へ思ふ こと。 心配。 仁徳紀めの-おもひ 物思 (名) 物帯をおも

ď

ちゃしこと。カ 事なりとか ん」字治拾遺「ものうらやみはすまじき 字律保存でゆゆしきものうらやみもとな ねたむこと。ものねたみ。 物美(名)物ごとをう むをなせる如つき。物思ひのキラす。

物思種

8 で 物源思 60

ものうららか 物産(名副)何となく のどか。源や「獺生になれば、生の気色も うららかなるさまにいふ語。ほがらか。 をおもふ。もの楽じをなす。憂ひにしづめの-おもふ。物思 (自動で) ものこと ものおもひくぐさ 瀬暁写中中あまたの人のものおもひぐさ おもひのたね。ものおもひをする材料。 #*「いと物おもひがほにて」

ものかは 物書 (名) 間文書をなく の人。代書。感發記#545「南都に、便宜の人。代書。感發記#545「南都に、便宜方能。目他人の代節をすること。又、其 國文書。記錄を替く役。 かきやく。 書記、 に鳴く郭公心あらば、物思ふ 我れに 摩なこゆ鳴き渡る心し有るらし」 古今夏夏山 む。萬当ひとり居て物念なり物に郭公、 の物器して居たりける 聞かせそ」

ひぬらんかし」同で「あちきなき御ものか(すこと。 薫塩」ものがくしは思り給めつ・がくし 物際(名) 特帯をつつみ

のに望れたる席。ものがくれ。狂言報のの一かげ、物際(名)もののかげ。もめのかけ。もののかけ。も 一物原籍ひに駆び寄り」 「物かけから御覧しゃれい」川中島合製で がくしなり」

よ器分の字や物がしら」 ■ 以家時代、聯 ち。物の長。首望、小町筋磨元 今朝いはもの-かしめ 物頭 (名) 最もののかし 関心の長。足軽大將。足巒頭。同心頭。 像の首領。即ち、弓和・螻竜粗などの足軽・

物の数。五人女三背染のかづき、取り集 めて物数二十三二日言葉かず。くちかず。 甲陽単鎌代によき物がしらをまことに 機 觸れ可力ものなり」 川角太閤記「年より共または物頭・物頭在人も申しつけ、勝利の構得ないひふくめ」

産子門物数替はず摩低に」 せて、物数いはねこそ よけれ』 候城而存 一代女「少し勿體も付け、むつかしく見

物 (名)

かぞふるこ

ŗ	も も も も も も も も も も も も も も も も も も も
ものか	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
ものか	を
See and See also	(名) (名) ものがたきる (名) (名) ものがたきる (名) (名) (名) (名) ものがたきる (名)
a approximation	<u> </u>
BOV	を発生を変形した。 ではまとる 実際など 半世的主張の まずいしなべいには かりた できない はん のまなど であれた とした 大大 大大 と で かり ない いっと で かり ない はん
	大のものもの。何からの、一番門内がありた。 かのいましまからいないとなった。 ではなんと、ままりながら。なれらのはなんと、もかれらのは、 ないました。 ないまし
	*** ** ** ** ** ** ** ** ** ** ** ** **
100	新学 ス、まの住民 ス、まの人。
	立立なが、 一本 できょう でいます はいます はいます はいます はいます はいます はいます はいます は
	程
ものぎ	して、「
	新校とした。 物がし、名の 物がし、名の を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に続き、 を手に変して を手にである。 を手に変して を手に変して を手に変して を手に変して を手に変して を手に変して を手に変して を手に変して を手に変して を手に変して を手に変して を手に変して を手に変して を手に変して を手に変して を手に変して を手に変して を手に変して ををして。 を手に変して ををして。 をものものを をものを ををを をを
	- 『船を名送を課名 宇宙会 全管と撃に伸出りと物 を設置 ときじょとす。 利立と嗣 ニュと思る当び などしだると かい
ものし	ものだれ、軽さ物では、大くされ、 のとがした。 特別を開発を表する。 は、 ののとがした。 特別を表するとは、 ののとがした。 特別では、 ののとがした。 ものまか。 は、 ののとがした。 は、 ののとがした。 ものまか。 は、 ののとがした。 は、 ののとがした。 は、 ののとがした。 ものまか。 は、 ののとがした。 は、 ののとがした。 は、 ののとがした。 は、 ののとがした。 まが、 ののとがした。 は、 ののとなく、 ものまか。 は、 ののとなく、 ものまか。 は、 ののとなく、 ものまか。 は、 ののとなく、 は、 ののとなると、 な。 ののとなると、 は、 ののとなると、 な。 ののとなると、 な。 ののとなると、 な。 ののとなるとな。 し、 のとなるとな。 し、 のとなるとなると、 ののとなるとなる。 ののとなる。 のの
	6 の だれ、 軽・物質を 1 の だれ、 軽・物質を 1 の では、 1 を 1 を 1 を 1 を 1 を 1 を 1 を 1 を 1 を 1
	世界の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の
ものだ	あのしてがか、物師(翻) 音くながしたののしてがかりが師(翻) 音くながしたならまたにいます。 五人大海のかしたいか はまるサキケに申せこれ 対点の場合 があた はまるサキケに申せこれ 対点の場合 があた はまるサキケに申せこれ 対点の場合 があた はまる サキケに申せこれ はまる サキケに申せこれ はまる
	(で) (一) (で) (で) (で) (で) (で) (で) (で) (で) (で) (で
三	の一・リブか 物解 (個) 書なく政がした。 大人の一切の一の一が (個) 書なく政がした。 大人の一切の一切の一切の一切の一切の一切の一切の一切の一切の一切の一切の一切の一切の
	か、

ものがたる。ち今晩期打

枕

物學(名)物事をまなぶ

ものでおかし、物近(形)をはちかし。 ゆのづよーけ 物膜氣 (朝) ものづよ ものつつなしき物質(名)ものつつ っつましさう。ものつつましきゃう。茶ものつつなし」が頻気(解)もの たるもの。物のたねとなるもの。ものざめの-たね、物種(名) 目物事の根元と 「味していはざること。 漢ヶ里世の人に似めの-ブつみ」 物質(名) 特事をつつみ 80-つつなし、つっしみぶかし、源味の一つつなし、物質(彩)物事なに ものついり 物作 (名) 耕作をするこ 類でりつかれたるとと。又、其の人。目よりの-つき 物源 (名) 目もののけに ものはうちゃら(裁物庖丁)に同じ。 と。韓じて、衣服のたちぬひ。妻籠。瀬郷もの一たち、物節(名)日布帛を裁つと 根時の総時の」 て、其の返事をばせで」 「船ひたる ぞと問ふに、物つき口らち噤み りましに同じ。 盛春記計論 法性寺執行 ただに、物ちからももてなし給はず」 財 剪刀毛/多個所以裁《衣裳」也」 「いと物つつまじくて中間いらへきとえん」 年忌散念佛当物作りの事なれば、いや大 て」太平記時代の如何なる神の詫でかせ が物だねぢゃ」 田京木の種。たねもの。 ね。神代紀二原《共物根((**))」 狂言の足命 すべものづつみをし給ひて! 罪者 物つつましげも 思ひたらぬ気色に をもわく **俊寛・西光法師等が重とも、御物附に移っ** (謎)物種は盗すれず 血統のあらそひ難 る核鼻の」圖衣條の略。和漢三才圖食材 の衣配り、物裁ちよしと色色の錦載つな 「ものたちなどするねびごだち、お前にお を職とする人。工匠、たくみ。 へどものいいとどあやにくにものづよけ **燃村旬集等 初午や物種質に日のあたる」** | 剪刀55 | 国心順などにて、或る飲食物を またして」最明寺殿百人上藤一今日山姫 まれず中華いづれも父の面影あり」 **!ちて用ひざること。籐物(タン)をすると** き僧へにいふ。八犬傅々げに物種は佐 小作をすること。- 又、其の人。 五十 物質(名)特事をつつみ 物報(名)ものづよきさ 物强 ものつつましき度合 (名) もっつけ(物財) 形 何處となく 和名 たち たげかし。何となくなげかし。枕状殺常ものないがし、物数、(形) ものととものないには (名)【植】ははその異名。 - 祭職職員公私今の物なげきにして、しづ心 ・ 物数、(名) 心能。 苦勞。 代、知行を給するに、特成の高き地と低きものなりでめ 物成語 (名) 江戸時 「関東八衛城に上杉召指への城市戦物成取後。日とりか(政策) に同じ。 養輪軍記の人なり 物成 (名) 国田島よりの牧 ものならび、物智(名) もの-とり 物取 (名) 他人の所有物を ものとも 者共 (代) 其の方とも。多 ものとほし。近からず。日おろそかなり。 ること。谷め立てをするとと。宇津保もの-とがめ、物谷(名)申するとまて はすこと。學問せしむること。學問。古もの-ならはし、物習(名)物事をなら ものとほう 物遠(名)ものとはきさ ものことか 物間 (他動き) ものとひを 第、株衣与物とひ何やかやと、心しるどものことび 物間(名) うらなひ。 ト 村の物成。本途井びに小物成米、永郷帳租領へ渡る村村発は高下あるに付、其の村 するものの稱。地方凡例録『物成語之事、早五升、即ち物成三つ五分の通則に合は なし 疎遠なり。うとし。源蛭」いとしづかに、 石苑にて三つ五分に営たる、公儀より私 斗五升入り百俟の當 たりにて、米三拾五 是れは畑行渡しの節、高百石に付き米三 地とを涌計して、一石の地に就き物成三 之後を御成甕・御物成とも申し候」 立所廿三餘所有,之」地方要集錄| 衛取筒 らひに入り給ふとて」 「發。遺學問行が」」公任集三井寺に物な したりけるに 今場所仲唐を唐土に、物ならはしに遣は 地して」 に物なげかしう"世の中に心にあばぬ心 刀を奪ひて逃でしるあり」 記ませてかかる紛れに物取ども、人の太刀・ 奪ひとること。又、その人。盛人。太平 子折点捜して耐てや者共」 **〜身分卑き人に對していふ器。源氏島蝦** りどほし、迂遠なり。 ものどほきさましておはするに」目まは のさとしのあるを、ものとはせ給へば」 なす。占ふ。うらどふ。狹衣三巻しき物 ちはやすき物なく」 とのものとがめする犬の壁終えず」 確認ものとがめし給ひしこそ、ことなく聞 つよし。又、物事弱げならず。 とゆるや」羆が真夜はいたく更けゆくた。 學問をすること。學問。崇峻紀 物事をならふ さと、ものごとの願ひ、宇津保護を苦し あめか 物行。豪家。天正記録☆ 初集孫 七郎秀次、江州のものねしとして」 古今里の一切緑原の世の人どとの繁ければ、忘れの一の(接尾)ものから。ものながら。 よそ。大約。約 「ものの五年もかかる」 もの-の 物 (脳) ほとんど。ほぼ。お おのねんじ 物念 (名)物形を堪へ思 とする人。又、其の家。仕立屋。一代女ものぬひ・や 物経屋 (名) 裁縫を業 ものしねたみ、物所(名)物帯をねたむ もの-にVみ 物悪 (名) 物事をにくむ ものっなれる物別(自動)ものなる 頭れて巧みなり。熟練す。字津保書NTい 生物などの果ること。 人とそ、さいはひは見はて船ふなれ」 - 瀬戸町 背も今も物 ねんじしてのどかなる 「物にくみ はいつならふべき にかと怨じ 治拾遺三我が母、特知みして」 妍! handinをはいき石メンCト 研究を主義人の姿の、いと物ねたみする女」字 げなる脚ものねがひかな」 二十四五人の手代、此の物経屋へ行く事 **東唐後人は心ゆきたる架色にて、ものぬひ** 「畝兜にて物の具したる兵」著聞式海域あれせて」団よるひ。ぐそく。保元が東方 ものの魅ひつつぞふる」 んといひし夜ごとに過ぎぬれば、蘇まぬ れぬもののかれぬべらなり」 参語 君と を伊ひける」 は、あて人もなきものなり」 給へば」関東基かかるすちのものにくみ ること。源がものなれのさまやと君はお れてもいへるかな」 糞ぜられたるを」 源ヶ型 したり 類に物な ともかしとくて、ものなれたるやら に御 ず物成にて特徴畝すゆゑ物成誥と云ふ」 一人、もののぐして出班ひて いとなみつつし れば又下党の村と※加へ、高には拘はら やうに制分、三つ五分より五兔の村方あ の分を打込み、高百石、三つ五分に當たる 世帯になれたること。世故にたけたなれ、物間(名)ものなれたるこ 教経をすること。又、其の人。 源5 物経(名) 衣服などをぬふ 。又、共の死號・生蟹・物怪(名) 死策・ (名) 死事・ ゆの課は はかなきさま。ものはかなきゃう。枕でものはかなーけ、物果無氣(副)もの 書景。北條早雲二十一箇條『少しの隙あむの-の-ほん 物本 (名)書物。巻籍。 もの-の-ペ 物部 (名) 量上古、伴養行 ものはかなし物果無(影)何とな もののかの 武夫(枕)もののふの数 の中に、東遊(テンテント)に達したる者の稱。西 もの-の-A 武士 (名) 戦降に立っ武 見ること。源/四/もののぞきの心もさめもの・のぞき 物覘(名)ものをのぞき 「概の木==花もいと物はかなげにて」 俗、 告册總請, 物本二 に人目を忍び見るべし」 雅州府志七里倭 関連 物部 廿人」 同様 早物部 丗人」 を物ぶ。職員合理を特部計人等法律に同 **を贈名。罪人を決誤するもの。みな刀鋸** ■古皆、飛部省の被答たる囚獄司、京職の 並族七十人,」問「付, 特部、使, 州, 於野」」 雄略起「違」物部兵士三十人「誅」殺的津屋 部之行(*)氏川渡り」 郭公(今も鳴かぬか山のと麓に」同芸物 らずも」同三物部乃元20のいはせの森の ち何のあじる木に、いさよふ 淡の行方知 して氏にもかく。萬三物部乃元/ごやそう もののふしどもなどさぶらふにし 賞a仰随身」」 鞭ゼ『近衛司の名高き舎人・ 宮記十五、「分。左右近播府物節兵、、)各五人 □・電話の有(型)の八十件男を、まつろへの人。ぶし。武人。いくさびと。武夫。 蔵 る見るほどにし **芍物のぞみなどする人の、ひまなく詣づ** くはかなし。 はかなし。 らば、物の本、文字ある物を懷に入れ、常 被管たる東西市司及び福門府に置かれた 多きより八十(な)氏父は五十でにかけ、略 もののふ の みち 武士道 ぶしだう(武 ふ・仇・敵なりとも むけのまにまに」 源が草 いみじきものの れなめり もののけ おたす 液物性 もののけを もののけ だつ 物怪立 物怪らしきさ て、もののけてらずるもいと苦しければ」 たど。枕二いたくわづらふ人にかかり らめやは なして、もののふのみちより重き 遊ぎ し心もなくわづらふを」 のこと。ものはづかしと思ふてと。字律泉式部讃集「もののけだつ心地に、うつ 50~450 物恥(名) ものごとをはづ まなり。物怪のつきたるさまなり。和 **士道)に同じ。風雅等下命をばかろきに** たしら程に、もののけ 物につきて」 よりましに移す。字治拾遺『物のけわ 願望すること。又、其の輩み。 枕七み 物望 (名) 物事をのぞむ ものはづけ(物附)の 源剤いとものは もの一会う(感)「大体の略」 場所でものほし、物干場(名) ものほしっさを、物をほすに用ふるさを。 ものとる 物在 (自動力)何となくふ をのこかし 物深 (形) 国奥ふかし。 ものはり 物張 (名) 衣を染め、又そ ものしはゆし、物映(形) ものはゆげ 物映氣 (職) ものはゆ ものはつけ もの」はみ、物食(名)島の食物を受け めのはづかし、きまりわるし。うらはづか と。事始。手始。太平記三頭質武家の大ものはじめ 物始(名)事を初むるこ 成也] 將一人討取ったり、物始よし **増川波鼓=洗ひて春の開なる影に程なく** 河産当いと物ふりたる際にて」 の者。十銭当己れは故殿の物はりにて」 の数ち縫ひなどに從事すること。又、其 びに如何にやと申して候ひしかば、少しぞ似りに恰かりける」「最衰能が特殊を 是れは今の物は付けなり」 保護者あなあぢきなの御ものはぢゃ」 口屋の物干傳ひ窓び來る」 に設けたる歳。ものほしば。重井筒『山 よなう荒れまさり、腹うものふりたる所 **榮養の作物深からぬ人も涙密め蘇し」** 色造大鑑し、目物日。毎月、領域の賣日を 物日の淋しきを」 目もんび(紋目)に同じ。 糖糖太平配当何時となく逢ふ人絶えて、 物はゆげた登してい 付)に同じ。我衣「なぞ付けとてはやる中間のは-づけ、物附 (名) なぞづけ(謎 ぶれて、物もいはで泣き給ふ! かなき御程なれば、後めたく悲しろ」 **、鎖玄關春幾世、長閑總者物申行ご摩」** を訪ひて案内を誇ふ摩。雅迦際狂集寺不 干上りて、物干核の枠竹の」 布帛などを日に乾すこと。又、其の諡め 方は後れて」国株故深し。ゆかり厚し。 し。おもおもし。瀬夕月ものふかく産き は、いみじう物深く 遠きが」 目おくゆか ŕ の如き、すべて特別なる物事のある日。 し。 凝少さかたみにものはづかしく胸つ 物日 (名) ■説日・祭日など 物干(名)洗ひたる衣類・ (形) 何となくは 他人の家 物をほす おの/女をす 物由 (自動き) ものまうりの女をす 物由 (自動き) ものまった しも) 関係には 実際には 大郎は 深ぐま ものしまかり、物学 ものなること。實體なること。源者大物 ものきねった物真似札(名) 種種の磨骨・風采等をまぬるとと。又、そもの・会ね 物質似 (名) 人音其の他 もの-み 物見 (名) 目物事を見るこ もの。公をし、物申(名)物を取り大き たる時。甲陽軍艦「俗前にて腰たたず無もの」と、 物前 (名) 自戦呼に近づき すること。ものまね。原手三門田の稲刈もの-女ねび、物學(名)物事の眞似を ものななび物學(者で、弔問者に合ふ人。 神代紀。「以、鳴祭」 もの-なうで 物詣 (名) 神社・佛閣に ものようす物申 まめやかにうしろみ」 同ヶ町物まめやか 節れて物見なる大概を持ち給へるあり」 えすぐし給はで参り給ふ」回見事なると 煮見知らぬものみ」 凝花者 もの みに は 間路は減雨」 の物まなりすとて誘ひしかば」 (物間)に同じ。右京大夫集 ゆかりある人 なるおとなを、かく思ふるげにをこがま る」浮世床に特前にも苦勢がらすくて」 「ものまへに見舞うて、書く你を手仰ひけ れなどの、世事の多忙なる時。機能比事に 性になる人は、本の臆病者とて」 なり る特供の胸の如き形の札。矢倉発許の札 芝居の木戸口に、物质似と楽して掲げた き女どもは歌らたひ奏じあへりっ るとて、所につけたる物まねびしつつ、若 「村山又兵衞が物まねー は物質似の上手な奴で御座る」 若風俗"れをなす一種の興行物。映電狂書跡当で奴 尸者(社)ご 容りつからまつり」 「ものまらでする供にも、我れも我れもと まうづること。ものまわり。 季間、 歩などに指でて、ものまうさするに一 そこに白く咲けるは何の花ぞも」枕三趾 ち渡すなちかた人に物まうす、われ其の めに叔けたる漢。塵歌陣にて歌の麒靜で ■貸人の邸などにて、往來を遠く見るた と。立派なること。薩騰侠"三大名の"世に 夢《総者(タシム)ご 特統紀「禮·大夫観者(タシム)

(名) ものまうで

B盆·兼

ものみ ― ものみ	は成成の決交に上版でしまり、北京大阪市は、大学の人があったり、大学の大学には、古書の大学によるに、大学の人があり、大学の大学には、古書の大学によるに、一般など、大学の人があり、大学の大学によるに、古書で、大学の大学によるに、古書で、大学の大学によるに、大学の大学によるに、古書で、大学の大学によるに、古書で、大学の大学によるに、古書で、大学の大学によるに、古書で、大学の大学によるに、大学の大学によるに、大学の大学によるに、大学の大学によるに、大学の大学によるに、大学の大学によるに、大学の大学によるに、大学によるに、大学によるに、大学によるに、大学によるに、大学によるに、大学によるに、大学によるに、大学によるに、大学によるに、大学によるに、大学によるに、大学によるに、大学によるに、大学によるに、大学によるに、大学によるに、大学に、大学に、大学に、大学に、大学に、大学に、大学に、大学に、大学に、大学
ものも	から、たけり、物見猛 (発) 前はに (名) からいたがり、物見猛 (発) 前はに (名) からいたがり、 (名) に (名) ないがもない (名) に (名) ないがもない (名) は (A) は
ものよ	のののした。 特物(第) 量いかあし、 かどっかです。 文章だす。 字母保護」 こともくにものものしきものからだ。 またりまっては、いる性的しきがけたした。 ないともなる。 ないまたす。 字母保護」 しゃらりをは、は、いる性のしきものからだ。 ないまたりまでは、いる性のしきものからだ。 ないまたりまでは、いる性のしきものからだ。 ないまたりまでは、いる性のしきをのからで、 たいまたりまたでは、いる性のしまた。 ものものしたり、特別(第) ものものしたり、特別(第) ものものしたり、特別(2) ものものした。 ないまたがないなどは、「ないまた」とないは、大変もした。 ないなど、なながない。 大変もしまた。 大会にはないまたない。 大会にはないまたない。 大会にはないまたない。 大会にはないまた。 大会にはないまた。 大会にはないまた。 大会にはないまた。 大会にはないまた。 大会にはないまた。 大会にはないまた。 大会にはないまた。 大会にはないまた。 こともののもののものものものものものものものものものものものものものものものもの
もはめ	■解析・報じて確係のも四、機能を「報 をでもよるを見り、まれたりだけ」と のかけ、かれば、人をはことになった様 かのかかかか、特別、となったとしてのだった。 をかったがして、他には、ことになった様 かのかがした。 のかけ、した。 のかは、は、おおかしとさまに、は、 のかけ、した。 のかは、 のかり、した。 のかけ、した。 のかけ、した。 のかり、 のかり、 のかり、 のかり、 のかり、 のかり、 のかり、 のかり、
#34 #34	し、 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
もみ、二五九	おびと到っ、水戸(名)古背 供物のかかりと到っ、木井 (和別及び原水に生 したる月。 令 したい (本)

供す。さかもみ。たらもみ。もみのき。 せらる。木材を建築・器具・製紙等の料に 闞、山地に自生し、又、観賞用と して栽培 卵形を呈し、突出せる 莅跡を具ふ。 我が 雌雄同株。果實は大なる毬果にして、長 揉上 (名) 費の毛の、耳と

もみあげの ほほひげ 揉上頬骨 探上 たりを洗ひながら」 写鼻の下を長くのばして、もみあげのあ 郡ひて和く生え下がりたる處。浮世凤呂 - 然「もみ上げの頻能と申す義はやり」 の過ぎで生えあがりたる類似。缺作物

合の際れ合いで争ふ。近いに振む。想耳 ARE - 関性希後日合戦「捻ちつ引きつ、様 **養徳記失売が到 黒烟を立てて緩合ひける」** 揉合 (他動き) 互ひに得れ

サみ-いた 揉板 (名) 衣を揉みつけて もみ-あつ「揉藍(名) 葉の葉を乾し碎 (他為可) もみだす

(茶瓜)の異名。雅雄脈狂集耳般を提昇苑、 とすること。又、其の疾患。 こそりちこわみ・うら 紅裏(名)紅色を密類の質 (採出)に同じ。 採出 採瓜(#1)夜難田」 目らりもみ(瓜採)に何 敷者る程可笑し」 」之に付、平均五合指り之拗だ、往古より之

じ。運歩色薬、投瓜等」 削り揉みて柔かにしたるもの。をしか一かは「揉皮」(名) なめし皮の上頭 成形開說法柄等勢胸名(申時)般指は 籾捌 (名) からさを(数年)

鳥田丸まげ・鳥田 〈づし」 たせたら紙。浮世風呂与もみ根で拵へたみ-がみ、「揉紙」(名) 提みてしばを立

もみったり しみぬか。あらぬか。すりぬ物般(名)粉米(豆)のな。 3

(名、翻) もみくたに同じ。 位 會り(姓)元問

ひねり、無心に引きぬきで占ふ間。ひねり、無心に引きぬきて占ふ間。ひね 報^後に無理いふまいぞ」 りぶみ。長町女腹切りもみ躙は恋方果 もみくさの、どさくさ粉れ」 種三片顔にべったり手拭の、ちぢみと飲と **ター√た (名、副) 揉まれて敬になるさ**

もみくしゃ(名、副)大作に肩じ。

北條領集。町方御敷ひのためとて、柳原あみ・少の一物融(名)根を入れ間(数。あみ・ひわや (名、馴)前條に同じ。 本所へ矧淼といへるを恐で給ふ」 (名) たらみ(唐鈺)

歩み-Cめ 初米 (名) 外皮を去らざる たるものを採みて、其の火を消す。国種もみけず 「採消 (他道:) 国火の羽き 人・物・鳥獣母の推けて器物となり、またもみけしにんぎゃら 揉消人形 (名) る玩物の観 種に手段をめぐらして、無くならしむ。 散り跳れて木の葉などになるやうにした

もみし む。日にほす初を極き散らすに用ふ。多ちみ-さらひ 初把(名) 透れのさら 機構工般把品店 染むる」 人倫開業開発『紅藤『『紅松屋にこれをみーし』 紅師 (名) 紅を染むる職人。

勝葵にて社にを去り、後、禁又は千万道 り取る後か。定家帰郷三月竹門秋の田に もみすさ 何修正二以将之能、實入り務照により、 し馀にて親と米とも引かつとと。地方兄 刈るてふ浴のもみす ずめ、鮮をうとむに さずさ 初寸莎 物気井、閉立て四合位より大七合位為有 や僕に耐ふらん」 (名) わらすき節

三四寸に延び蒸く生ひたる中をうるぬきあみたいこん 様大根 (名) 大根のもみ-七 (名) [植]もみ(権)の異名。 もみ-たす 揉出 (他和!) 揉みて外に す。なかのきだいこん。 たるらの。際にて様み、漬けて香の物と

頭法なり」

む。萬二度がねの寒き朝けの輝たらし、 春日の山を合實(烈)ものは」後很忠心か り鳴きて寒き朝の霧ならし、立田の山を もみだするのは」

りってられ、目いらだつ。せき立つ。ひ。はげしく様む、関連が成場様々立てもか。とげしく様む、関連が成場様々立て

教。稻稿。農業自得此時子「物種の城じ方 黄) に同じ。幸若舞曲なぜ船の皮のもみ 大び | 揉足袋 (名) つらぬき(類 頼りにいそぐ。一代男当其の夜僕かに探 立て、吉野を銷出し」 も高にふんどうだり たび、しろがねにてへりがねわたし、あぐ の根本し

| 地級だひ (音句) もみづ(紅菱)の活用、も ŋ あさぢ山、しぐれの雨に毛英多比(質)にけ みぢの軽。萬町もも頬のはつる動助の (名) 五数の数額を研

あこと。紅葉すること。黄葉になるとめ外の一種葉、機構 (名) 目もみづ の名。気徴に乗りたるちの。あふひもみ ぐす。にしきぐさ。やならみぢ。 目欲所 ぎゃうじ。かへで、かへるで。つまこひ 増せらる。木材を得具の用に供す。いち が何、山地に自生し、又、柳安片として教 是し、二節の酒を異ふる敵果を精ぶ。我 生し、学就に分裂す。花は小形、帶緊急を 高さ数十尺に耄す。梨は紫柄を具へて對 りにし國(権)械権科、報樹島の落葉喬木。 さらは毛楽如母」の時に、作さらば花の朧 を三窓の山は黄葉だしにけり」同気秋 と。萬二我が衣いろに染めなむ、うま

機滿ち吹いまだあかなくに」 同里高しき 出の毛楽型だつをかざし歌がをれば、前し あり。図5みぢは(紅葉葉)の時。萬竺秋 ち・だきらみぢ・みつわりもみぢなど精緻

の補生の毛炎知べい、吾れ行きて懸りくる

明ただこうように といふ事なり ふ洒落。 醒頭突出御茶をもみぢに立てよ の脊髄にうえふを縫り暮らに酒はしてい |閻胞の肉。||疑||| ||電魚の餅の名所。 5を(魚) し一匹も、紅葉のやらなる手を合はせ」 しきさまにいふ語。福舟我三五歳になり 「顏に紅葉を散らす」四小兒の手のやさ どの煮ぢらひて顔を飲むるにいふ語。 幾き赤色。Mix 間歩のふすま。 間少女な 表は紅、野は青。贈る一覧、表は赤色、野は まで訛りとすなゆめ」四根の色目の名。 を見よ。四次を立つるにいふ語。紅栗

もみぢのが 紅紫賀 間印・西・戌の年 **もみぢの いかだ 紅素花 紅葉葉の散** いへる語の機後護兵大井川風の節かけりて水街に浮かべるを 後に見たてて に生まれたる人が、七・八・九月の誕生日 てけり、紅紫の筏行きやらぬまで」

もみち の かは 紅葉川 紅葉の水底に もみぢの かき 紅茶匠 紅葉の美しく **らつれる川。又、紅薬薬の散りて流る** 事は、ひと木有る松を料にあへとぞ」 字標保以当立田極もみぢのかさを添か 染の腹したるを笠に見たてていふ語。 古く甘く、少し辛味あり の故事おぼし出でらる」圏香の名。香 え給小」源等二条後院の紅葉の質の何 もみぢの繋きこしめすべき御消息聞こ に行ふ買の親ひの稱。字律保城上神泉に

もみち の とろる 紅紫衣 秋になりて 器。夫木吐秋の著る 紅葉の 衣目を 煎 來て、もみぢの川をくくる白道」 ね、うつろひきさる三宝山かな」 一頭に紅葉するを衣に見立てていふ る川。央本戦秋はのたつた山より流れ

一もみぢ、家の様。 **あみち の ほし 紅葉橋 ■(古今島の 談る秋州」屋紅葉の落ち触りてある山** 合の夕べ泣しき 天の何、もみ ぢの橋 を みぢのはしはいかにぞ」新助撰は手星 出づ〕天の川に渡す橋。字津保育等も なばたつめの秋をしも行つとある歌に 夏に、天の川もみぢを橋に渡せばや、た しき砂のまにまた」

一。紅葉"たてなすもの。元精集「紅紫合、 紅熊あなせ、九月二つある年」 **授上人にせさせ給ふに」清正塾「うちの**

もみぢ-いたや 利加の原産。糖質用として栽培せらる。 (名) 【植】めいげつかへ

める。はうちは(乗順局)を見 もみちいちご 雨そむるや紅葉魚」 での異名。 いちご、船前子)の異名。 はらちは(栗関語)と見よ。 **3 (3**) [植]き 赦所

■(古今年の秋下に、南ふれば笠とり山のちみちっから 紅葉笠 紅葉銀 (名) りを取り、揺絲しやらぞく、桐、と您き」 *しゃなり。天上青紙·青どさにで糖くへ 青き雨笠。まはりの青きをは野青といふ。 ぞかしける餘所のもみち笠」■天井のみ でりがき(日照笠)の靴。懐子集「しぐれてり出でて、騒を笠の義なるべし。髭) ひ 虹菜 ばは、行きかふ人の袖さへぞ 服るよ

おみちがら (名)【前】病科、家江内園の 差さで來にけり」 若風俗」まだ夏ながら紅菜傘を持ちて、

もみぢ-づき

紅葉月

ŝ

陰活九月

る俗人。延費八年武鑑「紅葉山御宮御谷」

めみちの にしき 紅葉郷 紅葉を錦と もみぢ の とぼり 紅葉版 紅葉の染め 見立てていへる語。古今四年このたび は幣も取りあへず手向山でもみぢいに の、もみぢのとばり浪やかくらん」 ていふ語。夫木「鮨の川風たちね七夕 渡して錦の如くなるを繋(プ)に見立て 和薬の上に食器を置く軽勝。山槐和「三 むみぢ‐かしは、紅葉柏、紅葉膳(名)

もみだとり

我が置、山地に自生す。

鳴くらん」

る顔田の山のもみぢ鳥。紅葉の 衣著てや (鹿)の異名。蔵玉「紅茶鳥。鷹。時雨れ降のみぢ-どり) 紅葉鳥 (名)【動]しか 列す。果質は朝にて、三箇の麹を具ふ。 雄花は関係心序に、雌花は穂狀花序に操 形にして常院に分裂す。花は小形、草性、す。葉は長き葉柄を具へて五生し、心臓 の多年生草本。就は細景く、他物に俗粉 お月、時雨ふり來て知られけるかな」 の異名。茲淳抄「吉野山脊根が峰のもみ

(名) 【植】なすび(茄子) をいふ、

あみぢーぐさ

合むもの多し。薬は對生し、托集を缺く。 植物、便子蒸類の一科。木本。 甘き汁液を 動みび・Vカ 一椒樹科 (名)【植】類花 まの異名。 げいとら(歴奈紅)の異名。 紅葉草

類はせし **輸班送片しく補も紅葉衣の、くれなる深き** | 模質用等に供せらるるものあり。 我が個に自生し或ひは栽培せらるるもの 花瓣は萼の裂片と開敷。維養は四箇乃至 花は雨性或ひは単性花を混ず。夢に適當 乳稲子を有す。二屬百二十糟より成り、 に二簡の胚珠を含む。 果實は翅巣、揺胚 十二億。子母は二裂し、二室を具へ、各室 五段し、往往四裂乃至九裂するものあり。 **闖兄そ三十三種あり。木材用・戦態料・** せきじ

もみぢしようは(名) ちがさの異名。 在菜草 【粒】もみぢから € [植]もみ

排列す。我が國、山地に良生す。 に集まり、此の花序は 更に 竦なる聴默に 錦蘭を有す。 花は平滑、網長き頭狀花序 き頭柄を具へ、掌股に七裂し、各科片は粗

もみぢーところ(名)【植】薬資料、専門哲

Bの名。もみち(紅葉)で見よ。又、女房の もみぢ-がさね 紅葉駿 (名) 戦の色 要素が 宇津保育でもみちがされ」 豪華の社 療淡, 紅の療淡、とれに蘇芳の難を著る。 五衣の舞の色目。上には黄、天に山吹の 紅葉重の薄様」

もみぢ-かづら(名)【植】さづた(常祭幕) 月成、饗、用。根際,故實也中成月用。紅葉

本赤し、又黄色に穏はりたる草木の葉のもみぢっぱ 紅葉 黄葉 (名) 慰故の (破例)の異名。

通の赤き土器。白き土器に對していふ。 数といふあり」 傑、もみぢは春も酒のかはらけ。 紅葉土 雅雄郎狂集当此の秋の彼岸にも又さけ

もみちしはぐは(名)【核】有科、きっかふ

| 薬を探りて親貧すること。紅葉を味ねてあみぢ-かり 和葉符 (名) 山野に、紅 もみぢっからまつ(名)【植】毛質におり科 見はやすこと。夫木吐麻羽れ行く片野の を兵へ、下部にあるものは特に長き葉柄 里の紅葉狩り、頼むかげなく吹く椒哉」 三尺餘に達す。雅はな狀に分裂して饒雨 が概、山地に自生す。もみぢしようま。 もみぢからまつ腸の多年生草本。高さ二 を具ふ。花は白色、総燕を多く有す。我

もみぢは・の・つた(名)【複】をづた(含

洗ふふすまなどを入るる筥の窓と

自生す。

白色の簡狀花冠を有す。袋が閻(山野に 發して、形もみちに似たり。花は皆常紅 葉は長き葉柄を具へて互生し、常狀に分 はぐま屬の多年生草本。高さ二尺内外の に、紅葉したる概の稱。 田川、木の秋をば 離れか知らまし」 闘将り 古今秋でもみぢ葉の流れざりせば立 漕ぐ船の、にほひにめでて出でて來にけ 總稱。萬吋毛美知婆(荒)の散らふ山邊ゆ

(名)【植】間は 国しみおはぐ 赤き文あるもの。通道 (名) もちぢは-の-をみなべし(名)【植】きん じきの異名。 じきの異名。 れいくわ(地花菜)の異名。

鷽の羽毛に、

物水にて、秋の末に捕ふる、路の紅色にな nたる鮒。一葉集「それもまた水やどり

る我れと知らればや、さほの川彩たち縁のみが、み 紅葉見 (名) もみぢかに宿れ木や紅葉別 (名) すらんし

山の東照官嗣及び歴代の製屋に置かれた番(名) 江戸幕府にて、江戸城内紅葉街のみぢやは・おみやばん 紅葉山 御宮 もみぢむろ らば、心をくだくるのならましや」 器。後撰以三草枕もみぢむしろにかへた 散り敷きたる所をむしろに見立てていふ 紅葉席 (名) 紅葉の

溜燈にせず、柔らかに

もめんいと

持もめんなり、今の時代は麻なり」 慶長見聞集芸(編表型) 恩老若き頃、諸人の

取るに用ふ。もめんわた。棉花。下擧集。

るもの。衣服义は布隆などに入れて暖を

もめん-はおり

木綿羽織

木綿

もみぢやせがくにん 紅葉山樂人 照宮祠の祭禮に、青樂を奏せしむる樂人。 江戸幕府にて、江戸城内紅葉山の東

(名)江戸幕府にて、江戸城内紅葉山の東もみぢやはてつたら 紅葉山別當 年武鑑 紅萊山御別當」 に、あが見し草は毛美知(ダ)たりけり. ふ」問生との里はつぎて霜やおく夏の野 刊7里で、ねもとわはもふ汝はあどかも に関する事務を掌らしめたる職。元疎パ 照宮祠及び歴代の霊屋に置き、其の祭祀 『じ。萬畦でもち山若かへるでの毛美部27) 紅葉・黄葉(自動) 次鉄に (自動を) 次族に

はの、心の秋にあふぞうれしき」 阿易当 しぐれつつもみつる よりもことの ちつつ、うつろひぬるを限りと思へば」 "草木の葉箱に逢ひて赤また黄に變は 古今秋三もの毎に秋ぞかなしきもみ 黄葉 (自動:) 秋の末 (名) いなつぶ(指粒)

とする時、左右の掌を相互にすり又はも =へつらへば」摩常暦『奥より採手して』 むこと。東海道名所能「もみ手を致して (形=鼠) うまみなし。まづし。 揉豆腐 (名) 提生生世 詫び事·頼み事な の身で、もむない男を喰はさうか」 膝架 阪の方音・野科 今宮心中・二一人の 娘に 親のたいに同じ。 大

もみ に もむ

揉揉 はけしく採み合

みに揉んで南の谷に追ひ路とすべし」 揉りで 攻め入れば」 盛衰配験(済糸 揉ふ。盛んに暈ひ合ふ。保元峭間=揉みに

日相撲など、相手になりて数へ練る。 露ばかりだにかなはましかば」太平記戦、

浮世風呂特上の拵へ方は又、あないなも大和・誘注・河内・和泉及び九州の方首。時頃大和・誘注・河内・和泉及び九州の方首。時頃とない。まづし、まづし、 みないもんぢやない」

> ねるうていかんわいし 毛髯この汁はも むないかはりに、ねから

おみらぬか 初様 (名) もみがら(物数) V6其の人。一代男『御蔵の初挽とて雇み-ひざ | 籾挽 (名) 籾を贈ること。 りたつれば、程はは上に浮き、米は底に らそひどと。花藤。 宇銭「権残料」 もめ 「採 (名) 目もめること。 数寄る

(名) 回もめること。 数寄る

もめる事件。あ

た同じ。糖養節用「投瓜器」。即月調色は狙 もみらり「採瓜 (名) もみらり(採瓜) て痰らす。平家鉄塩もみ伏せたる馬共、もみらず 「揉伏」(他動き) もみにもみ 板に白瓜、茶刀取って中野てきてきしゃん 容易う退付くべし共不見ければ」 はるる女のあるぞかし」 ものる 「揉(自動ご)「揉さるの靴り」 それよかるといふ」目悶え憂ふ。せく。ず。一代男当始めより もめ る事なれば、ぎ。目坐ひ起とる。どたどたす。葛藤生

がかかる。入費がかきむ。色道大鑑写しるいちつ。「氣がもめる」図金がいる。費用

「駅」に同じ。皇都午睡場江戸にては中屋校もみ」れらぢ、「揉一揆治」(名) あんま(後 もみよね 粉米 (名) くろどめ。けん ともみふりに かちしね。和名点糖米料料 もめん 木綿 (名) B草絲(2)の商果内

がもめる」

陰・晴、定まらず。天候程かならず。「空 める。金銀の沙汰也、物をつかふ貌也」回

もみ・わり 初割 (名) 様を既日にて際 **聴満すり白・ふるひの物印、敵をもみわり・** - り割る如くに割ること。傾域局原蛙合戦 際をもみ旅行」 たつわりに手並みを見せん」 かぶる島朝子。溜盤には一名ぼし、揉鳥帽子 背の下

特にせ、採局帽子引き立てて」 ・ 軽楽記量サニ(重章) 胃をば脱ぎ位に 引立ゑぼし・柳さびの折り ゑ ぼ しの三種 もみて皺むのあるもの。双子打ゑぼし・ 撰(名)だ(撰)に同じ、 和名『攤

は轍のよるやらにす。萬雪しただみより、雨水の間に挟み、擦りて柔かにし、又、雨水の間に挟み、擦りて柔かにし、又のむ。 (他動き) 国前手にて相野る。 替へ揉言うだりけり」は忠集「も野の浦 (な)教設百人二 保元騎馬入れ替へ入れ せり合ふ。歴しつく。 仁徳紀「緞」兵乘之 三)」目掠り觸れて押し合ふ。入り飢れて 籐り廻はして穴を穿つ。蟹異記『攅気峠れ三ずずおしもみ』■錐の柄を摘掌にて 津保(理)おしもみて投げやり給ひて」 から鹽にととと毛美(き)」字鏡 搓味モ」字 て機ること。又、其の布。 帶したる男」 者の始むる所なり」

入江のかたの若すすき、彼にもまるる五 |耿集勇思ふ事下に採まるるまろずずの、 らだつ。いらつ。もだゆ。「氣をもむ」戦 月雨の頃」凌糕。四採敷治をなす。白い 締の裁別にて製したる木綿紙といふ物を厨にて製したる紙。武江年表55歳に本水の大部の一木綿紙 (名)木綿の裁 遊き始む」

物にて仕立てたる者物。 棉幣 切れはし。又、木綿織の布。若風俗言造もめんぎれ、木綿切 (名) 木綿織の 「木綿素物の擦るるも、悲しさは同じ事」 黄の木綿ぎれし **総版。二代男** (名) 木総

出だしたる棉布。本朝二十不孝·『木総縣 もめん-じは 木綿縞 (名) 終を続り

もめん-ちぢみ て敷りたる足袋。真徳獨吟百節「鹿も及ちめん」たび 木綿足袋 (名) 熱がに 術きをはいて行く」 はじ要のかはゆきのなやうやう寒き頃は とらする木粽たび」三代男『木綿足袋の 木綿縮 3 木綿緞

紫紫葵で、鷹の多年生草本。 楚は地上に 臥す。葉は十一篙以上の小葉より成る奇 せらる。わらぎ。 排列す。我が國、山地に自生し、薬用に供 色の蝶形花冠を有し、糖狀の總狀花序に ひは長椭圓形を呈し、全邊なり。花は黄 数別款複奏にて、直生し、小葉は長那形成

やにて仕立てたる有子。 木綿布子 林、韓に木橋縣を用ひて、緑銀三の如うに 織りたる織物。機総衆総三章「木綿绵け **蒜、竪絲は絹にて、絲錦の如く糨る」** 地合平稜にして二重、竪・横は何れら木綿 2

(族)木綿布子に紅の裏 ■表・裏相應ぜざ るより、不調和なる替へ。 目見えぬ所

花を紡ぎて和林・所絲・雙子林・瓦斯絲等の 紡績絲とすること。綿絲紡績。 に金をかくる替へ。

うりの事。予若年の頃は、髙荷というて、 程にして背白ひて費り歩きける」 木絲一反づつ 股段に 積み 重ね、高さ一丈 ること。又、其の人。庭保談「高荷もめん」のんらり 木綿質 (名)木綿を質 # 当右機物に相用ひ候木綿絲 むぎたる縁。綿絲。申合連列帳天僕九年八月

もめんがば 木綿合羽 (名) あま 地にて繋りたる帶。二代男子左巻の木稲もめん-おび 木綿帯 (名) 木綿の布 子木総合羽を署ることは、寛文の比、有徳 デ(雨蒼)をいふ、江戸の方言。ng 我衣「男 ŝ 締布。もめん。 木綿絲に 殺る木綿梭」

り、又は所ふ人、又、其の家。人倫訓蒙脳もめん-や 木綿屋 (名) 木綿物を造 もめん-もの 木綿物 (名) 木綿織の 参照木給や。丼びに布、河内より出づる」 らぬ木締もの一 りたる性。

前條に同

ゆゆくさ

百草

(名) 【植】まつ(松)

汁は締めてしほからくしてわるし」 る時、からちのすを搾りかけて進ずべし、 皮いりよりもいり 過ごし、さて取りあぐ にているべし、魔を少し多く入れて、常の れてよくあへて、皮いりするやうに石剣

の異名。

樂神

むを一学信一階部部、和名三陸軍軍」 屋城等部分の称。配当年年65年がに、いばなままかの、既(名) 脚の上部の、腰に繋がる (味)ももを割いて腹に充たす 粘局益な もちの つけぬ 散付根 験の内部の、 下腹に接して独みたる所。風默。 (して自ら燃るるに譬ふ。 貞禊政學

葉喬木。 りぬやと人ぞささめきし汝が心ゆめ」和 腰、各地に栽培せらる。 品種甚だ多し。 果賃は大なる核果にして美味なり。我が も、又 紫・白筍の塑種ありて貫すべし。 形にして軽蔑を有す。花は四月別き、五 名紀 株まき」 田草綿(ごの實、 目襲の色目の さ。 萬点むかつをにたてる株(壁)の木、た みきふるぐさ。みちとせぐさ。みちよぐ 独にして花梗甚を焼く、潘常紅色なれど 「岩損。百姓」以本。其身「行物」殷以啖、腹、 幹の高さ丈餘。養は互生、技針

は萌黄。三月頃用紅。紫、一説、表は夢 名。表は紅、裏は紅梅又は表は白、裏は りもも称あり。 の。みつもも・わ 枕に飲りたるも ふ。回紋所の名。 一説、表は薄紅、中倍(ジ*)は白、

を酌む盃。爲尹千首誓さらば乂彌生のもも の さかづき 桃盃 桃の節句に酒 もも の かぶと 桃竹 共の形、桃の實 の鎧に、桃の背を著し」 の如き野。家忠日配追加北西東京三無林

もめん-ばかせ 木艪衿唐茶袋,今日出來了] にて仕立てたる場。 綿羽織をきる 茶の木綿羽織」人倫訓蒙開彙「鳥衣に木 物にて仕立てたる羽織。世閒姿形氣三白 木綿符 (名) 曹繼 射能天文十三年子 木綿物

て機る機物。本朝三胞誌試明三里の名をもめんしはた 木綿機 (名) 木綿綵に 幅。普通九寸三分乃至九寸五分とす。今もめん-はば 木綿幅 (名) 木綿綴の 宮心中『展呂敷の木綿稿』

もめんほ にて仕立てたる帯圏。一代女門炬燵も木 もめん・ぶとん 木綿浦圏 (名)綿布 綿淵器をかけず ふに用ひる縫ひ針。「絹針などの對)めん-はり 木綿針 (名) 木綿 木綿帆 (名) 木綿にて作 木綿を縫

| 木綿綿 (名) もめん(木

結びつくる棒。

「即」鳥類中、拳禽類の種。 残野の一類。 ももいろ・いんと 桃色 駒哥 (名) ももいろ-おしろい 下部以下の下面に亙り尾筒に至るまで機 慥の長さ一尺許り、上面灰色、頭より眼 紅色を呈するもの。 桃色白粉 *

ももか 特別なるべし、常の摩の長く引くを百事もいろでとり (名) (ももいろは百事の 「の異名。拾玉「いつしかと春の初めにといへりと見ゆ。繁煌】【動】うぐひす(巻) ど製す。綾古今三後朱雀院生まれ給ひ る」■小兒生まれて百日日。駅ひて餠な 千代と舞ひぞかなづる」 抄三春ごとに百色島の囀りて、ことし八 今日ゆきて明日はきなむを何かさやれ と。萬年モモ可(タゼ)しも行かぬまつらぢ、 鷲の、君が千年をももいろと鳴く」 数調 百日 (名) 日出数の百なるこ

ももかの しめ 百日注連 百日衛(経路) て、御ももかの夜」 かのしめの重なりぞゆく」 燃はきねがいもひにひきそふる、もも に引きはふる往連縄。爲忠百首二教が

身を得めて需要 (名)【動】むささび(既居)の異名。 百日殤 (名) 百日開 治承二年廿二

ももの さけ 株酒 株花を演したる ももの せっく 株節句 三月三日の節 顔色を調すし て酒にひたし、これを飲めば といふ。日本旋時記「三日桃花を取り 酒。三月三日に之を飲めば百病を除く 三日の月の影、はや差添へよ桃の盃」 用また染料に用ふ。しぶき。楊梅肉、(楊梅)の異名。又、その皮。其の煎汁を薬むむかは - 桃皮 (名) [核]でまもも カウ・かがり (名) [百篠の養か。納料] い

めかれせし。ももかがりとは稻妻也」 なみかがやくもも篝べつかのまもただ君 なれや、あはんといはば今もあけてん」 **香歌合「誰が爲めのももかいもひの しめ**

ももの はゆ 桃葉湯 ももゆ(桃締) に同じ。東都故事記「土用級編の日本代」 日、上巳2年5年4月 日、上巳2年5年4月 - 上巳2年5年4月 - 上巳2年5年4月 - 1

初生より果賞を

和のないのり、鳥殿前、(名) 料理の一

細く割りて薄びるに作りて、洒と籐と入 もきいりの事でももきの内の皮をすきて もも-8 鳥鰧 (名) ももけ(鳥腋)に同 ももかはざん 百川算 (名) かめる

もも の つかさ 百官 多くのつかさび 「毛毛色像ふつねがの蟹」萬里とりつづ りきたる き追ひくるものは、毛毛のくさにせめ寄 もめの つかさびと 百官人 紀「舒卿百僚(78%)」 と。總ての官人。ひゃくくわん。 白 (名) 数の多きを示す器。配。

武紀「えみしをひたり毛毛(S)な人、人はいりり 百 (書) オタゴイ て ももいろ (名) 馬を歩ましめぬため、前 もらうすあかき色、淡紅色。桃紅。 足らず、やそはの木」佰覧へどもたむかひもせず」 じ。祝詞式練典八王祭臣等百官人(韓い) (他)

八十鳥すぎてわかれか行かむ」

鳥職(名)真の五颗。

百聲鳥

一説、百積(注)の (名) 【動]な

百尺

べに(軽粉)に同じ。 もも さへつり (株)もある大なる船の城市一郎、百積船のおか-の-かね 百積船(名) ももとれとり 母は聞ふとも其の名はのらじ」 「百犢船(タスキキッ)かづき入るるやららさし、 船と訓みて、多くの物を積む船。古典 萬十 ととぎす(子規)の異名

中。内表。皇居。用明紀「引、豊閑法師、入」もも、しな、百数(名)〔永條の韓〕 教 ももしさ-の 百<u>扱</u>之 (枕) 人の聞くばかりやは」 於内裏(ヒギル)i」源秋** ももしきに行きかふ か慰まん、ももさへづりの鳥なかりせば、 こと。永久百首章つれづれを何にかけて

百隣(名)あるた職る

は」萬二百磯城之(ほん)大宮どとろ見れば りいふ。病毒 配。「毛毛志和能(紫人)大官人 大宮にかく。一般、百官の座を敷く養よ の石にて軽励に造れる城といふ意にて、 百と多く

起しも

ももしぬの ももじり する如き狀なるよりいふ〕 馬に乗る人(の) 「桃尻」(名) 〔桃の貴の関幕 み、西のうまやたてて何か駒」 かく。古書萬二百小竹(ほん)みぬのおほき くの小竹(な)の生ふるといふより真野(な)に の捌にして、尻の、鞍上におちつかざると 百小竹之 (教) 百七多

落馬希,冠」雲州消息「忽以落馬、所,騎者

と。古事談『爲,桃灰|就,前馬|走出之閒、

餐胎也、是桃尻之所, 發歟」

(名) 【動】だいさぎ(大鷺)の異

ももせ-りう

御家流の

爲,葉、長尾半左衞門門人」

桃園 (名)

桃の木の多き

はれの池に鳴く鴨を、今日のみ見てや裳

はなさむを」

止む

観ませ、紙にて張り、愚にて染め、誰にて 家の夏火事に冠る中草下地竹にて網代に

(名) 【動]あかと(赤子)の

紀「百傳行が」皮造脈に対し、萬二百傳行かい (242)ぬてゆらぐもおきめくらしも」 神功 りと。古典 記『毛毛豆多布(だこ)つれがの かく。一説、萬葉三のは角瞭観がこの誤 かけ、ねては脚路に用ふるよりねてにか

鸒」同"「遼茅原を谷を過ぎて、毛毛豆多布

教育史資料十九十四五百淘流、百選排元以

曹風の一蔵。百瀬耕元の創めたるもの。もせり) 一百瀬流 (名) 御家流の

處を標傳ひて遠く行く窓より、渡る・津に

又、百に数へ傳ふる意にて五十つに

て行ふよりいふ〕 年年に行ふ大臣のもや の だいきゅう 母屋大饗 (母屋に

合「大臣の母やの大変は、年を翻て行ひ 大饗。(院[ミギ]の大製の對) 年中行事歌

髭を飲め置きて葬式

(名) 船具。船を敷

らやひ-ブな 紡綱 (名) 船具。船を繋 ぐ込めに、河中に立てたる柱。かせ。 動杭 (名) 稲具。 和

粉。国立いに繋ぎ合はせたる小船の関 まり合ひて樹種をなし居ること。

共同に事をなす。相似にす。共同にす。 \$ 40 は、船をぞもやふ五月雨の頃」 夫木『洗れやらてつたの入江にまく水やら、舫 (他動4)むやふ(舫)に同じ。 僧合 (他動き) 人人等合ひて (他動き) むやふ(舫)に同じ

もやう 一模様(名) 日級物・築物・彫 もや (名) もやひ(数)に同じ。薬薬草計せ、 「むやひんじ例じゅる芸 人目にはあだに見るらん」目ありさま。飲。"交彩。 若風俗『色色の 梅様好み、素 物などの装飾に施す精種の女行。かた。

株子。 能。手不。太平記書の歌館、頭宗の模様 杜荷科姓子鄉等思底模樣」目模

きまにいふ器。最勤、豊思の気ひて胸のきまたいふ器。最勤、豊分明ならざる

当るやもやと上氣して」松風村雨東帶經 開けざるさまにいふ箭。煩悶。目情熱の

もやう-づくし 模様器(名) 模様を並べてつくすこと。傾城島原姓合 とする成は、宋朝の行儀」

数多の夜。

散を竹を呈経箔・おりものの模様づくし、手 かず。もやもやす。今宮心中上気ももや し、押して祝昔させら とある」 国落ちつ

り。快からず。景行紀「夫婦之道、古今密」

がもやらや生える」「草がもやもや繁る」 て」囲舞がり生ひ葉るさまにいふ語。二毛 『鳥渡したもやもやが、互に深らなって楽 むらむらと起こるさまにいふ語。一代女

刑也、然於吾而不便(於於)一頭宗紀「伶俜

贏弱、不通行於一行步二 不強

(自動で) 芽が吹く。めぐむ。

ゆあよ-ぐれ 百夜草 (名)【植】■き が庇の百夜ぐさ、花咲きてとそ白妙にな るまで」巌玉「百夜草。殤。名にしおふ翁 母母余具佐(発り、百代出でませ我が來た く(薬)'の異名。萬二父母が殿のしりへの 世風呂サー「六日の菖蒲湯流行に後れ、残暑 す。音根時心中才後の月からもやくり出りやVる(自動) 国際まりさわぐ。混乱 料とし、変なるは餡を製する料とす。和 の苗は三段ばかりに植ゑわたすべし」 名竹繁張の」成形圖説『首代に牙秧は をしたるは苗代の種とし、大豆なるは食 を撒くこと、一畝に一升の獲りにて、一畝 くって、蒸し暑き材木納屋に立ち喋れ」 趣き包みて芽をださしめたるもの。 期米 萌 (名) 穀類を水に浸し、錐

す。もす。たく。竹取「火をつけてもやわやす 燃 (他動") 焼ゆるやらにな もやし-生め、明豆(名)萌ゃして生長 すばかりの春のひに、よどのさへなど發 すべきよし仰せ給ふ」枕叶みま草をもや らざるらん」

)荒山に」 宇津保奈望 鳴く 蝉ももゆる螢

もず萌 もやすい (形の前) 最もやすし。 を出ださしむ。もえしむ。 (他動³) 腐やしを造る。 容易な

| あや-つく (自動。) もゃもゃす。検歌加 智多「嬉し恥づかし、無はもやつく」

燃水(汽车)二

日[動]みのしし(猪)の異名。又、其の肉。 ももんじい (名) 日小児を成す時いふ詞。 ももんぐわめ (名) [動]前條に同じ。

もれび 催合 (名) もやぶこと。 もやひな入れ、歩みの板をひき渡し してなすこと。 水島千餘貌の魔・韻綱を租合せ、中に ・ 舫 (名) むやひ(舫)に間じ。 平 共同

宇津保備当もやのひんがしおもて」枕。 宇津保備当もやのひんな実験の中央の別。 日屋 (名) 自屋の中にて主とな

す」 国家の着の内をいふ、大工の語。 目

主として、住居に用ふる家。(物質・長尾な 「御くすだま中当もやの柱の左右につけた 1578

浮世風呂雪ももんじいで四文二合学とき 学世来に猪のほどを百目買ってやる修だが」

もやひ-かかり 舫繋 (名) 新一艘に鎮 の船に他の船をもやひ、菱艘も斯くの如 くして碇泊すること。 (名) 船一艘に錆

Ē

催ほすこと。 又、き

もられりのつくれ一百町机(名) ももとり 代紀一時,之百机,從於武而變,之」 種の飲食物などを戦せたる多くの机。 毛等利(言)の撃のとほしき称來たるらし」 きすとも」 いるの鳥。萬三梅の花い主盛りなり、毛 百鳥(名)多くの鳥。いる

百重張陣笠

b

是一一神代紀。「透。發展(音)而發之」 の事をとり行ふ屋。記当乃於其處作。変や、襲屋(き)ます!…

和

漢三字圖合三符、俗云、毛也」

もものな 股質(名) 夫條の略。 橋府 ももぬき・ぐつ や 類型 一説、取引の類なりと。例为 東級元、作りたる深杏。 股まで入るやうの物にのみの数でくる) 皮にて 株式前六 以 · 数解各「差 · 長八尺串」 ゆきをはく」 官裝束抄「五位は指貫に 白猪の 皮のもも

ももだち 股立(名)将の左右の、股 ももたーがみ、百田紙(名)肥後國よ

の處。今曹豐女、袴の股立を引き開けて

もちつみ-のよね(百種船)を見ょ。

り、獅子が一ひさど」 **ぜろきもの。父子相迎「凰癥がももつづ**

ももつづり 百綴 (名) 種種つぎ合せ

もちだち を とる 取股立 ももだちを 見すれば、股の雪のやらに白きにし の側面に當たりて明きある、其の缝止め

ももて

種種の工夫。いろいろの方法。君女

百手 (名) ■さまざまの手だ

矢二本を一手とす。病院 看聞日記録※廿五年 五枚羽子板*「百手を干手と手を砕き」 🖶

挽弓•葦矢(株工男作。」 機式/大製版、今に用ふるもの。 内裏式神『闌司二人各持』 存えこ 良著。紺布衣、緋木植、特。桃弓・葦矢・桃枚・

た五十三年にかけていふ語。七億和「モ

百足 (自動") 繁くあり。

ももての や 百手矢 百手"に用ふる ももての たっしゃ 百手遠者 百登百 绣。皆矢谷、、最希有也 泥焦(百五十以上以)金簪(程),百手器中者 五十 矢以上巾」的者然。朱霄、百矢以上爲。 五矢,决《勝負、二百 矢髎』百手程が百手内 凡矢數二本稱。一手二百本謂。百年手二和 學1之由有4有增二,雅州府志共,注「楊弓申時 「射』小弓」中區比開腦頭也,於《田向」可、射。百 射鸛の語。矢数二百を百度に射ること。

港者、究竟之上手一期散、可、令。同道1也」 中の射藝の達人。四季 庭訓往來至7百手

「江海所《以能爲《百谷王·者、以《其善下》之 なれば、水の心のそむ 〜 よぞなき」 老子 稱。夫木!! ももたにのぬしといふたる街

漢三才國會共生 纲與,席相去七閒半、每以。

あ谷の水の流れ注ぐよりいふ〕 海の異

は袴針りにても、大力設立取り歩行」 昔昔物語! 昔は往來する侍衆、上下著或 つまみあげて"衞又は袴の飜に挟む。

鳴のはねがきももはがき、君がこの夜は E 我れぞ敷かく」拾遺單三百別振き羽かく はねがき(略羽振)を見よ。古今豊三晩の 数多たびかくとと。しぎ(鳴)の條 しぎの ■も我が如く、あした侘びしき数はまさ 百羽掻 (名) 鳴の、羽を

の桃湯あと篇なるべし」

月間集『嗅のねざめにすぐる時間とそ、10-10 百箇(敷)もも(育)に同じ。

獲形に射成しければし 矢。又、其の数の矢。盛衰記汁に発見射

的の上手にて、百手の矢を以て 的を淵

えはあづまをおへり かつきがえは、ほつえ は天をおへり、中つ 多く足らひてまり。 古春紀二毛毛陀流録 毛多羅佛(祭人)やそはの木」 馬「百不足録

ももちの人の楠ぬらしけれ」 字鉄集 百

方様御小者、もはばき、脚半は、十月五日(戦引)に同じ。真然、宗吾大草紙で終期公(戦引)とはない、敗駆(巾(名) ももひき 内野の御經へ御成りより、三月三日まで 被、用伙」

をもしませ 股寄 (名) あまおほひ(雨

あらばやし 桃林 (名) ももの林。株 ももいき (猿股引)の古稱。義義後先三異國の馬乗949-728 段引(名) 国さるももひき

にぞ射留めたる

(名)【動】むささび(鼯鼠)の異

明末前三 御曹司の練鐸の太刀の、ももよせ に連へば、太刀の腹寄に當たりぬ」を保元 れ」目のゆくさ(鴨跖草)の異名。

ももひきがけ 股引掛 (名) 取引を 常興日記天文八年十「御走宋六人城改八日雨 狭き筒駅の服。 の敗まで、膚につけて足を通して字CCく は、飲の皮を設引のやうに持へて」大館 編山姥三股引掛で三味線とは、茶漬に鯷 穿きたる値なること。股引を穿くこと。

くがしれており、百称鳥(名)【動】らぐ) ひす(紫) の異名。ももっろっ

ゆゆとせ 百歳 鄉以下、人,自《東西壁外砌、著《百度代》 又、あまたの年。萬門百年はりに老い 印数百なると

りがねさら(猫)の異名。 纂「友をなみ川瀬にのみぞ立ちゐける′も る」目毎川に棲む千鳥の異名。和泉式部 鳥に傳ふ行のよの程も、ともにふみ 見し うぐひす(於)1の異名。拾遺愚草でもも千 千の群鳥の窓に取りまがへていふ、整理! 行く」||微動]|(ももいろ鳥より暢能し、百 來れど君ぞ來まさね―古今妻 ももちどり 門の復の賞もりはむ 百千鳥(ピピ゚)、千鳥は

百傳

(枕) 百と多くの處

もちどりとは離れかいひけん」図[植]か 塾に遊ぶ なり、ことの外にぞ春めきにけ かしぞうれしき」失木三ももち鳥朝けの

ももて-為 百手會(名)百手を引る 覧『百手の的五尺八寸也、三十三杖に立ふる大的。 楊紫節用「百手的/2½」 探棍集 日子的 (名) 百手)的 (名) 百手)に用 弓場の榛等、大的の如し」 章輝以『百手的 は大的 なり、謎て的以下 て、卅三人して卅三立に射ると也」四季 而晡時恩」晴、可」有《百手》之由、三品申之 看明日記以本日二日 雨降、百手會班引、

鳥、数多の鳥。いろいろの鬼。萬吋吾が鳥、数多の鳥。いろいろの鬼。萬吋吾が る(百足)に同じ。記ざモモ知陀波(***)で ももち-たる 百千足 (自動)) ももだ

明る寮は勃歩に、改まれども我れぞふり

度と雖も食ふべしとの義に出づと〕古 江次第四世(依,不,進,百度,止,宴坐)例」 昔、公事の時、大炊祭より供する飯の稱。 聞、田向に行く」 ももどの ぎ 百度座 王炯の、百度を 孵起。座®#著。百度座こ 江永第編『王食はん爲めに著する座。西宮記ルハタ『王

舌川でてよよむとも、われは厭はじ戀は ももひろとり

2

数多く重なるこ

ももなが 股長 (名) 足を伸ばする ももへはりの一ちんがさ だる、雑兵の具なり、治世になりて後、武 もや 「陽(名)霧の深きものの粉。 る所なり、身に華具足を潜し、頭に長れを 笠。我衣「百重はりの陣笠、信長公の時作 上に総重にも張りて'盗塗り にしたる陣 (名) 下地を竹にて棚代に組み、紙を其の あはぬかも」 の演ゆふ、百重(マ゚*)なす心はもへどただに と。幾へも重なること。萬門み熊野の浦

た、肝毛の中に 無く 最にて心のを入るる もも ほぼづき

置く事かと。真文 光源院殿御元服記「御愛

働さるる"御暦はももまゆ也」 事にや。或ひは桃の寅の如く、二つ餠に

てはぎたる矢の十五東三伏せ有りけるる別窓の矢の熊原太平記計で、日島の羽にる別窓の矢の熊原太平記計で、日島の羽に もやもや 百百夜 (名) もも-むささび(名)【動】むささび(既息) ずは、かくふるほどにまづぞ梢なまし」 を、百矢の中より只二筋拔きて」 伊勢集でもももやもあひ見んことを頼ま

きざす。繚紀『萬物昭斯毛延②始天』萬十名の 前 (自憲三 まえり 「春は石巫(な)夏は糠に、紅の錦に見ゆる秋 「きがむのを野に毛由流ほ三人の」萬年心 の山かも」薬の 機ゆる秋をなす。 萬三かぎろひの療流式 には火きへ毛要(ジワつ思ひ懸ひ) 国火の 火つきて炤上る。燃焼す。 (自動ぶ) 間火焼けつきておこ

58

もゆる みづ 燃水 石炭油又は石脂油の もゆる つち 燃土 石炭・泥炭の類の稱り 光り見ればや人のつれなき 古今世三夕されば盛よりけに燃ゆれども にかくに思ひわづらひねのみし泣かゆし む。 萬千見つ つあれば 心は 毎砥(砂な、か 目情熱盛んに起こる。 心の中に悶え苦し も身にしあれば、夜蹇物ぞ戀しかりける 天智紀「越國歌」版土(214)與《燃水二 標。くきらづ。天智紀「越國獻ュ燃土與エ

19-196 (名、顧)王の鳴る音にいよ語。配は奴那登母母由兵(元)領し 環境に 治療性 **9−よ (服) 感嘆の意を表はす語。記与み** もよっち 1) し持ち は母與(型)、めにしあれば」 萬「かたま毛 奥(エ)みかたま 持ち、ふぐ し毛奥(ヨ)みふぐ 運歩色葉「萌黄・青黄で」」 萌黄 (名) もえぎ(萌黄)の靴

もよぼ・ ものひ	ずすこと。 東久担宝のもよびせられけ がすって、 東久担宝のもよびせられけ のでは、
ACLE MARK COLUMN COMMON COMM	
498	でも、他のは、大きなのでは、大きないが、ないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、ないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、大きないが、ないが、大きないが、大きないが、大きないが、ないが、ないが、大きないが、ないが、ないが、ないが、ないが、ないが、ないが、ないが、ないが、ないが、
ゆりは	*と、人をやりまか人の かりなり だり 使切(名)夫の物にほと に は は ない は に は に ない に は は ない に は に ない に は は ない に は は ない に ない と ない に は ない に ない と は は ない に ない と は は ない に ない と は は ない と ない と
もるた	の (大)
もろう二十六三	

る矢竹を、三年目の八月に切りたるもの。 と。平家洗字多くの馬共を見けるに中間

もろ-おや 諸親 (名)リャゥしん(用しきとを一度に取ること"麒麟もろ-おこし 諸起 (名)食事の時、梅 る歌。本末の歌《片歌の對)著聞『察爺もろ」らた「諸歌 (名) 上・下を具った もろうすあを 諸瀬青(名) 襲の色 るとうたふ時」 弘人長にて、もろ歌をおほすとて、外山な 日の名。表・藪ともに薄寄なるもの。順衣

れから(焦香)"に同じ sepy # 色の名。とが 諸親 (名)

ぎ給ふし

かひ物せられよ」源的でもろどとろに念

もろかぎ 諮鉤(名)物の物び日に、 爾維特與"片條等]與一 玉海於黃原生一柳著榜之間、彼、乔、精,御腰, 也、緒に縁を調合はせて機るなり」 精布重変記版三級上品を誘言加賀といふ つを開力に作ること(かたかぎの對)

> いふ語。『もろこし婚』目もろとしきび かりける」「巨支那より來たりたる物事に

(蜀黍)の飲。

に見しかば近かりき、思はぬ中ぞけるけ

もろとしの はうでもん 唐州竹 遺座

官にめされて作りける時に」 古今翌三寛平御時に、もろこしのはら 使に隨從する判官。別使に次ぐもの。

まれて四肢なるものの稱。酸は一説、三歳もろっかたがへり、諸片同・(名)、魔生 もつがく 諸角 (名) もろあぶみ(諸 「魔は紅中もろかたが、り遊ざぬなり、今 「魔は紅中もろかたが、り遊ざぬなり、今 変に紅いない。 で家 魔三 百首 年 を見か… のこずこ 幾年かとやに倒はまし」 鱧)に同じ。(鐙の一方を片がくといふ雪)

時、桂に灰をつけて、簾に懸け又頭などに ち二葉ながらも無にかく、あふひや神の 引の山に生ふてぶもろ かづら、踏典にこ 名。輔親集「山人のもろかづらとぞいふ むるしなるらん」 (位)あふひ(奏) の気 ぞいらまほしけれー 仮拾渡場声もろかづ いふ。あふひかづらを見よ。 後撰書三足 かざすもの。姿のみかくるを片かつらと 粉季脳の一年世珠本。高さ七八尺的に達 す。葉は大形、披針形を呈し、平行脈を有 ろ腰ながら企のしつけ!

もろがひな・諸殿(名)左右の路。雨 が子 ぞこ骨状筋骨紊記[三歳を鶴敷形]] なれば、今日のみあれにあふひなりけりし 行投合将山「長沼五郎が踏験」 夫木吐 もろがへり 空とる ね(唐船)に回じ。勢語「おもほえず物にみあるこし」がね、唐土船 (名) からふ 我が樹に生ひ出づるものにも劣らぬものと(焦人)に同じ。字漢保護堂もろとし人もつこしてひと。 庄二十人 (名) からび あこしきびの粉にて乗りたる蘭子。 片照もろこしてんご 観楽開子 (名) も 断今國姓益語三居士勝子の新粉纶ち」 餠勢に製して食川とす。たらきび。 に大なる間錐花序を作る。 種子の粉末を す。花は小糠花序に集まり、此の花序史 かなし

み、多くの神。しょしん。神代和古衆神もろっかみ、 誘神 (名) もろもろのか もろがへり 諸同(名)三年をまたる 魔を引き据えて、あはづの原を狩るや離 じ。泉神紀「賜,大舶與,両船(元)」三艘衛隊 精神の、雨るいはひは君が世のため」 (注行) 千般日当いにしへの聊の御代より 3和 (名) はしぶね(蟷艇)に開 もろこしもち 蜀黍餅(名) 町季の めろこし-ぶみ 唐土書(名)からぶ もろこしもじ 特を摘って振りたる前、一代男点歌の歌 としの文字、漢字。 なとの騒ぐかな、患蛆の寄りしばかりに

名

あっくち 諸口 (名) 胃馬を挙くに、 に腹窩して踏具足したる中燗五百餘人! (小具足)に同じ。太平記院職六片小手ろ-女七く 諸具足 (名) こぐそく 一覧、糸糎にて達くこ 中、疎竹類の一種。機の長さ二寸に達す中、疎竹類の一種。機の長さ二寸に達す 整に、関係師・消など持たせてい 子川に多く流すと云ふ。うろこ。 (「側面に黒き三條の線あり。 近江図路 るたなごに似たるもの。背黒くして腹白

もろ-ごころ 路心 (名) もろ共に心を (新子峰)の略。運歩色葉「薪子等」 もろくちかみ 諸口紙(名)前祭"に と少符と踏心に、ことか(おり)しれずあつ (ちにひかせ) 目紙の一種。 障子紙に用 ふるもの。55世目でらし(銚子)'を見る。 あるひはのり口にひかせ、あるひは もろ きらび ٤ もろ思なり」

き焼につかはされ」古今原もろとしも夢にて支那を呼びたる様。 関語者 (表記の違 **ゆろよ-どめ** (名) [額]あをざめ(青蛟) の異名。 度合。瀬里例の説のもろさは、ふとこば あること。開東千雨機三銭が緑が諸差を きあげたる、まがまがしくにくし」 れ出でぬるもいと苦し」

もろ-ざめ(名)【職】あをざめ(青鮫)」の らた、差差網(対じと引差機(対じと、左右に もろっさしなは、 議差網 (名) 馬を奉 二筋のつ者くること。 飾抄「和較中国公棚

もろしらが りつうし、消え易し、萬八みなわなす後の方し、脆 (形) 言とはれやすし。砕 期くて、汲などとぼれ易し。源泉原山お手ならしにもいかが」危険で、戦が、日心 (た)合も、杉縄の千昧にもがと願ひくらし ろしにたへぬとの葉の 露よ りも、あやな つ」源当りからの紙はもろくて、羽夕の御 くもろき我が謎かない

もつすぎ (名)【植】むろ(杜松)の異名。 重なりて精白髪| 醒路災点夫締結しらが が(次白髪) に同じ。誘馬身は既に老い 大道狂言の当時脛を打って打って打ちなやろーデね 諸脛 (名) 左右時間の脛。 までそひたりし顔父」 いてやりますで所し

次(E)の乗れる船。即代紀、「以、熊野新手 「뽦手にすぐれたりとの御感狀をは、小幡 ん」国話の部隊。各軍。各隊。甲陽軍鑑片 ので。まて。成之仏『なも』 も生ひにけり、勝手に人は引きて植るな

揃ひてすること。一些。相似に。

もろとや 雨鳥屋(名) もろことも 諸共 (名、副) 共共にする 左右の肩に打つ點。(かた點の對底を 肺武紀「一時(X5,)刺 處」後撰で占故郷の もに若要摘みてん」同時間。 但時起 野邊見に行くといふめるを、いざもろと 山城に下さる」

なく」枕三犬のもろどゑにながながとな や見ゆらん蛙さへ、水の下に てもる際に | 概をもろ無になせ」 源峰点 さすがなる御 もりの神しまことの神ならば、我がかた 相思。相戀(片戀の對) 六帖『みどUV 諸戀 (名) 五ひに思ふと

ほぐして、土俵へ引っくり返し」

ずかくる心は」

路白髪(名)ともしら ろ膝を薙ぎふせ」

あろそで 諸袖 (名) 左右の城神。若 の裾絲のほつれそめ」

「いなの憩のもろほにしてよ、枯れち聴も 聴、そつかぼ(八東穂)に同じ。韓東 神樂歌 歌、をつかぼ(八東穂)に同じ。韓東 神樂歌 あろびん 談髪(名) 左右の質。態質。

水子の二曲を舞ぶこと。(片舞の對) 綾秋 訓抄は「東子・駿河舞をは 踏舞といふのな なく

もろっなり (名) 【植』なはしろぐみ(胡類 もろねり 諸様 (名) 特好級の一種。もろねり 諸様 (名) 特好級の一種。 過共に刃あるもの。(片刃の針) 萬寸卸た もろ-は 諸刃 (名) 刀剣などの身の雨 すこと。 國外爺『錦鮮女は織り附き、母もろーなみだ 諸原(名) 精典に誤を流 ち器刃(ミ゚)の上にゆきふれて、しせかもし の袂の諸浜」

はあふひ(雙秦絅華)の異名。積拾道8章 ・ 「本」の「本」の異名。積拾道8章 げたる白米を用ひて醸したる上品の酒。 もろ-はV 諸白(名) 麹も米も能く精 「もろはぐさ引きつらねたる今日こそは、 つる天目にてと有りける時」 膝突 与ひたもの 路白をしひて、前に見え (片白の對) 狂言短流 諸白を飲めやれ」醒 永きためしと聊る知るらめ」拾玉三年を へて神も知らなむもろは草、一かた なら

だ。りゃうはだ。 もろはだぬぐ、脱諸肌 五人兄弟三雙肌脱いで立ちかかれば」 け、もろ肌をあらはす。大肌ぬぐ。質我 ■全力を添くして事に常たる。 (名) 左右复方のは 開係を開き絵

のういび 諸族 (名) 雙方のひざ。左右の膝。太本記念は縁らの路地葉いで刺れ着とさせ、大本記念は縁らの路地葉いで刺れるとで刺れるとない。 合。(片庇の針)海人選折。まりロべき髂院 もろはや 諸羽屋 (名) 阿庇なる鎌 カラはなざなた。諸刃長刀(名)長 家に、もろはやの對無有」之歟」

我。長町女腹切出しめた心の諸蛇り、共 路総 (名) 柄絲の後様の 人。多くの人。しょにん。衆人。佛足石 もろ-びと 諸人 (名) 聞もろもろの し」が記、衆人様。日谷の人。各人。得には、今日のあひだはたねしくあるべ ため」萬雪梅の花折りてかざせる母呂比 歌「みあとつくる石の響きはあめに 至り 地さへゆする、父母がため毛呂比止(はりの

歌も則緒舞は初めより歌之」

なむ戀ひつつあらずは」願刃。

もろや 諸矢 (名) 甲矢(な)と乙矢で、 もろっちつ 路 (名) 多くのもの。すべ もろもっと(名)「動」もるもっと・の歌り。 ##AE(88)はさけくと申す(婚りくまでに) ##AE(88)はさけくと申す(婚りくまでに) 侍神主,就部等、附(23)開食至宜一萬二份月 にて荷なひ出だせる歌」

今ぞ館しきもろやしつれば」祭羅牌は一今 日よりは子の日の松と称号、るろ矢に千 と。拾澂雅華別く人もなしと思ひし梓弓、 代をかけて引かなん」

べての事物。諸事。西事。若風俗与心にもろうわざ、諸、蒙(名) 多くのわざ。す もろっやしろ 諸社 (名) もろもろのや サラーわちがひ | 路倫達 (名) 巻の軽術#W もろ-ゆがけ(一具珠)に同じ。味時 あらねば、もろわざらつる事かたし」 の低めにこそ跡は垂れけめ」 **帖三むそぢ餘り閼に滿ちたるもろ靴、世**

ゆうを 諸緒(名)精() 理する時、俎上にて庖丁もて先づ魚の體もつけ、薬分(名)料理の語。魚を料 鼻。字治約遺ピふりたる家のもろをリど お折戸 (名) 二枚関の 「雨折戸に上門、薄檜皮の御所」 の中へ落ち入りにけり」嫌殺記回す七老様

修養束抄「島精子、仙洞は右肩、 経家は小りろ・女切 ・ 諸眉(名) 永條の略。 西三

もろみ・どけ ・ 高味 酒 (名) もろみのもろみ・どけ ・ 高味 酒 (名) もろみのある値。 どぶろ(・ もろうみ 誇味(名) 頭して未だ精を誰 もろせゆきばらし 諸眉鳥帽子(名) 鳥帽子の間の、左右の雙ルにあるもの。 誘眉、諸家十六以前諸眉、以後左眉也」 (中されつる者かな) 田じゆもん(呪文) 教記が1所を当一の返答、文文·句句面自 教記が1所を当一の返答、文文·句句面自 『かたばみ・あゃの故にても、ことものよわん 一紋 文 (名) 間あゃ。模様。 枕だるに」狂言『『くわっくわつの文唱へ』 呂望しら玉と金鍔焼を、一つ竹の皮に包40~ 物(名)もの(物)の靴り。浮世風を振づること。鳥には頭分けといふ。貞杖 脚半成空に向かひ目を眠り、日に文呪し 又きやうもん(緑文)の略。太平記世院なる んだといふもんだちうし

へも依り向かふこと。 庶吐武蔵野の草葉 は寄りにしを」〓[植]うらじろ(楽白)なニ 母呂武吉(マタ)゙からかくも君がまにまにわ めたる徽章。 もと家家にて衣•袴 などのるき上衣ばかりぞあやし」 〓家家にて定 紋(けい)・麦紋(かい)・棒紋(い)、季あり。各係を りはをかし」源[5巻] 興あるもんつきてし

模様に一定の形を用ひしより起こる。

隻駅、盛敷記針が設づ用目(*)にては脱 もろうめ 諸目(名)二つの目。 周眼。 (単結)に所じ。源氏鳥附子折『揉鳥帽子、 てよく見んためにて候」 懸緒の扱のもろ精び」 み、片目にては読み」高忠聞寄「もろめに

もろしち 諸持(名)人とい共に持つ の人人の口棚ももろもちにて、この態べ 共同してするとと。 土佐日記 か 董標記之用"車在∗衣服"貴賤通用"帛褐盤無の旗を卷いて文を腱し」先曹遊駿映画、県の旗を卷いて文を腱し」先曹遊駿映画、東の旗を巻いて文を贈し、大田記手は大明之職「中見よ。もんどころ。太平記手は大きに |特門|| 名義抄[門]|| 磯陀@母 立不、中、門|| 衛令[凡闕(前門)者 第一陽門鼓撃乾、即閉(の)|| (利)| に同じ。 宮 入る」國事物の分類上の大別。 を受くること。弟子となること。 坤、其易之門邪」回師の許に就きて教へ べて物事の出入・経由する處。 易經濟等[乾機機の町に拘らず民家一戸の事也] 四す 口五丈、奥行十丈と定めたる法令にして、 大の称。京の水墨(紫紫一門 といふは関 位。即ち、民家一戸にて、閉口五丈、奥行十 ■祖武天皇の袰めたる平安京の坊保の單

(雄)門の姥にも用あり (糖)門に入りては笠をぬげ、我笠を寄て (装笠)の体を見よ。毛吹草「門にいらば人の家に入らぬものに同じ。 みのかさ 笠をぬげー 門の尼にも用あ

朗除「茶館散」問念の漫」 (離)門の前の痩犬 駒者も後投あれば勢 ひ題を問へ りに同じ。かど(門)の係を見る。 |問(名)もだゆること。 門 (助敷) 大炮を敷ふるにいと 類問

語。顯宗紀「稻斛銀銭一文」権官坊式「鉄 もん - 文 (助数) **国**銭を敷ふるにいふ んぎ(文水)を見よ。特統天泉歌軍法『草りいふ』 足袋の底の長さを計る語。も 足袋中は九文半で指先もはいらず」 一貫交」四(一交段を蛇べて敷へたるよ

一。下文を見よ。韓遵失為『互にて作れもん"うち、紋打(名) 互にてする失ち出だしたるもの。 一杯。織田(はなどにて種類の模様を打ちん-いんでん 紋腹帝 (名) 廉帝の もん-576 紋鶉 (名) る小き面がた又は紋遊くしなどを用ふ めんてら・紋打など云へり. **鶏革の一種。**

もんっかたばみ(名)【権】

所教章(E)科、

即 **もんか**じらう もんかじちゅう (門下侍中) (名)げき(外配)の唐名。拾芥抄中下大外もんか-含含よらう 一門下 起居郎 る模様つきの頼物。下文を見よ。即海町もんかう 一紋縞 (名) 奥州より鹿す 申売組。(平甲斐綿などの對) もく-おり 紋織 (名) 軟を浮機にした もんおめし 紋御召(名) もんおり じかはをどし、相子本献)に同じ。 又は紅紫色を暴す。めきしこ・の原座。 紋を有す。 花は 繖形花序に 排列し、紅色 角形の四小葉より成り、下雨に褐色の斑 形の鱗片を具ふ。薬は根出薬にして倒三 |中務卿中醫輔中香修]||一中務卿中醫輔中香修]||一下侍郎平賴盛、與、西厚」 给芥抄钟 つかきのすけ(中務輔)の唐名。元享釋書んか-じゆう 一門下侍郎 (名) なか 歷七中新鄉衙門 一旦随ひ付きたる門客に非ず、累粗相傳可。参向」之由申也」 盛衰記書 (編集) 汝等は 客。東繼一·結果四年「相」率門客等「爲·御迎」 を玉はるには多く此の物也」 はこくもちに 残したり、武家 より御ふく る故に、紋例を縫ひにせんがために、多く て縞にはあらず、地合厚く、地紋うけ縁あ ず折田だす和物なり、花磨草・わり紋有り 人。門弟。弟子。後漢傳※5「鑷4徐經歷」聽 ■飾の門に入りて数へを受くるもの。門 食門下」 同恵 太子日选:門下(供:太牢) 澄以下子息門聚多以鉄[御供]] 駅、多く朝政となりて」東鑑士588年 養 らづらかは(劉革)を見よ、 漿草隠の多年生草本。根茎は上端に廣卵 「紋縞はもんけんに似て模様繁し、奥州よ LINT可,依何下,之由望申」 酸阿尔里等。 略「紋革包」 經、途路の。門下こ でか 一門下 (名) ■門の下。邸内。 、人の許に近く何候すること。東鑑一時 のおめし縮緬。 めし(紋織御召)に同じ。(平御召の對) 門。同族。宗族。平治は間門業の 紋形 門構 門下生(名)門人。門 門客 (名) 門下に在る食 紋織御召 **2** 8 紋のかた。模 ||一を棒へ作 (名) から (名) 数 3 武用辨 ばき(外配)の唐名。 拾木抄ュ茶(大外配門を ・ カール人 (門鑑 名) 門の出入りを ・ カール人 (門鑑 名) 門の出入りを ・ カールトラション・ する役。東畿西十二省諸高高校定。御備衆師もんげざん-けつばん 問見 祭結番 あん-ぐわい (門外 (名) ■もんのは 教を、組みたる車。海人漢芥里教車、家家 もんく-いり 文句入 (名) 都都遵の 句の文章の間。文章。朱史音等析(文句) 40ん-Ⅴ 〜文句 (名) ■文章中の語 あんざりがた 紋切形 (名) 日秋形を もんき 文木 文尺 (名) 「寛永通 げき(外配)の唐名。 拾芥抄中本 株に同じ。 拾芥抄里等大外配程題門 大事んかれいし 、門下令史(名) 太 株。一代女子小袖のもんがらも、此の程もん」がら 紋柄 (名) 模様の柄。数 ・様をうちつけたる紙。氏器 もんくかん 市に関係せざる人。其の専門以外の人。 (文官)に同じ。 ること。さだまり。きまり。 して作りし度なり、後に俗に文木と云本」を取り摘文とはいるが、俗の後を「すと を以て他の長る故名」本明度 景權衛 考定 「文木徳八なり、今初録 る物指はど。曲尺八寸を一尺とするもの。 もんく を つける 附文句 日苦情を さ。いひぶん。「もんくをいふ」 **鳰爲」誘」■理屈がましき言句。 いひぐ** 尺、算。複子、用、之、其寸大率、合。錢一文徑、 律原發揮「文尺程ン者、以曲尺八寸1份1一 るよりいふ〕 足袋の長さを 腹るに用ふ 田川三衣裳は破れ垢附けども、世の常な の焦出しに縫ひ切りの機能の子」雙生隔 用之こ 文、網代組付、又補除書、之、顯驗驗上人學。 どの插入したるもの。 への一。明·問・明等の如く、学を園も門 もん・げん [門限 (老)りたること、又:其と等 [日語:4] **問見祭結番、同被"定下、撥部助實時主泰"** 五燈合元「是門外漢耳」 門以外、其の物事の範閣外。 禮記問可使以人立。于門外,告。來者《一冊專 賈錢の徑八分なるを十文合せて一尺とせ いひたつ。日名目をたつ。理屈を附會 氏なり、後に俗に文木と云本と記むる故、知の復を一寸と 門闕 € ŝ 宮城などの ぶんくわん (名) と。北東海道商郊間、郷、周毅成。文王之もん。こい (間解 郷を削ひただすと もん一ざい 一文才 (名)ぶんきい(文才) もんと、一門戶(名)同門と戶と。か 「数」可の保敷が文字なるもの。RのBストレーけいすう (文字保敷 名)もんじ-けいすう (文字保敷 名)もに(文字)に同ちんし (文字)に同ちんし 中央に、左右各二枚づつならび生ふる館。 もん-さんとめ 紋棧留 (名) 機留革 もんさや 紋紗綾(名) もんさく 一文作 (名) 即座にをかし んじゃうはかせ、文章博士(名)も もんじゃう)文章 (名)ぶんしゃう もんじゃくはかせ、文章博士(名)も もんじゃう うない さんしゃく しんじゃく 「文籍(名)書籍:書も、 もんさう一文章 女句。文辭。新永代藏二丁稚の年季手形もん-むん 一文 言 (名) 文章中の語句。 もんじーぬめ 跳ること。世子中樂談議「文字なまり・節 もんらう (文章)に同じ、 口腔の門戶に當たるよりいふ。 「もんざうのはかせ召して、願文つくらせ 恋 にていはず」 調べにも」 問題与もんざいをばさるもの の文言」心中二枚繪草紙「響紙の文言」 もんこをなす 成門戸 一家を興す。 り也"女字のなまりたるが文字なまり也」 靴り中だてにはの字が訛りたるが節なま は Ax++Bx+C の A.B.C 等の類。 だえじに 様のに 口・もんさく花も咲く」 鄭様かり衣、お腰をちよっと掛け帶と、軽 よらざるはなし」大磯虎稚物器ごとの女 一代男当大道に出でて文作、何れか腰を みある文句を作ること。又、その文句。 もんと を はる 服門戶 の流儀。一派。「門戸の見」 **、門、小日、戶」 觀令「外日、門、内日、戶」 目** 門戸(東:水火)無事、與音』 急就篙「大日 下。格子「已經」旬日二 孟子濂三暮 叩。人之 一家。家。蜀志※誓使、立[門戸二 ||三日分 又、一派を立つ。 此兒也」 一派を成就す。梁雲※芸成門戸/者、必 ご。阿札 一文字 (名) もじ(文字)に同 一問死 もだえ死ぬること。も **3** 8 (名) ぶんしゃう 夜、門を閉づる 一家を構ふ。 もんべら(門 模様ある紗 風流女 の機様ある美濃紙。県で 一切を持ちる美濃紙。県で 代、官府にて新人の訴狀を受理したると もんしゅう 一紋章 (名) かどぐち。又、極めて近き處、太平記計算、もん-しゃう |門脇 (名) 門と垣と。 もん・じゃ 文者 (名) 単者。 翳者。 (名) ぼうびきもんづけ(棒引牧附)に同ちんし-ほうびき 紋紙棒引 (名) もんじ-はうていしき (文字方程式 もんじゃうことでけふせい もんじゃうしゃう-さんね もんじゃうしゃう 一文章生 (女章)に同じ。 下。問狀·者定例也、而以。問狀:致·狼若·事、 **梅又は管領より發するを問状御教育、頭** 記[塔][67] 講(尚書) 講師友梁、問者孝朝」又、講經の時、講師に質問を發する人。 合 したるもの。ax+b=o.ax*+bx+c=o 等 にて、渡世をくらせど 他、其の人を次第に京官に被、任也」 「文章生の券にて精國の旅に任じたる者 に任ぜらるるものとす。 郷処製抄文学生 ものの、任滿ちたる後の稱。 次第に京官 位 (名) 文章生の諸國の掾に任じたる 元夏給。御題、永清天潔」 事、人倫賈賞之御制以前、致訴訟」於、給問 人又は率行人より發するを問狀を書と とれに問款御教書と問款來替とあり。執 き、輸入に發して其の答辯を求むる沓狀。 の時、関庭に著きて法を講師に問ふ僧。 佐は聞とゆる文者にて、自筆に是れを書 武道にて候、御稽古も終へかし」 藤荒華「土 大名丹前能 天狗だのもし・文字ぬめなど の、件間の秩滿の後を交章生散位と謂ふ 文章生者、武詩殿、以下你已上二 紀略即 二年に初めて之を縱く。式部省式よ凡補 武部省の試験に及節したる者の称。天平 釈:者、任:證文:可、流(質人:也) 奸能之企、釋、透、罪科二 新銅追加 共三人質 「在《夾格」則引之、俗門獨則應之 「涼燥数改まって、門精補不」全」機子法官 いふ。御成敗式目帶張城衛門有就派別、被 |問者 (名) 大法令の論義 一文章得業 ŝ 一文章生散 紋のしる ź もんじゃう-みげうしょ 一間状御教書 もんじゅうあん 一文章院(名) 古世、文章及び歴史の事を挙りたる博士。 もんじゃう-ほうしょ 一間状奉書(名) んじゅ(女殊)に同じ。 糠澤名義第二女殊もんじゅ-しり (女殊)師利 (名) 目も ゆゑ(文殊會)に同じ。關東往還記「四月廿七人じゆとう 一文殊 講 (名) もんじ 門跡。保充照響門主は故院の御佛事のもん」しゆ(門主(名)門路の住職。 もん-じゃく 「奉行人三方也、隨《思思」中,之、先本御下文 「杏原大江南氏、建山立文彦院「分』別東西書たる所。 本朝文 粋ら編集を過程を記れる 當知行之有無,也熟報 菅家の學含として、各其の子弟を教育し 勞、爲。奉行·傳、仰、素退申。領狀己 \$P. | 東中務入道素湿可,成 | 問款御數也 目「帶」問於御教書「致」狼藉「事」 車體計大 (名) もんじゃら(問狀)を見よ。仰成敗式 **拌手繼護狀先型相傳系跡等加、此具書間、** 之撰也母母所。此職一者、心轉。于參議一也」 本級類聚三代格『勒、大學寮、文章博士一 九日行(文殊講こ 路に、鳥物殿へ御出ありけり まかり出でて、もんじやくのさき 追ひ散物が海峡域を増し、日中行事「瀧口のとより 大學祭の内に在りて、東曹を江家、西曹を 之由、伊岑前司行期,大台欄左衞門尉長泰 守護、或一門親類等、以。於行奉書、被、等。問 本泰行所可、上、之、所、申無。子稱・者、其國 もんじゃら(間状)を見よ。沙汰未練書等# たるもの。拾芥抄中本「文章得黎生成才」 生 (名) 文章生の試験を受けて及第し 簡利」■男色をもおりていふ語。 (膝)文殊の智慧 人にすぐれたる智慧あ |豫保約単||文殊、獅子に乗りて| て、もんじゆの鉤質あひ見つるかな」字 共に契りしかひあり 拾遺草馬かびらゑに て、智慧を主る菩薩。 語。如來の左に侍し 妙吉祥と露す〕佛 申しめぐる」 やく、御湯殿のはざま殿上の口などにて らして、北の陣より 始めて所所のもんじ 人」職原抄三文章博士二人、紀傳道儒士 Manjusri 妙徳また るにいふ語。「三人寄れば文珠の智慧」 文殊 (名) 門跡の住職。 ŝ 古代、 免 もつけ。ぶんしよ。もんざ。宇津保護 もんじゅしり・ほさつ(文珠菩薩)に同じ。 もん-じん (問訊 (じん(訳)も問ふ義) もん-じん (門人 (名) 師の門にある もんじるし、紋印(名)枚のしるし。 もんじよみ 文字讀(名) 漢字を字 を入るる袋。平治時間、入道の、柿の直垂もんじょようくろ 文書袋 (名) 文書 李領圧庄本公卿・官符・宣旨・院宜・蓋文等、つ(文櫃)に同じ。 醍醐業事記杜薩原等 雲もんじょ・ひつ 文書 櫃 (名) ふみび 税帳の枝文の一。文殊會を行ふ料として もんじゅ(文珠)に同じ。大機冠もんじゅ-ぼさつ 一文殊菩薩 像に関じ。朝野郡敷計・野は当年たが神もんじゅしひほか 一文殊秘法(名)前 (名) 佛語。貧言の修法の一。天養・日月もんじゅーはちじほふ 一文殊八字法 離を安置せる堂。機留当文珠堂に金童子もんじゅったう 一文殊堂 (名)文務書 徐,厄那,之"子日不可、門人厚郡,之」 宋君,明,世家(清)。 論語の出「瀬 邇 死、門人 東宮勢(京) 古 語の出「瀬 邇 死、門人 け、龍尉草をたついぐさと訓む類。 に交衝袋頭に掛けたるが」 特悉在,實級,件文書撰等」 いへる、まことにしかえることなり」複数なげき願ひ滿つべしとなん、もんじよに 「かくの如く人のなげき除き給はば人の 會概然部 を記入するもの。 政事要略医せて、民「文殊 股(文殊會こ | 関東月1回 年 動、今 東天下諸國股(文殊會こ | 関東京和1年 動、今 東天下諸國の。 綾後和二天天平年 摩瞪大法師 位泰等、の。 綾後和二天天平年 摩瞪大法師 位泰等、 臓、釋尊の御法をうけ」 宫寺,可,修,文殊祕法] といへる際立あり」 節用「女**御**のと」 開前後三日、殺生を禁じ、會事の男女に三 國並びに髂寺院にて行ひたる法會。此の 殿(合)修/文珠八字法二 蝕・疾病・災厄の時に修するもの。 療後紀 紋。狂言表常 風信が袈裟には紋印が御座 の通りに訓髏すること。石竹をいした 毎年割き充つる敷急稻の利子に購する事 勝五戒 を授け、文殊の號を唱へしむるも 長十年より始めて、毎年七月八日京畿路 大法師位圖仁、及定 心院 十輝郎等於仁書 60 交列会に

大概冠三文殊菩 **3**

たた

二次至

もんえる

問凱して」醛醛煲「槍をさっと振りまはと。 太平記する線が職工化の一句を聞いて

膝・門前の小僧習はぬ殺を贖む

勸學院

及,原門外可,設,後曜二 り。史記聽言一從公岱,廷尉,資客壞,門、 の後は豪歌を囀らと同義。くわんがく

雀を捕ぶる継(ごを雖るばかりに寂寞た

すを見て、共の鑑太刀を投げすて問訊し ●√意英備」■閉口すること。降参すると 問。 婆見論「比丘於」佛所;問題こ」 書訪問

すること。後漢書語の朝夕間訊、施膳薬

を作る人。特に、文章生の稱。字津保祭徒

3

後漢琳雖与「師《事扶爲馬融」融門徒四百餘

もんとうに (名) 【植】こえんどろ(和褒)

三対策問頭博士」桂林遺芳抄「爾・被」下。章生の試験問題を出だす博士。両官記帳章生の試験問題を出だす博士。両官記帳 宜旨,以前加賀守從四位上蘇原僚後,松

問頭博士系策試數」

問頭博士の宣旨の申文。桂林遺芳抄^は順博もんどう-せうしぶみ 問頭申文(名) 武衆之申狀也」 實見問頭中交者、省官故障、為,他能,之時、

もん(数)」を見よ。骨我扇八景山放れ馬の数所(名)家家の定数。 較所」等前用「放所 tha」

の長官。官位令「從六位、主水正(売)」」 わんとしゅう(一角宗)の俗称。下文を見もんとしゅう 一門徒宗(名)佛語。 寺門徒、赤は門徒宗抔と唱へ候得共」
東京報寺にり「一向宗义は本願寺宗、又は本願 よ。淨土與宗御宗名故障書之彈文竝雜鈔

の手形。人名を書きたるもの。物の數を もん-ぜさ (門籍 (名) 門の通行許可

袴を著けて腰刀を帶び、肉食姿帶す。 跡に奉仕するもの。髪を剃り、僧衣・白

宗門人別帳。突合せ、笛頭之者 遠居」的例集成絲縮錄照片,點門脈致し候者共之內、

黄紙之篇時里 名主役之儀に 付数 門際 候

mきたるを門階といふ。 職員合権に 背一

もんぞ

に同じ。字津保護(「もんぞといふもの見ん」と、一文書)(名) もんじよ(文書)

給へつきぬれば」

[] 中務省式「若要網寫「封門籍」

もんぜき の はうくらん 門跡坊官 門 の門跡も赤拜。任座主:跡、是多し」

口跡者提井•青蓮院•妙法院是也、此の外 | 弟と成らせ給ひて」 海人漆芥 山門三 平の門跡に御入室有りて、承鎭粮王の御

建て鉄を門前町家と相唱へ」

室町幕府の諸奉行の一。門跡に賭する政も人ぜき-ぶぎゃう 一門跡奉行 (名)

た何じ。 翻筋斗 門機と云ふものを設けて、水流通窓の自に同じ。新編式巌風土記稿は『堤を築き、ののくち(様日) 在をなせり とんばらがへり(蜻蛉辺)

どのつかさ(未水町)に間じ。東宮年中行 (我が)する毛利の早業」 宙がへりをなす。川中島合戦『筋斗打 いは、お孫使。梁其堅持。子門内こいは、一門内(名) もんのうち。 3 いちもんなし

文無

(名) もんちゆうじよよりうど(問注所寄 人)の異稱。 時の職。

町野掃部大夫」 代)に同じ。花替三代記録祭曜三間注所代 もん ちゆうじょしつじだい(間注所執事

もんほん(教

之間と

新人・論人を推問して其の辭を記すこと。 ・問注 【問ひて注②す義】 太宰府實物使田口爲友、井蔵井闕方尊申又、訴訟の對決。 朝野群戰六官第47間。注 て勝りしを まりにけり」砂石集芸われと間注に負け 問記」者関当六波羅にて同注すべきに定 もん-つき 紋付 一格別すぐれたり」

町時代、法廷に於ける縣人・論人の間注のもんちゆう」は一間注記(名)鎌倉・室 もんちゅうじょ 道道太」縣官記為前時公問注所町野子為。蔣文太平記與東海三東使門注所信義入 屬入演藝信宅災、重書並問注記以下鏡失」記錄。東鐵井五澤外三「町大路東災火、大夫 上者、可、爲以問注所,數之由何申候處」 重服;之間、問注所子又有。御発,台。出仕,之 ■もんちゆうじょしつじ(間詮所執事)の 紀,明之,管領寄人·右衛奉行人等評無也」 奴婢親人學契・和與狀・負素證文等、課實 人『問注所者、永代沽券·安堵年配·放券· 簡問為(其所)被問注所行,數」庭訓往來 する所。長官を執事とし、下に執事代・容 く政事をも奪れど、主として訴訟を聯節 人を置く。東鐵門鐵建二歲。荷亭東面廂二 余・室町のは、政所の別職にて、政所と同じ、心ちゅう・じょ(間註所(名) 冒鋒

すべき事柄。||単論となりたる事件。単 もんだいの かいはふ 問題所法 【數】 問題に與へられたる條件を滿足する如 のかい 問題解【数】次件に 花鳥·唐 (名)間注所の長宜。許定衆又は引付衆事もんちゅうじょしつじ 一間注所執事 もんちゅうじょくにん 一間注所公人 人)の異稱。太田康有記録第四年門注所公 人不足中町の、石山市舎人に

もんだん(女段(名)ぶんだん(文段) す〕問答をなす。略写写とかくの是非をあん-だふ 問答 (他動。) (前條を活用 ばらんだはずしてし 世二四段王と問答の次でに申しけるけ」 間答事族(なりて良久し」 紫寂記サ六紫色

内にて町家を建て、其の收入を以て寺院 の費用に供する地所。集古文書十二、等情に 「假闘寺門的地市、任」耠殴面 月錄 之旨、恭 じ。保完蘇軍队しながら女談し給ひけもん。たん 一文談 だんぎ(該線) に同に同じ。易林門用、「文段だ」 るに」太平記「玄糠交談」

戸幕府の刑法にて、選放の概さもの。を もんぜん-はらひ 門前排 (名) 最江 |を許さぬもの。大小名にては轍を没收 行所等の門前より追ひ辨ひて再び醇るこ **秋如,件」寺社法則共成地「諸寺院町並至** 黎傳數地、后住之間可、彼、致《樂地修功」之 定紋を附したる提燈。一代男子紋提燈のもん-おやうちん 一紋提燈(名)家の もん-ちゅう 一紋帳(名) 特書・並王等以門地「路」建」 特書・並王等以門地「路」建」 類変のに称らぬか」

生故史、編《於天下1.

人)に間じ。後漢皆[80] 哀氏樹」思四世、門

阿生

敷と門前地之差別」

駅の送き 翻灣を具へ、漫淡の栗色を有す の一種。数は断くして厚く、表面に放射 古樂府「送、客亦不」遠、足不」遇、門福」」んーすう 、門一福 (名) 門のとばる

(名)【動】軟體動物中、斧足類

門のとぼそ。

まど「一前の小僧經をよむ」 あん(勸學院)の條を見よ。和歌民のか

・代官師の門前に至りで訴ふること。費人 前地に建てたる町家。寺社法則は成形「高めんせん」ならや 門前町家(名)門 致し度き儀」問題文化七「寺院之内、町家相 書百箇條が進門前がを持ち門は一回面命せ の門前に到りて越野(アシ)すること。 天明 輸成化等境内 古門前 町家 相止め、寺地に して、屋敷の門より 追ひ拂ふもの。 御定 んとして來たる者に、面食せずして認ら もん-ちゃく 一関著、捫著 粉サする を捫者すし を施退し、畠山の家督の如く又武艦の家 細川勝元配「貞邀等が分として三職の家 こと。いさかひ、もめ。あらそひ。苔簓。

る寺院。宮門跡・攝米門跡・清藤門跡・准 ■皇子・皇族・撰談・清雅の子弟の入室す 右記Khiệ『弘法・慈覺·智哉大師等門跡』

しせること。

僧侶の門流また門葉の稱。扶桑略記冊 世界 智能大師『門跡=労有』所』申支』 中

〜門跡 (名) ■寺院に於け

とひせむること。 (名) もんじん(門

門跡・脇門跡等に分かつ。 太平記三皇 梨

中宮大夫屬三薯尿信法印」

とと。門ひまた答ふること。保元友的工作

之由禮(何含二)

もんちゅう-ぶぎゃう 一問注奉行(名) 東鐵語四代第二「江民部大夫以康、問注奉行 じて其の詞を注記するごとを掌るもの。 鎌倉幕府の奉行の一。訴論の旨趣を開撃

もん-ちりめん。絹布重寶配「京紋縮緬、流 美濃より出だせども、中中京数ちりめん 蒙之出依,有(共開二 「六波羅 御沙汰之閒、間注奉行人、緩怠迎人」(名) 前條に同じ。 貞鑑世界に第三年

もんてい け(棒引紋付)に同じ。賤苧環「紋付けとてもん」 弟と成らせ給ひて」 其の紋所に印を付け遺はすなり」 戸家家に持歩行き或は巡避して、心心に じ張付けて、扨紋一つを何鉞と定めて、戸 て板行にして、其の中に一つ紋を別に封 歌舞伎役者の紋所を集め、ひらにならべ 傘」問三御紋付の著物・羽織」 人)に同じ。太平記!、男,承慎 親王の 御門 紋付 (名) ぼうびきもんづ |門弟 (名) もんじん(門

らい。科、てんちくあふひ(名)【植】猪牛兒 子、在:諮司(者) 論語語語(分子有:疾,召)門弟/-でいし、一門弟子(名)もんてい、わん-でいし、一門弟子(名)もんてい 其の眞城。易經世界不,出。門底二周禮天帝あんてい、一門底」(名)門と庭と。又、 「学」楼。門庭留門庭、門相當之地 第子[日]

門房。漢書を工黄門包看各持4門扇、王入の人・せん 、門房(名)門のとひと

各へをなさしむる題。目ざしあたり研究 ・問題 (名) 目前ひかけて

|問題(名) 目前ひかけて

と。 平家六人三階紀・野地 して、途にあつ

と問題 もだえて気軽すると

ちんだ・ぶみ 文書書 (名) もんぞく文 もん-ゼソ 一門族(名) もんえふ(門薬 あんとう一門送の出を見述ること。

どをさへ終ね出でられたらん、いとかし

5死ににぞし給ひける」 栗書王当僧韓閣 門跡之訴狀(又命(于門跡)遺,狀也」 中,命。子門跡奉行飯尾具衛太夫,仍後。彼 務を奪るもの。藤原軒日級長輩六年三於北殿

ときとと

クレ之方動し

して施上郷しげし」白居易詩「門前冷落 整發記書が「連發れる家家も、門前な保っ

|門前 (名) もんのまへ。

もんだい

間じ。

ひの事件。 [2](数]解を要する問ひの稱。

(膝)門前市を成す。 共の家に出入する者

は皆一時に蒙みを達して、門前市を成多し。太平記高(seps) 第一名 本公 の人人

もんたうと一紋唐紙(名)

き値を求むる運算の質。

章等の模様ある色階紙。低は

糠)門前雀斑を張る 助ふ人なく、門前に

もんだら

問答

聞ふことと答ふるこ

もんちゅうじょしつじ-たい

一問注所執

し堂上花の如し」

梗を具へて、糊形に排列し、紅紅色の花鐸 し、株部は淺裂し、蛇銀頭を具か。花は長 **顕狀心臓形にして、鳥踏総狀の斑紋を有** 並の下部は精進木狀を呈し、特種の 香氣 を有す、南部亜那利加の原産、觀賞用と を放つ。葉は長き葉柄を具へて互生し、

事を親ること能はざる時、とれに代る舞事代 (名) 間注所執事が事故ありて

もんちゅうじょーだい(間注所代(名 もんちゅうじょしゅう 間注所衆

もんちゅうじょ-よりうど 問注所寄人

『中日部大夫仲葉"可、相a乗問注所審人! 問注の事を取行するもの。東鑑+元元世 問注の事を取行するもの。東鑑+元元世 の。東鑑+元元世

もんちゅう-ぶぎゃうにん 一問注奉行

又、其のもの。二代男子御紋附の答 紋付 (名) 紋所を附けたる

きき

もんどり うつ とんばうがつりをなす。

左体標単立 もんなし (一文無)の略。 事 五月 もんどんづかさ、ひを称る小」 もんと一門徒(名)目門人。教へ子。

院をのみ尊信して、他を願みざること。(鎌門徒物知らず一門徒宗徒の一途に彌 *「買ふ人を門徒と相すやりめもどき」 ら(門徒宗)の略。 叉、其の信者。 俳諧新選 多以。僧尼嶺士|爲。門徒二 目もんとしゆ 大衆は申すに及ばず」册府元亀「百姓家、 人」=宗門の信徒。保元曠懸の御門徒の 主水 (名) もひとり(主水)の もんのくるま 文車 紋車 白く養く故に、老人の文車を自輸取のは ともいふ。四位・五位の人の乗用。ひらも 栗る車の物見板は黒漆地に胡粉を用ひて 年の用、2、壯年の車には續格子の上に模 代車の一種。物見・立板・屋形等に種種の 棟を描く"之を願文といふ。 老年の 人の 郷を願く。眞紅(ダ)の總は壯年、白總は老 模様を描きたるを以て名づく、又、棟融に 「はかせ・文人八十餘人」

もん-とう 一問頭(名) 文章得菜生の 本、選為(問頭)看例也」 本、選為(問頭)看例也」 本、選為(問頭)種林道芳沙爾林宗道(問題) 本、選為(問頭)種林道芳沙爾林宗道(問題) 本、選為(問頭)種林道芳沙爾林宗道(問題) 本、選為(問頭) ののは45年三のは物見ののともいひ、数第二・第三・第四の幅の總務。兵具襲記「墓路心・の・の 紋幅(名)外墓(す)の名所。 私心・の・の・ 紋幅(名)外墓(す)の名所。

袋又は肌者とす。和併模風土配以数羽機和にして、柔く毛立ちたるもの。多く足和にして、柔く毛立ちたるもの。多く足の人は、紋羽、(名) 総布の一種。地質 して名品となる」 Ê

もん-ばら 一門膀(名)門の通行許可 おんぱ、門派で き(門籍)を見よ。 四亥年より紋がと名を改め、諸州へ出だ 寛保の頃より府下に 售る もの あり、明和陳は時代の頃より府下に 售る もの あり、明和の前の第34元文此の品書孫六歳りといひて編六の得 奈門の流派。運

お史等単新務参學、管庫必復4門間、不1遺を心はつ、門内間(名)家がら。門地の秦平河内通牒(改善門柱に打つ者板) もんしはだたへ もんばつか、門閥家 あった 様にしたる羽二重。二代男『紋羽二重』 紋羽二重 (名) 機能 (名) 門閥のよ

遊廓にて、五節句などの祝日の稱。若風 2 動所。青標紙環境「門番所之事」 もんばん-しょ「門番所(名) 用を守る者。 門番。 「門番が明けてやりけり猫の黴」 青好馬水涌出、泉州県に 名)門のとびら。宋 かどもり。曾我扇八 (名) 門の出入・開

日家門の光荣となること。陳鴻文照響男もんよび ←門楣(名)□門上の薬(☆)。 樂。首領。頭領。太平記七機員「義貞不肖 不」到,僕女作,她、君看女知爲,門相」 て、節句配の日を数日といふ は五所なれば、五節旬を小槽の数に准へ俗『教日の拵へ』洞房語関『数日小袖の数

他といへども常家の門楣としてい路代弓 観の名を汚せり 8 かどびらき

交人

3

漢文及び漢詩

\$ \$ \$ \$ \$ \$ \$	一門間に同じ、狂音融音、女性の
は、大き、 即次 「	
	(48) (食物の)に によりある(食物の)に によりある(食物の)に によりある(食物の)に におりませい お者・利用 (物の)に 以上 (物の) に においまい (の) に においまい (の) に にいまい (の)

もんび・・・もんべ

그